

門出かど

虎山

平成三十一年（二〇一九年）五月に元号が令和になった。平成の前、昭和の激動を生き戦後の困窮と高度経済成長を支え、世間からは「金の卵」と呼ばれた一青年、山田正男は昭和二十八年春十五歳で故郷を離れた。

昭和十三年一月二十六日、山田正男は五人兄弟の末っ子として、雪深い長野県飯山市で生まれた。正男の父は、正男が生まれる一ヶ月前の、昭和十二年十二月二日午前二時二十分、中国の南京近くで、斥候の任務中敵銃弾に討たれ戦死した。軍からの知らせによれば

「中支那江蘇省金童橋ノ戦鬪ニ於テ名誉ノ戦死ヲ遂ゲラレタ趣電報有之候条此段及移牒候也」と書いた書面が届いている。ここに死亡時刻が細かく記入してあった。

父は大工の棟梁として地域で活躍していたが、昭和十二年十月「赤紙」が来た。

十月五日新潟県新発田十六連隊に入隊した

十四日新発田を朝早く出発し

十五、六日は神戸泊

十七日は神戸港を港出

十八日に門司港を寄港して

二十日には揚子江に入った

二十一日には上海北五里にて野營

二十二日に敵、味方の銃砲を聞きながら仮眠。

二十三、四日は銃弾をくぐって深夜の行軍、本隊近く四百mまでに進軍した。夜が明けて隣の兵隊を見たら銃弾に当たり死んでいた。行軍は続き死体がゴロゴロ。

二十八日一緒に入隊した故郷の知人が死亡したと知らされた。戦鬪を続けながらの行軍が続き、十二月一日夜半、父は斥候に出て、敵銃弾に撃たれ帰らぬ人となった。

遺骨と遺品が届き、葬儀は雪の降りしきる中行った。遺品の中に父が書いた日記の様なメモがあった。そのお蔭で出征から戦死までの経緯が遺族も知り得た。

その頃正男はまだ母のお腹の中に居た。

昭和十三年一月二十六日、山田正男は五人兄弟の末っ子として生まれた。この時母は親戚から「この子をこれから育てるのは大変だから農家をしている親戚に預けたらどうだ」と言われたらしい。その折母は「いやどんなに苦しくともこの子は私が育てる」と言ったと聞く。

五月十九日、「日本軍、徐州を占領」が報じられた。巷ではこんな歌が流行っていた。それは作詞・藤田まさと、作曲・大村能章の「麦と兵隊」だ

徐州徐州と人馬は進む 徐州居よいか住みよいか 洒落た

文句に振り返りや、お国訛りのおけさ節、ひげがほほえむ麦島
此処に「佐渡おけさ」が出てくる。たぶん徐州に進軍した
兵隊は、「甲信越」生まれの兵隊が多く派兵されたのではな
いだろうか。

昭和十四年九月三日、英・仏が独に宣戦布告し、第二次世
界大戦が勃発した。

昭和二十年三月十日東京はこれまでに無い大空襲を受け
た。東京は開戦後百回を超える空襲を受けているが、三月十
日が最も大規模な空襲で有ったといわれている。

四月三十日ヒトラー、ベルリンの地下壕で自殺する。

昭和二十年四月一日、米軍はついに沖繩本島に上陸。六月
二十三日、沖繩の日本軍は全滅した。戦死者九万人、一般島
民十万人死亡したと言う。

この多くの戦死者や市民には全て家族がある。残された家
族がこれからどう生きていくか、その苦しみは正男が身を
持って体験している。

正男の住む長野にも八月十三日、午前六時五十分頃、練習
機の訓練に使用している空港を中心に空爆が有った。

八月八日ソ連、対日宣戦を布告し、満州へ進撃開始した。
このため満州にいた多くの日本人家族は略奪され殺されたり、
命からがら逃げた家族も、日本に辿り着いたのは僅かと聞く。
後に結婚した正男の妻もこの時三歳。父が満鉄に勤務して
いた関係で、北京で生活していた。しかしその父は現地召集
を受け、陸軍兵として戦場に派兵され、北京で母子二人の生
活になったと言う。

ソ連参戦で北京から母子二人で日本に帰る旅を始めるが、
交通手段が分からず、情報も無く、治安は悪く、それでも母
は必死に此処を脱出する手段を試み、三歳の娘を連れてから
くも逃げ延び、韓国釜山から貨物船に乗り門司港に上陸した。
引揚者を乗せた船は釜山港を三隻出港したが、その内の二隻
は米軍の魚雷を受けて沈没した。

母子が門司港に上陸した日は、敗戦が決まる一週間前であ
った。この一週間が後に施行された「引揚者援護法」の対
象外とされ、この恩恵にあずかる事はできなかった。

昭和二十年八月十五日正午に、天皇陛下の玉音放送がラジ
オから流れた。日本は敗戦し、進駐軍のジープが我が物顔で、
埃を舞い上げて疾走しだした。

正男は母から折に触れて、父が生前していた大工仕事の事
や、腕が良く仲間にも慕われていた、等を聞かされていた。そ
して母は「なー正男、働くようになったら腕に職を付けなよ。
体で覚えて居れば誰も盗めないんだ」と度々教えられた。

母は五人の子供を産んだ。上二人が女、下三人が男の子、
この五人を女手一つで育てた。その子供達の教育方針はただ
一つ「人様に迷惑を掛けずに生きろ」であった。

母は収入を得るため、道路工事の砂利運び、地盤硬めの「よ
いとまけ」そして役場からの日雇い「ニコヨン」等日銭の入
る仕事は何でもやっていた。資格も免許も無い。母は何時も
働いていた。

日本を占領したアメリカ軍「GHQ」はマッカーサーを中心
とし、日本国の民主化に手を付けた。日本人を軍国主義か

ら民主主義の国民に変革させるために。

まず特別高等警察、通称「特高」の解体。日本国民は戦時中「特高」と聞いただけで貝になった。内務省、司法省の廃止。日本共産党の合法化等、GHQはこれ等の改革をしていた。

その結果なにが起きたか。労働運動が活発化し、共産党が元気になった。

世界は冷戦時代に突入し、ソ連、中国の台頭がアメリカを刺激し、日本の民主化の方針転換を余儀なくされた。それは共産主義の弾圧に表れた。マッカーサーは昭和二十五年（一九五〇年）五月三日、日本共産党の非合法化を指示するに至り、機関誌「アカハタ」を発行停刊処分にした。加えて官民間わず共産思想と思える職員、社員を免職にした。これを世間では「レッドパージ」と呼び、ほぼ復職は叶わなかった。レットテルを張られた人は転職も困難となった。

正男達兄弟はそれなりに成長し、長女は「代用教員」になり、小学校の先生になった。次女は「これからの女は資格が無くしては生きられない」と戦死した父の兄に言われ、母は次女を師範学校に行かせた。学費は兄から借りてだ。

その甲斐あって次女は正式な先生として教職に就いた。長男は家を守らねばならないため、高校卒業後町の郵便局の職員になった。次男は中学校卒業と同時に、近所の知人の紹介で、東京巣鴨へ大工見習いとして上京した。

正男は中学生になるとすぐ新聞配達を始めた。冬は厳しい雪の中での配達であった。

昭和二十八年三月正男は中学校を卒業した。当然高校へは進めない。中学在学中でも進学組と就職組と、進路により別

れて授業を受けていた。

世間は中卒を「金の卵」と称して企業からの引く手は多く、学校の廊下の掲示板には企業からの求人広告が多く出ている。正男はそんな中から東京都品川区にある製造会社を選んだ。その社名は聞いた事は無いが、正男の家の近くの先輩がその会社に就職していると聞いて、先輩が入社している会社の方が安心かと。母にも言われ決めた。

就職するに当って母は「どんなに辛くとも辛抱しな、人が嫌がる仕事は自分から進んでやりな、先輩に可愛がられるんだよ、まず三年は帰りたいと思うな」と言い聞かされた。

正男は風呂敷包一個を持って家を出た。母は玄関先で下駄ばきで見送ってくれた。

就職する五人と引率の先生は、飯山線から上越線の越後川口で、新潟から来た夜行列車に乗った。列車は混んでいて正男達は通路にしゃがみ込んで場所を確保した。

ふと列車の振動で目をさまし立ち上がって外を見ると外は薄明るくなっていた。窓から住宅の有る景色が流れていた。埼玉県の上尾辺りを通過中だろうか。

列車はスピードを緩めて上野駅の十三番ホームに入った。

正男達はホームに降り、駅構内の広場に行き、会社の名前を書いた紙を持って迎えに来ている企業の方々と会う事が出来、五人はそれぞれ引き取られていった。

正男も総務課の林さんと言う四十代の人に引き取られ、上野駅からこげ茶色の国鉄、京浜東北線に乗り、品川の一つ横浜寄りの大井町と言う駅で下車し、線路脇の細い道を品川方面に歩いた。十分ほどで従業員五十人程度の会社に着いた。林さんは正門前の平屋の社員寮に正男を案内した。社会人の始まりだ。

雪道

紙屋 里子

横殴りの雪が降るとても寒い日だった。詩子は、今中学二年生。三人兄妹の真ん中で、何かにつけ嫌味を言い激しい勢いで責め立てる母から逃れたい一心でよく父の実家に泊まりに来た。女同士ということもあるだろうが三人の兄妹の中で詩子だけが母に非道い扱いを受けていた。

ある日、食事の時、おかずの魚が兄妹達二人より半分ということがあった。

「私のが一番小さい」と小さな声で言うと、それを聞いていた母が、目を吊り上げて睨み付けた。

「文句いうなら食べんでもいい」と激しく言って魚を取り上げ、兄と妹に半分ずつ分け与えた。吃驚してただ見ていた。余りに吃驚し何も言えなかった。結局、その時の食事に魚を食べる事が出来なかった。二、三日してから食事時に魚がテーブルに置いてあった。母が詩子の顔を見て睨み付け大声で怒鳴った。

「詩子、食え、文句ばっかり言って」

母には何も言えない、ただジッと我慢する以外に無かった。何か面白くない事があると訳の解らないことを言って当たり散らした。でもそれを人に言ったりするとどんな仕返しをされるか分からなかった。

ある時父が、母に言っている声が聞こえた。

「お前は、詩子にきつすぎる」

すると母の怒気を含んだ激しい声がした。

「詩子が悪いんだ」

何が悪いのか分からないが、母には何も言えないという事だけは分かった。

そんな訳でこの時も一人で泊まりに来ていた。叔父夫婦には二人の娘がいて優しくしてくれたこともここへ来る理由の一つになっていたと思う。

夜八時を回ってそろそろ風呂に入ろうかという時間だった。

「おーい、徳さんいるかね」という声が外から聞こえた。叔父が、急いで玄関に行つて戸を開けると冷たい風と雪が吹き込んで来た。呼びに来た男の人は中に入らずに戸口の外で何か話していた。

「そんなら直ぐ行くよ」という叔父の声が聞こえた。

「もう二、三人誘つてくるわ」と言つて声を掛けに来た男の人が戸口から離れた。

「詩子ちゃんの住んでいる村の人が、車で走っていて、バス通りの国道筋で雪で動けなくなつたらしい。誰かを見るので、一緒に行き」と言つた。

その頃、村の殆どの家に交通手段として自転車はあつた

が、自動車を持ってきている家は数えるぐらいしかなかった。誰だろうと思ひながらいわれるままに叔父に付いて集まり場所に行った。五人の男の人が集まっていた。雪はまだよく降っていて震えるほど寒かった。

「さあ、行こうか」とさつき呼びに来た人がみんなに声を掛けた。多分この人が国道で雪に埋まっている車を見つけたのじゃないかと思った。

歩き出すと、寒さは忘れた。

高い石垣が見えた。病気になった時往診に来てくれるお医者さんの家だ。まるでお城の石垣のようだった。上の方は見えなかつたけれどきつと立派な家だろうなと思った。

暗い空からまるでゴミの様に雪がひっきりなしに降ってきているが、うーんと高い空は灰色にぼやけてはいるが月が明るく輝いているのが見えた。不思議な空だった。国道まで一キロも無いとは思ひが、雪道を歩くのは、なかなか時間がかかった。でも叔父達がいたから恐いとは思わなかつた。叔父達はみんなスコップを担いでいた。そしてどの人の顔も強いが優しく見えた。

国道に通じる三叉路が見えてきた。そこに、白い自動車が停まっていた。その車はまるで雪に埋まっているような感じだった。何処かで見た事のある車だと思ひが、思ひ出せなかつた。

「ああ、あの車か」と誰かが言った。

「そうだ、あの車だ。雪に埋まっている。あれでは抜け出られないだろうな」と喋り声が聞こえた。夜の雪道を歩く事はほとんど無いのでかなり疲れた。だが何とか立ち往生している車まで到着した。

助けに来た人が車に乗っている人に声を掛けると、二人降りてきた。その二人を見て吃驚した。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん」と言ってしまった。降りて来た人は私の家の隣りの人だった。

「あ、詩子ちゃん」とお兄ちゃんが驚いていた。一カ月程前に結婚した人達だ。二人とも、着物を着て降りてきた。何処かへおよばれに行っていたのだらうと思った。

「車の回りの雪を除けるので、離れて下さい」と言われ私と二人は、邪魔にならないように木の根本の所に行つて立つて見ていた。よく見るとその三叉路の木のある界限に雪が沢山積もつていてそこに入り込んだらもう出られないだらうと思うほどだった。吹き溜まりで大木から雪が落ちて来て積もつたのだらう。助け人達は協力してスコップで車の回りの雪を取り除きタイヤが通るスペースを作つた。

「さあ、もう良いだらう」と雪を除けていた人達が言った。車が動ける様になつたのだ。二人は、お礼を言つてまた車に乗つて帰つていった。

私は母に非道い仕打ちをされると、隣の家によく行つた。おばさんも母が私に辛く当たつていてことを知つていて行くときよしという感じで色々聞いたりせず置いてくれたり面倒を見てくれた。家に帰るのが嫌でグズグズしていると、

「ご飯食べていき」と言つて食べさせてくれた。日曜日の昼が多かつたが、大抵お兄ちゃんといつて息子もいた。いつも面倒を見て貰つていた方だった。詩子が、困つていてころを助けたり、声を掛けたりする事は一度もなかつた。

だが、今夜は違つた。詩子が助けた訳じゃないが、雪に自動車も埋もれてお兄ちゃん達が立ち往生していたのだ。この

お兄ちゃんは中学校の先生をしていたし、父親は、詩子の通っている中学校の校長先生だ。うんと偉い人達だ。そんな人が雪に埋もれて身動き出来ず見知らぬ場所ですごに住んでいる人達に助けられているのを見た。人間ってどんなに偉くても、どこで人に厄介になるか分からないんだなと思いつながら、二人の車を見送り、また叔父さん達と家に帰った。

次の日は、昨日の大雪降りが嘘のように晴れていた。叔父と叔母にお礼を言つて一人で自転車で行って来た。叔父

家に帰ると父も母も昨夜の出来事を知っていた。

多分お兄ちゃんが、家に帰つて話したのだと思う。

父は、大変だったなといつてにこにこしていた。

母は詩子が一人で余所に泊まりに行くと、いつも嫌味な言い方をしたり、どうしてこんな事をさせられるのかと思うようなことをさせたりするのに、今度だけは違った。

「隣のおばちゃんが、人間は何処で誰に世話になるか、わからんなあつて言つていたわ。そりやそうだわなあ。詩子もお兄ちゃん達を助けに行つたんだな」と小さな声で呟いた。

隣の家のおばさんは母より十歳以上年上で、ご主人も息子も素晴らしいので一寸かなわないと思つていたのかも知れないが、ゆうべの事があつて逆転とまではいかないまでも挽回したような気分になつたのかも知れない。

詩子は昨夜の事が、遠い過去の不思議な出来事の様な気がした。雪の降りしきる暗い道を叔父達と雪に埋まって動けなくなつた人を助けに一緒に歩いた。本当にあつた事で助け合うことの大切さを叔父達に教えて貰つたのではあるが。

残照

福富 陽子

生計に關わる物資は村内で調達し、国からの助成や保障は受けず、「自然に任せ生きる」を合言葉に、「胡桃村」へ集まつてきたのは高齢者も含めたおおよそ三十名。住人自らがそこを終の棲家に選び、命の最期の灯が消えるまで自然に抗わず生きることを望んでいた。

土地を提供したのは、かつてそのあたり一帯の山々を持っていた五十嵐建造という老人だった。建造は老衰で亡くなるまで自分の山で生まれ育ち、一九五九年、九十八歳でその生涯を閉じることとなる。

建造の死をもつてこの山の「世襲靈木守」は事実上、消滅した。建造の遺言通り、何百年と育んだヒノキを含む山の所有権はすべて「胡桃村」の住人頭の中田佐市に継承された。

建造の先祖を辿ると、江戸時代以前よりヒノキを育てる林業を主な仕事としていた。切り出されたヒノキは由緒ある神社や寺院、あるいは宮中に納める神聖なものとして、平地の民との関わりを絶ち、醇乎たる品物を納めることが使命であった。その由縁か「ヒノキ」は「靈木」と特別に記され、血縁のある親族に限られた集落の者は世襲に従い、何代にもわたり「靈木守」としてひっそりと山で暮らしてきたのである。幾度かの戦争時にも集落の男たちに出征の赤紙は届かなかつた。「靈木守」は秘密裏に守られ、戦火と一切関わ

らずその名の如く靈木を守ることだけに専念した。

若き日、建造にも妻がいたが、ある正月に実家に帰ると言い残したきり妻は集落にもどることはなかつた。山の暮らしは厳しく、町育ちの娘には耐えられなかつたのだらう。建造はそれきり別の嫁を娶ることもなく生涯独り身を通した。

建造が三十を過ぎたあたりだつたか、事件が起きた。山で育つた靈木が、国の御用達から外されてしまつたのだ。それにはわけがあつた。ある日、建造の叔母トヨが切り出した木の下敷きになり亡くなる事故が起きてしまつた。「靈木に女人の近寄ること、触れることを禁ず」と、昔から御上からの御達しがあつたにもかかわらず、実際には集落の女たちは男衆の山仕事の手伝いを常としていたのである。トヨも男たちに混じつてよく働いた。

毎年、都からやつてくる「靈木引き取り衆」もその事故を境に姿を見せなくなつた。彼らは江戸時代より材木石奉行手代の配下として江戸や京都まで靈木を運んだのである。

トヨの死はこの上なく神聖であるはずの靈木にとつて不浄なもの、嫌疑に値すると判断された。その後、収入を絶たれた集落の若い者はやむなく山を下りていった。結局、山に残つたのは数人の老人たちと建造だけとなつた。

それでも、建造は靈木の世話を止めることはなかつた。食

べるものは自給自足で賄えた。沢では魚も捕れ、胡桃の木や自生した蕎麦にも恵まれた。陽が昇れば起き、沈めば床に入る。昔から継承してきた生活を繰り返すだけだった。

引き取り手は途絶えたが、自分たちの育てた霊木は必ずや必要とされるにちがいない、建造はそう信じて働いた。何百年と続いた「霊木守」には頑なな誇りがあったのだ。

建造が五十になった頃、建造はたまに町へ下りていくことが多くなった。集落の年寄りの誰かが病気になるっては医者に診せに行くことが増えたためである。かといって病人を背負い山を下りるのは容易なことではなかった。木の運搬に使っていた馬もとうの昔に死んでしまった。

あるとき、幾日も熱が下がらない甚助という従兄を背中に負ふい、建造は町へ向かった。山の尾根から見下ろすと黒ずんだ雨雲が山の麓まで覆っていた。いつもなら獣道をなぞるだけで進めたが、二日間続いた暴風雨のせいで山道はぬかるんでいた。背中の甚助のからだの上から更に雨合羽を羽織った重みでバランスを崩しかけそうになりながらも建造は慎重に一歩ずつ足を踏み出していた。と、そのとき、低木の折れた枝が建造の脛に突き刺さった。思わず足を見ると赤黒い血が脚絆を染めたが立ち止まっている時間はない。じきに日暮れがやってくる。背中の甚助は意識が朦朧としているばかりだ。集落に引き返すにしても町へ下りていくにしても過酷なことは同じだった。

かろうじて麓まで辿り着いた頃にはあたりに闇が迫っていた。町のわずかな灯が遠くに見える。

「時間がかかってすまん。大丈夫か、甚助さんよ」
建造は背中の甚助に声をかけたが、低い唸り声が聞こえる

だけで返答はない。雨が小降りになってきたのが救いだ。建造は雨合羽を外し、石の道標の脇に投げ捨てた。

足の痛みに耐えながらしばらく車道を歩いていくも外灯もない道はあてどなく暗晦で、出口のないトンネルを突き進むようなものだった。それでもとにかく泥の道を一歩ずつ踏んでいく。自分の荒々しい吐息も崖肌を流れ落ちる雨水の音に掻き消された。建造は幽々たる闇の先を睨みつつ、ひたすら背中の病人を落とさぬよう歩いた。

一里も歩いた頃、背後から車のライトが近づいてきたかと思ふと、幌付きのトラックがすぐ傍に停まった。

「あんた、霊木の建造さんでやないか。わしはサイチャ」
そう言いながら窓から顔を出したのは、町で大工をしている若者、中田佐市である。

「せや。あんた、町の者か？ 町へ帰るのやったら、ついでにわしらを病院まで運んでもらえんかのう」

建造の言葉にサイチは迷う隙もなく、運転台から飛び降り、背に負ふわれている老人の両腕に手を回すと助手席に軽々と運び込んだ。

「何日も熱が下がらんもんだで」建造の声はしゃがれていた。「中央病院でええか？ ここからやと車で三十分はかかるやもしれん」

サイチは建造の言葉を待たずに車を発進させた。後から乗り込んだ建造に身を預け、甚助は顔色を失ったままだ。

ライトに照らされるたび、曲がりくねった山側の崖面の瘤が次から次と車に襲いかかる鬼の形相で浮かび上がる。

「この人は甚助さんいうて、昔、木曾山で大昔からの植林術を学んできた人や」

「木曾のヒノキは御伊勢さんのお抱えやで、本格的やな」

甚助は唸っては荒い息を吐き、時折大きな甍を鳴らし目を開けたと思つたら閉じ、いかにも重篤な様子だった。

「のう、建造さん。最近、ちいとも木を切り出す様子が無いやないか？ 町の者は心配しとるで」

そう言つてサイチは首にかけた手ぬぐいで額を拭つた。

「みんな年をとつてもうて、木を切るのはわしと甚助さんくらいになつてもうた。古い木は幾百年を超えようもんだあるで、このままではもつたいうでな、それは心配や」

車の揺れに身を任せながら建造はまた擦れた声を出した。

「靈木の御用達の役目が終わりよつてしはらくなるで。いつか山のことで町の衆と話をしたほうがええと思うとつた」

ハンドルを握りながらサイチは建造の溜め息まじりの言葉を聞いた。

「ほな、わしらが山の集落に行つてもええんか？」

「勝手に来たらええわ」

サイチは、建造とともに口をきいたことに内心揚々としていた。噂では、建造は気難しく町の者と話をするのを嫌つていると長年聞いていたからだ。

病院に着くと、甚助にはすぐさま点滴が施された。

「もう少し遅なんだら肺炎で手遅れになつていたやもしれんと言われたで。あんたが車で通らなんだら、どないなことになつていたか」

建造はサイチに深々と頭を下げた。

そんな縁がきっかけで、サイチは暇をみつけては麓にトラックを置き、そこから建造の住む集落へ何度も山道を駆けあがったものだ。サイチはまるで建造の息子になつた気分

山の仕事を手伝つて過ごすのが日常になつていた。

やがて長い年月が流れ、集落の老人たちは次々と天寿を全うしていったが、その後も建造は山に残り余生を過ごした。

「もう、集落には誰もおらんのやし、そろそろ町に下りてきてもええでやないんか？」

サイチが説き伏せようとしても、建造は拒み続けた。

あるとき、床に伏したまま建造がサイチを呼んで言つた。

「おまえにこの山を任すで。役場には前から伝えておるでな。

……わしも、いよいよ終いや」

サイチは、布団からはみ出した建造の手を握つたが、返してくる力はすでに感じられなかつた。

「建造さん、しつかりしいや。町医者を連れてくるで！」

サイチの大きな声を聞きながら建造は首を横に振り、「いらんことせんでええ。人は死んでも山は死なん。ヒノキも、買うてくれる人に売ればええ」と、静かに言うた建造は目を閉じた。これが「世襲靈木守」の最期の言葉となつた。

建造の亡き後、サイチは意を決し山に住みはじめた。サイチが町を捨てたと知ると、別の人間がひとり増え、またひとり、山の集落跡に人が集まつてきた。胡桃も沢山採れたことから、人はそこを「胡桃村」と呼ぶようになった。

村人同士、競い合うこともなく山で採れた食べ物も平等にいきわたつた。そこでは紙幣や硬貨は無用の長物だった。

サイチはかつて見よう見まねで覚えたヒノキの世話のやり方を若い者に教えながら、村の仲間たちと共につましくも穏やかに九十年の人生を最期まで山で全うした。

現在も、その名こそ地図には見当たらないが、「胡桃村」は存在している。

メタセコイアの木陰で

高杉 治憲

栃木県庁から北に向かい競輪場通りを右に折れて上って行くと通称戸祭台に至る。その周辺には昭和六十年代から平成十年頃にかけて開発分譲された瀟洒な住宅街とそれを見下ろすゴルフ練習場が互いを引き立てるように折り合っていて隣接する小高い森に囲まれている。この森には、毎年決まったように二月上旬から八月十日過ぎまで、鶯の美しい囀りがこかしこから聞こえてくる。私は「ウグイスの森」と名付けて一人悦に入っていた。

自宅から一〇〇メートルほど先にある森の入り口から木立の間を抜けて二〇〇メートルほど進むと、目の前に大きく開けて見えてくる長岡公園がある。夏には地下水を蓄えて膝まで入ることの出来る人工池があり、その先には勾配を活かした金属製の長い滑り台がある。公園には一周七〇〇メートルと一、一〇〇メートルのジョギングとウォーキングコースがあつてそれらのコースは、今や大木となつているメタセコイアの木陰の一部が掛かるように設計されファミリーや高齢の人々の憩いのスペースと相俟つて多目的に利用されている。メタセコイアは古代から北半球に広く分布していたがもはや絶滅種とされていた。日本では、昔はアケボノスギと呼ばれ石炭の木としても知られていたが、一九三九年に化石が発見され改めてメタセコイアと命名され三〇〇万年前頃から各

地に生育していたことが明らかになった。その後、中国の湖北省で発見された植物標本から「生きてゐる化石」として現生種が発見され、その苗がアメリカで栽培されていた。終戦後、日本の皇室に挿し木と種子が贈られたことから今では全国各地の公園、並木道、校庭、ゴルフ場などに植えられ、「日本紅葉の名所百選」に選定され改めて古来の樹木として親しまれるようになったのである。

私達夫婦と息子の雄一郎の三人が、こうした風景と彩に魅せられてこの地に家を新築し転居してきてから早いもので既に二十年が経過していた。嫁いで東京に在住している長女の夫婦には小学四年生の姉と今年入学したばかりの妹がいて、毎年、春と夏休みに帰省してはオーパ、オーマと呼ばれている私達祖父母も加わり家族そろつてこの公園を自前の庭のように愛でて癒されている。

バブル経済が崩壊して十五年後の平成二十年に、前職を定年退職した私が義父から乞われて継承した不動産業を営む岡部創建株式会社はバブル期には三十億円の年商を誇っていた。その後、不動産価格の暴落と共に業績が下がり経営危機に陥つて私が継承してから、リストラによる人員整理と不良資産を損切りした後に銀行管理によってどうにか立ち直つて現在に至っている。そして、平成二十四年に義父が亡くなる

と翌々年、夫のあとを追うように義母が天国に召されて旅立った。

「お義父さんも会社が再生する見通しを確認し安心して旅立ったことはよかったと思うよ」

「そうね、お母様もお父様の傍に早く行きたいと、言っていたのだからきつと本望だったわ」

「でも、お二人の前では決して言えなかったけど、雄一郎が結婚して曾孫の顔を見せてくれればあとは何もいらないと、二人してよく言っていたからそれだけは叶えてあげたかったね」私達夫婦の息子の結婚についての会話は、忘れかけた頃、こうして、ふと思いついては消えて行くのだった。

息子の雄一郎は今年四十二歳になる。以前は群馬県高崎市で親戚が経営する不動産開発会社で企画と営業を担当して勉強を積んでいたが、祖父母が亡くなった一年後、宇都宮の自宅に帰ってきて我が社に入社し今年から専務になっている。

会社は私的な自主再生をめざし、価値の下がったテナントビルや分譲マンション、それに建売が半分以上残っている区画分譲地等々二十億円を超える不良資産をどうやって売却し滞っている弁済を促進するかが課題で、父子でとことん話し合い考えぬいても解決の糸口を見つけるには至らなかった。この三年の間に営業担当だった六名の正社員は徐々に退職し、残っているのは既に定年を過ぎても創業者の亡き義父の恩義を忘れない三名の営業と管理、そして総務担当の常勤顧問だけだった。資金繰りは私が、販売企画と宣伝広告は専務の雄一郎が担当し、定年間近かの関根敦子女子が経理と事務を取り仕切ってきた。誰からも名案が出ないまま日数が過ぎていたある日、雄一郎が、全員を集めて提案してきた。

「これからの時代は、環境やそこに住む理由となる情報が最も大切な時代になっていると思います。価値観が変わり、殆どのユーザーがそこに永住する気もなく、子どもが巣立つか独立すれば、老夫婦もしくは後に一人暮らしとなる晩節に相応しい生き方を念頭にして転居する筈です。そこで私は、パートでよいのでSNS発信の仕事が大好きな人を担当として雇用し、我が社の不良在庫の不動産を全く別の視点で紹介し最終的に、そこに住む理由を見つけてもらって付加価値を高める方法を実現します。皆さんは今後私がいつも会社にいると思わないで下さい」と、宣言してから間もなくネットで求人情報を流し四名の応募者の中から、前職がスマホの販売員だった三十一歳の滝沢小百合というシングルマザーの女性を雄一郎が自ら選んで採用した。そして、宣言通り雄一郎は、会社にいる時は、新人の滝沢とSNSで様々な情報を発信していたが、周囲の社員にはそれが集客や販売に役立つのか半信半疑だった。やがて、三カ月経過したころ、同じ女性として痺れを切らしたように経理の関根がクレームを付けてきた。

「会社がこんなに厳しい状況なのに、フォローが三、〇〇〇人になったからといって注文が増えるわけでもなし、滝沢さんに少しは営業の手伝いをさせてみてはいかがですか？専務だって滝沢さんと、毎日関係ないような写真を写してアップしているだけでは会社がじり貧になることくらい分かるでしょう。社長が毎日銀行に行って苦労しているのでですから半分でも負担を背負うべきだと思います」と、やや感情的になって雄一郎に迫ってきた。

「私は、専務になった時に皆さんに宣言しましたよね。一年

間は、SNSに専念させてくれと。私は今、滝沢さんに継承するまでにフォロアを一人人にして手渡そうと全力を挙げています。宇都宮が、いかに災害が少ない上に自然に恵まれた美しい街であり、都心まで六〇分のアクセスや利便性が高く住み易い、グルメから見れば東京に負けないほどハイレベルなお店があって、各々が物を売るのでなく事を提供しているところを配信し画面にフォローして『いいね』を押して反応してもらっています」と、冷静に伝えて方針を貫く姿勢を見せた。

「でも、毎日、二人で観光気分の写真を写して流しているだけで、在庫の不動産やマンションが売れる時機が本当に来るなんて私には信じられません。滝沢さん、あなたはどうか考えているの？専務の命令だからやっているだけでしょ」関根が滝沢に矛先を向けると、入社以来黙っていた滝沢小百合が口を開き、「私にもひとこと言わせて下さい。私が専務から教えて頂いてやっていることは、遊びや観光ではありません。

今、隆盛なお店や企業は、美味しいとか綺麗ということだけで流行っている訳ではないのです。本屋さんにカフェがあるのも、衣服売場で花を売るのも珍しくなくなり、お客様が参加して実感するイベントやゲーム感覚が溢れています。専務は、売れないマンションをシエアして借り受ける若者や学生向けにアイデアを募り、改装計画にも参加させる仕組みを実行してフォロアが増えてきました。一年で一人のフォロアが出来るまで私も皆さんの批判があろうと、専務と共に発信し続けます。私たちがやっていることこそ会社の未来に繋がる可能性を秘めていると思います」と、言いきった。私は、二人の話を聞いていて、琴線に触れる何かを感じていた。

そして、半年後、意外な引き合いが入ってきたのである。

大手の不動産業者が宇都宮に高層の高級マンションを建てて分譲することになり、その前に、我が社の中古マンションをモデルとしてフォロアの若者たちに見せ、自由に希望を述べさせて改装設計にも参加させ、シエアできる企画を商品化した。すると、四十八室在庫の殆どが譲渡もしくは賃貸借成約となつて富士友不動産への譲渡が決まり、次の企画に向けて事業提携と販売支援の申入れが複数押し寄せてきたのだ。

それから一年後、自宅前の長岡公園に我が家の三人と子連れの女性がメタセコイアの木陰で顔を合わせる事になった。私達は時間より少し早く行つて散歩しながら客の来訪を待っていると、滝沢小百合の母子が反対側の入り口から現れた。小学二年生である筈の男の子は、私達に近づくと母と繋いでいた手を自らそっと放し、小走りに私達の前に来て、「ここにちは、ボク滝沢隼人です。」と、挨拶してみせた。すると、雄一郎が、

「隼人くん、よく来たね。この前は、デイズニールンド楽しかったね。こちらが今度、隼人君のおじいちゃんとおばあちゃんになる人だよ。うちでは、おじいちゃんはオーバ、おばあちゃんはオーマって呼ぶんだよ」というと、隼人くんは、「オーパとオーマ、ママとボクのことよろしくお願いします」と、はっきり言ったのである。「ハイ、隼人くんは、私たちの三人目の孫だよ。そして、パパとママと隼人くんは、家族だね」と応えようと、「うん」と言つて嬉し涙を抑えている母親の顔を見上げた。メタセコイアは三〇〇万年前に現存していた樹木でありながら最近まで外来種と思われてきた。今では、誰の目にも日本古来の樹木として根付いている。紅葉のその美しい姿は新しい五人の家族を祝福するように優しかった。

娘たちの手

水樹 涼子

山深い里の家に生まれ育った私は、冬になると毎年あかぎれに悩まされた。

子どもの頃から冷たい水で、母のまかない仕事の手伝いをしていた。

暖房もせいぜい石油ストーブかこたつ、隙間の多い田舎家は中に居てもしんしんと冷えた。そんな生活が高校を卒業するまで続いた。

上京して都会暮らしを始めたとき、東京育ちの学友たちのその両手が、あまりに綺麗なことに驚いた。手の甲も掌も、本当に白くてすべすべしている。私のとはぜんぜん違う。

少なからずショックを受けたが、こうも思った。

——もしいつか、都会暮らしに馴れた私がきれいな手になつたととしても、決して手肌の美しさを誇る人にはなるまい……と。

歳月は過ぎ、いつしか私も二児の母となり、やがてその子らも成長して親元を離れていった。

私は室内でもできる仕事をしながら、その合間に家事を熟すだけの気楽な身分となった。五十代半ばを過ぎた自分の手をふと眺めて、シミやしわはそれなりにあるけれど、歳の割には綺麗な方だと、ついほくそ笑んだ。若き日の誓いは、

どこかへ消えていた。

一方、就職した子どもたちの一人は自ら進んで造園の、もう一人は建築関係の仕事についた。それぞれが真冬でも冷たい土や水にも触れる仕事である。

二人ともカサカサに荒れた両手の甲や指先を見せて、母親である私に嘆くことしきり。

「こんなんじゃ、彼氏ができて手なんかつなげない」と。まだ年若い娘たちにとっては、さぞ悲しいことだろう。

「その両手は、誰よりも頑張っている証。誇りに思うよ」

そう言いつつ私の方が、あかぎれてささくれ立った痛々しい娘たちの手を見ると、何だか自分が叱られたような気がして切なくなってしまう。

どうか、こんな娘たちの手を温かく包みこんでくれる頼もしい人が、いつの日か現れてくれることを……。

月げつ 夜や

三浦 安臣

「お疲れ様、お先に！」越村薫人は宇都宮市のメイン通りにある商業ビルの八階からエレベーターに乗り、同乗していた女子社員にひと声かけて一階で降りた。現役時代は、県下の営業第一線の指揮官を七年間務め、定年後も取引先の業務監査を担当して十年になる。一階ロビーで、黒っぽいスーツ姿の男性が、最後に降りて来た女子社員に尋ねた。

「M物産の方ですか。越村さんは出勤していますか？」

「越村でしたら今、玄関ドアに向かっている方ですよ」と指差した。男性は一言お札を言つて、急ぎ足で越村を追った。

十一月の夕暮れ時は、男体風が吹き荒れていた。越村は、コートの襟を立て帰路のバス停に向かった。今日の仕事は難題事案で神経を遣い疲労感が残った。途中で急に気が変わつて熱燭を一杯飲みたくなつた。バス停の手前を右折すると繁華街で、その一角に昭和の香りが残る馴染みの店がある。

越村は、『お食事処 おらんだ』のドアを開けた。

「あら、越さん、お帰りなさい」長崎県出身の女将は、藍色の袖の着物に白の割烹着姿で、料理の仕込みをしていた。

「熱燭で一本頼むよ」カウンターの一番奥が越村の定席だ。

五分程で燗酒と長崎料理『浦上そばろ』が出てきた。

「女将も一杯どうだね」二人は盃を合わせて世間話をしていた。その時、一人の客が来店した。会社の一階ロビーにいた

男性である。ふと越村と視線が合い、軽く会釈を交わした。男性は遠慮がちにカウンターの端の席で熱燭を飲んでいた。

小一時間程して、男性が越村に近づき、話し掛けた。

「失礼ですが、越村様ですよ。松本から来た香田と申します」と名刺を出した。越村は突然の挨拶に戸惑った。色白で眉が濃く整った顔立ち、前髪に幾分か白髪が見えた。名刺には、『長野県文化振興部長 香田 薫』と書いてある。

「東京で会議があり、午前中で終わつたので宇都宮まで足を延しました」さて、誰だつたらうか。越村は考えた。

「越村さんは若い頃、長野県諏訪市の高島城跡の傍にある若竹荘に下宿していましたよね」久しくして聞く名前だ。東京から転勤して二年間の信州時代、下宿には良き仲間がいた。

諏訪市は、諏訪湖沿岸の工業都市で上諏訪温泉や諏訪大社があり、霧ヶ峰高原や白樺湖を抱える観光都市である。戦後は、時計・カメラなどの精密工場が進出して山と湖のある風土と相まって、東洋のスイスと称され若者達で溢れていた。

「独身時代に若竹荘で世話になりましたよ。良かったら私の隣の席に移りませんか」と誘いながら、半世紀前の信州での下宿生活の思い出が、越村の頭の中を駆け巡っていた。

店内は、いつの間にか常連客で賑わっていた。

「女将、熱燭を二本と刺身の旨いところを頼むよ」

——あの時代の仲間の息子かな。S製薬会社営業マンの牛山ギューちゃんとは、恋愛の悩み事を語り合ったなあ。K精密機械設計士のペンちゃんが爪弾くギター伴奏で、皆とよく歌った。他にも四国出身で、失恋して諏訪湖に身を投じようとした美加さんがいたよな。それとも——。

その時、香田が言った。

「私の母親は、旧姓中谷百合子です。父が五年前に肺癌で他界し、母は今年七月に父の元に旅立ちました。亡くなる一週間前、病院に母を見舞った折に、後でこの人を訪ねて見てとメモ紙を渡されました。死を悟った母の最後の頼みでした」
越村にメモを見せた。(名前)越村薫人、(会社)M物産株式会社、(出身地)金沢市、と書いてあるだけだった。

「その時は、母の病状が心配でメモ紙は手帳に挟んだままで忘れていました。四十九日の法要を終えて、幼い頃の思い出が蘇り、語り合う兄弟もなく寂しい日々の中で、このメモを思い出しました」越村は、驚嘆して言った。

「あなたが、百合子の息子さんでしたか。お母さんは、大変残念でしたね……」百合子の訃報に驚いた越村は、悲しみを堪え、その場で黙祷して冥福を祈った。

百合子は、甲州の由緒ある家柄の出で心優しくかった。時折暗い影を落とし苦悩している様子に越村は気が付いていた。部屋も隣同士で、深夜に啜り泣く声を耳にした事もあった。

女将が、酢物の小鉢と焼酎水割セットをはこんで来た。

「先日、御社の人事部に電話で訊ねた処、今も元気に勤務していると聴き、妻にも相談して、この度尋ねて来ました」

越村には、百合子と二人だけの秘めたる想い出があった。

——それは、初夏の月夜の晩だった。仲間と町内の共同風呂

に行こうと百合子を誘ったら浴衣を縫っているので手が離せないと言う。四人で温泉に浸かり、帰りに飲み物とツマミを買って百合子の部屋に集まった。いつもの様に、ビールで乾杯してお喋りして歌を唄って、楽しい時間が過ぎた。夜も深まり、ギューちゃんが翌朝七尾市に出張だからと退席、ペンちゃんと美加さんも遅いからと自室に戻った。越村は身を横たえ肘枕をして、百合子とお喋りしていた。間もなく浴衣が仕立て上がり、白地に黒ユリの花柄合わせが難しかったの、と言いながら折り目正しく畳み終えた。その時、突然部屋の灯りが消えて、窓から差し込む月の光の中で、百合子が越村の胸の中に顔を埋めて泣きながら囁いた。『抱いて、初めてじゃないの……前の彼にあげたの、お願い……』

越村は百合子の切ない胸中を察すると哀れに思えて、優しく抱き寄せて熱い口づけを交わし、身体を重ねた。時間が過ぎて、障子に差す灰明かりで目を覚ますと、仕立て上がりの黒ユリの浴衣が、越村の体にそっと掛けてあった——。

「お母さんのその後はどんな生涯でしたか」越村が聞いた。

「優しい父なので母は幸せだったと思います。晩年は夫婦で俳句を好み句会の仲間と旅行や新聞雑誌への投稿を楽しんでいました」在りし日の両親を思い浮かべて、香田が言った。

あの一夜だけの出来事から一週間が過ぎた頃、越村が東京へ出張して翌日下宿に戻ると、食堂の掲示板から百合子の名札が外されていた。不審に思って、急いで隣の部屋を覗くと蛻もぬけの空っぽ。仲間の前から忽然と消えてしまった。暫くは皆で行方を捜したが引越し先は分からず、それから程なくして越村は神戸支店への転勤命令を受け、若竹荘を去った。

「母は、若い頃に恋をして、相手の父親に反対されて泣く泣

く別れて若竹荘に身を寄せた様です。三年程過ぎて、その父親の許しが出て、彼が母に託びを入れ、そして結婚したと聞いています」香田は、焼酎水割りを一と口飲んで言った。

「その翌年に、私が生まれました」

「そうでしたか。突然下宿から姿を消した理由が、今に至って漸く解りました」越村は、大きく頷いた。

「二人は別れた後も思いを寄せ合っていて、結婚する運命だったのですね」越村が、焼酎水割りを一気に飲み干した。

「私の名付けは、書道が趣味の父が付けたそうです。偶然ですが、越村さんと同じ文字ですね」香田が顔を覗き込んだ。

「薫君と共通している処が有るのかな」穏やかに応えた。

「越村さんは、きつと良い歳を重ねて素敵な人生を送っていると思う、と母が語っていました」香田が微笑んで言った。

「いいえ、長野から神戸に、その後も全国へと転勤を繰り返して、どうか、この地を終の棲家としました。すぐ傍に孫が七人もいるので、慌ただしい毎日を送っていますよ」

その時、越村の脳裏に微かな不安が過ぎった。香田の背格好が自分に良く似ている。声質や手指が長いのもそうだ。名前に同じ文字がある。一人っ子である翌年の誕生など、話が深まって行く程に香田の出生が気になり心が動揺していた。だが、そんなはずはないだろう。それは母親にしか分からないことである。その母親が、昔、皆の前から突然消えた後の人生を、最後に息子に託して仲間に伝えたかったのだろう。そう考えるとこれ以上、出生の真実に言及する事は控えよう」と心の中で思った。香田が焼酎水割りを作ってくれた。

「母が語っていた通りの越村さんでした。松本に戻ったら、墓前に報告します」越村が、香田の両手を握りしめた。

「お母様の御霊に、元気で生きていたと伝えて頂きたい」

「親父さん、また逢いに来てもいいですか」香田が聴いた。

「いつでも良いよ。今夜は、実に旨い酒だ。薫から生きる元気を貰ったよ」越村の眼から一粒の涙が零れ落ちた。

「お母さんが元気な内に、もう一度、逢いたかった……」

「今夜、母は千の風になってここに来ていると思いますよ」

香田の眼にも涙が溢れ、嗚咽を堪えて啜り泣いた。今は亡き母親の優しい温もりを、想い出したのであろうか。

「今日は、真つすぐ帰宅する予定だったが、薫のお母さんの魂が二人を引き逢わせてくれたのだと思うね」傍で聴いていた女将が感激して、割烹着の裾で目頭を抑えた。

「越さん、素晴らしい話ですね。五十年振りの巡り逢いを祝福して、ワインで乾杯しましょう」グラスにワインが注がれて、三人は笑顔に戻り女将の首頭で乾杯した。いつの間にか

二人は、親父さん、薫と呼び合う仲になっていた。

女将が手土産を用意してくれた。宇都宮名物の餃子だ。

「ご家族で召し上がって。また来て越さんを元氣付けて頂戴ね。待っているわよ」香田の右手を、そつと両手で包んだ。

「親父さんをよろしく頼みます。有難うございました」

店を出た二人は肩を組んでホテルの玄関前まで歩いた。別れ際、越村は薫が堪らなく愛おしく感じて思わず力いっぱい抱きしめた。香田の胸にも熱いものが突き上げてきた。

「薫も健気に働いて、家族と幸せに暮らすのだよ」

「親父さんも達者で長生きして下さい。また顔を見に来ます」二人は笑顔で別れた。越村は、夜空を見上げた。

『今宵の月は美しい……』と一人呟き、月夜の清光に身を包まれながら生ある喜びに感謝して、そつと掌を合わせた。

ブラツクホール

橋本紀久子

ミュンヘンのマンシヨンの林立はどれも古い歴史を持っていて、内科医の大森先生はミュンヘン大学に研究員として来てから、もう六年もここで暮らしている。

研究員時代に一緒に働いたドイツ人女性と結婚、いずれは日本に帰り医院を開業するつもりで、居心地の良いミュンヘンの生活をエンジョイしている。その大森先生の世話で理香子夫婦は街の中心から少し外れた所の、年代物のマンシヨンに落ち着くことができた。建物は五階建てで入り口はドアーと言うより、頑丈な扉で華奢な日本人では体全体で押さなくては、びくともしないような扉を押して、暗い石の階段をこつこつと上がっていく。理香子夫婦の住まいは五階である。

バイエルン公国時代からの古い歴史を物語るような建造物が立ち並ぶ。その荘厳な建物は威厳が漂っていて、うさぎ小屋から来た理香子には拒絶されているような威圧感を持つ。当然エレベーターなどない。太った欧米の婦人はゆつくりゆつくり上がり降りしている。決して大変そうな顔はしていない。理香子の夫は毎日大学に顔をだし地質の研究を主にしている。

ドイツ語は簡単な単語を使って、意思疎通は上手くいってようだ。理香子は三か月かかってやっと、おはようときよ

うなら、ありがとうとどういたしまして、これください、いくらですか？そして数字を覚えた。数字を聞き取るのは夫の義彦より早かった。夫が研究室に出かける時一緒に家を出て、まずスーパーに行つて買い物をする。スーパーは七時には開いている。それからパン屋に寄つて出来立ての、熱いくらいのパンを買う。最後に肉屋により日替わりでハムやソーセージの品を変えて買ってくる。奨学金はそんなに貰っているわけではないから、贅沢は出来ないが、パンとソーセージとスープがあれば大満足の理香子なのだ。それに野菜は輸入品が多数で政府が税金の分を負担しているとかで安い。日本の暮らしよりはるかに食費は安く済むので、理香子は食事の買い物に唯一楽しい日課になっている。片言でも人と会話出来た時は本当に気持ちが良い。ただ、日本語で話す相手は居ずぎるぐらい親切な人が多い。ミュンヘンの人はお節介者でさえ理香子との会話を面倒がるようになった。

大森先生のアパートメントに招待された時も夫人がドイツ人なので、四人の会話は自ずとドイツ語になる。三人が笑つても理香子は笑えない。居心地の悪さで顔がこわばる。

大森先生が夫に時々「奥様に訳して上げて下さい」と気付いて言ってくれるが、聞こえているのかいないのか変な笑いごまかしてしまふ。それでも時々理香子の方を向いて、「わ

「かっつた？」と聞く。全体はわからないがどこどこ憶えた言葉が挟まって、状況と少しの単語とで、「ああ、昨日ドクター何とかさんが来て、何かだったんだな」ぐらいは想像出来る。大森先生が奥様にワインのお代わりを注ぐ。そして理香子の夫を促してワインを注ぐ。それから理香子へグラスを空けるよう促した。理香子は残っていたワインをぐっと飲み干した。「僕はねえ、アンナと知り合う前まではビール党だったんですよ。地ビールをあちこちで試飲してね。ホフブロイハウスも渡独して直ぐ行ったものです。ミュンヒェンから電車で四〇分程行った所にエルディングと言う街があるんですがね、そのエルディングが気に入って随分飲みました。ところがアンナはワイン。もっともドイツは見渡す限りぶどう畑、そうでなければ牧草、ドイツは湿気がありませんからビールにしてもワインにしても、喉を通る時の清涼感とは格別です」

室内の照明はほの暗く、テーブルに置かれたローソクの暖色の炎が揺らぐこともなく、四人の顔を包む。部屋には時計が見当たらず、大分夜が更けたなと理香子は腕時計をみた。もう十一時を回っていた。

夫を促し礼を言つて下の門まで夫妻に見送られて外に出た。ドイツの夏は十一時になつてもキャッチボールが出来るほど明るい。若い者も夫婦連れも腕を組み、友達と楽しそうに話しながら、明るい夜を楽しんですれ違う。

久しぶりに、新婚以来かな、夫の方から手を出して来て繋いで歩いた。

夏の休暇も終わり地質学の教授の招待を受けて、教授の住まいのある地方を訪ねた。ミュンヒェンから始まるロマン

チック街道の終点に当たるヴェツブルクに教授は住んでいる。中古のワーゲンを買つて、憧れのロマンチック街道を走つた。ミュンヒェンを出ると放牧の牛がのんびりと草を食む牧草地帯。すると中世の街の赤い屋根が見えてくる。そしてまた草原が続く中、車を走らせる。理香子はどこまでも続く草原と、時々ばあつと現れてくる赤い屋根の固まつた街並み、もう夢としか思えない風景に感動の胸が震えつづけた。街道の終点ローテンブルクに車を停めて、街の中を散策した。碁盤の目のように道の両側に昔のままの家が連なっている。どこの家も土産物売つていて、住民は流石に古い家は住みにくく、郊外に住んでいる。ローテンブルクの將軍の話の仕掛け時計など、ざつと見て教授の住むヴェルツブルク郊外のお宅に無事到着。教授の家で一週間の予定で滞在する。翌日から理香子は一人街の中を見学したり、お城の中へ観光客に混ざり見てまわつた。デパートの食堂で昼をすこし、ヴェルツブルクの駅で三時に夫たちと落ち合う。

一人放り出されて、度胸がついたのか理香子は大きな川沿いに沿つてかなり遠くまで足を延ばした。丘の上のお城にも歩いて行つてみた。そこから見渡す限りぶどうの棚畑が広がっている。

五日目良く晴れ渡つた朝だった。今日は理香子も一緒にと誘われ教授の車で郊外の丘の上のぶどう畑へ行つた。何やら畑の土を手を取つて夫に教授が説明する。石がどうとやら、段々畑の上のほうを指さしたり、青いぶどうがどうとやら、場所を移動して手に石交じりの土を乗せ、先ほどの畑を指して、夫は子供のような素直さで「ヤーヤー」と頷いている。

理香子は我慢強く、いつまでも続く教授の話に耳を傾けて

いる。「ああ、付いてくるんじゃないかった」

氣を察したのか教授が先に理香子に声をかけた。「疲れたでしょ？」夫がようやく理香子が一緒だったことを思い出したように、そして教授に「大丈夫ですよ」みたいなことを言っている。「大丈夫な訳ないでしょ」腹の中で理香子はつぶやいた。

帰り道に街中の、理香子が三日前に見学したお城に立ち寄った。理香子は天井に描かれた天使の様子や腰に絹のような柔らかな布を巻いたふくよかな女体を、首の痛いのを我慢して見上げていた。理香子の脳裏に突然うえをむういうて歩こうをを、歌が湧いてきた。耳の周りでドイツ語がわんわん鳴っている。「いろはにほえどちりぬるを」今度は、さだまさしの線香花火の歌が突然湧いてくる。「しゃべりたいよう！」

車の中の前の二人の会話を、理香子は後ろの座席で聞いている。この町の話をしている。夫がゲーテと言った、教会がカトリックか？プロテスタントか？話の内容が少し分かってくる。外の看板を見ながら、二人の会話を聞いている。夫が「本屋は無いですかねえ」と言った。「今ありましたよ」理香子が日本語で前の席に身を乗り出して言った。夫はゆっくり首を振った。「看板いま見たんだけど」夫は又ゆっくり厳かにドイツ人のする様に前を向いたまま又首を横にふった。

理香子は車の右側の窓から外を見ていた。日本と違って看板は少ないが、建物の庇の辺りに「Buch」(本)と確かに見たと思った。幻だったのだろうか。あれだけ否定されて、理香子は自分がおかしくなってしまったのだと思った。

とうとう幻を見るようになってしまった。狂ったのだと

思った。

ミュンヒェンに帰る夫の運転するワーゲン。右側の助手席に座った理香子の目に、「Buch」の看板の文字が飛び込んで来た。「あつたー！」私は狂ってなんかいなかった！

胸が裂けそうなほど嬉しかった。夫に言う気にもならなかった。あの看板を見なかったら、多分理香子は自分が狂人になったと本当に信じこんだままだったろう。人を狂わすことがこんなに簡単だなんて、恐ろしい思いと夫への不信感と憎しみと、自分への愛しさと訳のわからぬ大粒の涙をこぼした。

ロマンチック街道を終点のヴェルツブルクからミュンヒェンへと向かう。窓外には広々と牧草場が続く。夏の開放的な空気から、物憂い秋の気配がすとんと牧場に降りて来ていた。秋は短い。瞬きをする間に冬に代わる。日本の秋が好きな理香子はそう思う。

ドイツの冬は想像以上に理香子を苦しめる。九時頃明けて三時頃には暗くなる。

理香子が初めてミュンヒェンの空港に着いた時、夫の姿がなく必死で探した目の先に、夫を見つけた瞬間、すっと人の背に隠れた。「えっ？」と思った疑念が、今になって頭の中でどんどん膨れ上がっていく。理香子の感はこれまで外れた事がない。「何かある」夫は、これが初めてのドイツではないのではないかと疑い始めると、どうしようもなくそのストーリー作りに嵌まり込んでいくのだった。そんな自分をどうかしていると思いがらも。

天空からのひとりごと ―二宮鉸の場合― 安西 悠子

日光、男体山の頂を覆う白い雲にのって、私の魂は、揺らめき漂っております。

碧い水面みなもの中禪寺湖から、更に下ると、日光奉行所があり、風にのっておよげば、今市報徳役所の空に辿りつきます。

私は、江戸で生れ育ち、下野国真岡東郷陣屋の二宮弥太郎尊行様の許へ嫁入りしたのでございませうが、何故か、私の魂は、今市の空を漂うのでございませう。

それは、私の生涯で忘れることのできない所だからなのでございませうか。

私は、眼下に拡がる日光御神領の田圃が、黄金色の穂で埋めつくされているのを眺めると、義父ちち、金次郎尊徳様と、夫、弥太郎尊行様の血の滲むような復興事業の日日を想い出し、胸が締めつけられるのでございませう。

ある時、金次郎尊徳様が、幕吏にとりたてられて、幕府から、「日光御神領荒地起返し」の命令を受け、その事業にとりかゝったのでございませう。

真岡東郷陣屋に住んでおりました尊徳様は、ここから、日光奉行所に赴き、仕法を行うのでございませう。日光奉行所の近くの桜秀坊が宿舎でございませう。

尊徳様は背丈も高く、がっしりとした体格でございませうが、あまりお丈夫ではございませうでした。復興事業の為、

江戸の幕府の役所や、小田原藩江戸屋敷などにに向いた折も、度々、江戸の医者に診察を受けておりました。日光の桜秀坊で病に臥せると、日光奉行所から、真岡の東郷陣屋の義母はは様に呼び出しがあり、急遽、日光まで看病に馳せ参じておりました。ある時は、桜秀坊での病気が重いので、真岡の東郷陣屋に戻って養生せよ、との役人の指図で、真岡に帰り、治療をしたりしておりました。あまりの不便さに、日光奉行所の役人も、今市に役所を建て、日光御神領の復興事業をしたらよからう、ということになりました。が、幕府は費用を出してくれません。この様子を知った、相馬中村藩主、相馬侯は、資金を提供してくれました。相馬侯は、尊徳様に、相馬中村の復興について、格段の盡力をしてもらっていたのでございませう。

尊徳様は、相馬中村の地へ赴かれたことはございませう。下野国桜町陣屋から復興の指導をなさっていたのでございませう。現地で実施したのは、相馬中村藩士の富田高慶様、荒専八様たちでございませう。尊徳様の御仕法は、実を結び相馬中村の地は豊かとなりました。相馬侯は、そのお礼だと申して、今市報徳役所を建てて下さったのでございませう。

私も二宮一家は、やっと、真岡東郷陣屋から、日光御神領の中心地にございませう、今市報徳役所に住めることとなり

ました。

真岡の東の端にある陣屋から、鬼怒川を渡り、宇都宮に達し、日光街道を北上するのでございます。真岡から宇都宮までは、大きな坂が四ヶ所もあり、曲りくねった街道は大変でございました。

日光街道は、大沢村から鬱蒼とした杉並木が、どこまでも、どこまでも続いておりました。

私は、この折、子を身籠つておりました。三ヶ月目の妊婦にとつては大変辛い時期でございました。

今市報徳所に住みましてから、私は、出産いたしました。男児でございました。金之丞と名づけ、長じて尊親と名乗るのでございます。

ところが、私は、母乳が出ないのでございます。真岡の東郷陣屋から、今市の報徳役所までの旅の疲れ、多勢の門人たちとの生活、その上、真岡とは異なる今市の気温、生活環境の変化が、私の体を苛みました。

役所の門人たち、それも、立派な武士たちが、二宮家の一大事と、真岡・物井・下館方面、文挾、鹿沼と、乳母を探しに奔走してくれました。幸い、今市宿のはずれのあたりに乳母が見つかりました。私の初めての児、金之丞は、無事に育ちました。

この少しあと、尊徳様は、今市報徳役所の一室でお亡くなりになりました。『日光御神領荒地起返し』の仕法の途中でございます。いかに口惜しかったことと存じます。尊徳様は、この仕法に命を賭けていらつしやいましたから、その事業が、達成半ばで倒れてしまわれたことは、まことに残念で、そのお心を推し計りますと、涙が零れ落ちて、悲し

くてたまりません。

尊徳様が身罷つた後、私の夫、尊行様は、身を挺して、『日光御仕法』を推し進めました。大変困難な事業でございましたが、少しづつ、成功に近づいてきました。

尊徳様の後継者である尊行様は、精神的にも、体力的にも、大きな負擔の日々が続きました。大病を患いました。私は、夢中で看病いたしました。尊行様は、父である尊徳様の單なる後継者ではございませんでした。尊行様獨自のお考えを持ち、尊徳様の仕法に更に改良を加え、よりよい方策をあみだして、復興に弾みを加えました。

この頃、京都では、鳥羽・伏見の戦に端を発した戊辰戦争が、東へ東へと展開して来ましたが、江戸は、無血入城でございましたが、宇都宮城も落ち、朝廷軍は、東へ東へと攻め上つて来ました。

徳川家康の墓所、日光山へ攻めて来るのでございます。今市報徳役所は、幕府のものでございますから、第一番に攻撃されるのです。

近くに大砲の音を聴きながら、不安の日々を過している私どもでございます。朝廷軍が、各所で勝利をおさめています。日光に攻めて来れば、幕府の今市報徳役所は占領されてしまうでしょう。焼かれてしまうかもしれません。

この危機に、尊行様は、すぐさま行動を起しました。

附近の農家から、馬を数多く集めました。それは、尊徳様が記録した、各地の仕法書が、役所の敷地内に建つ小さな石蔵にぎつしりと保管されておりました。これを無事に、他所に移して保全をはからねばならぬと思つたのでございます。尊徳様が、血と汗に塗れ、命を賭して復興した、村々の仕

法書”が隙間なく保管されているのでございます。

朝廷軍は、幕府の書類など、躊躇なく焼き拂ってしまうでしょう。

そうさせてはならないのでございます。尊徳様が命を賭して記録したものを残さなければなりません。

尊行様と私は、夜を日について、その書類を、油紙に包み、桐箱に入れて、馬の背に乗せて、相馬中村の地へ送るのでございます。

私は、生半紙を二つ折にして、帖面をつくり、「荷物覚」を、したためました。

三ヶ所へ分けて送付する送り状は、全部、私が、したゝめました。近くに風雲急をつける気配のなか、大砲の炸裂音の響くなか、私は、筆を休めませんでした。命より大切な、尊徳様の仕法記録を失うわけにはいかぬのでございます。

第一番目に出発させたのは、「相馬中村藩」へのものでございませぬ。「日光御神領仕法の雛型」「宇津家の知行地、物井・横田・東沼各地の復興の記録」「烏山藩」「茂木藩」「下館藩」「青木村」「花田村」などでございます。仕法書の外には、尊徳様の娘文様の絵や書も荷物の中に加ええました。

第二番目は、引田村(鹿沼)への送付で、尊徳様の婿、富田高慶様の夜具や、御義母上様の上等の着物や箆筒、尊行様の火事羽織などを荷造して馬の背に乗せました。

第三番目は、今市地内の千本木村でございましたが、この内訳は、あまりの混雑のため、よくわからないのでございませぬ。

幸いだったことは、相馬中村藩宛てに送った荷物は、無事に相馬城に着いたとの事でございました。相馬中村藩は、最

初、幕府に味方して、朝廷軍と戦いましたが、幕府方敗戦との見透しをたてて、真夜中、朝廷軍の陣地を訪ね、金子をついで、朝廷軍に味方すると申し出ましたので、朝廷軍も、これを承知しました。相馬の地は、無血入城でございました。よって、相馬城へ必死の思いで送った尊徳様と尊行様の仕法書は無事に保管されたのでございます。

明治になりましたから、鈴木藤三郎というお方が、自費で書生を雇って、今市報徳役所から送った仕法書を、整理編集いたしました。今市の報徳二宮神社に、「報徳文庫」として奉納なさいました。これを基にして、「二宮尊徳全集36巻」が生れたのでございます。

只今、世の人々が、尊徳様の偉業を讀んでおりますが、噂や伝説ではございません。史実にもとづくものなのでございます。

私の魂は、ゆらゆらと今市の碧い空を揺られ、漂っております。

私は、今市報徳役所から、戊辰戦争のため、相馬中村の地に移り、明治維新後は、北海道、豊頃村の開拓に赴いた、倅尊親の為、孫を連れて札幌に住みました。

それから、再び、相馬中村の地に帰り、命を終えたのでございます。

どういふわけでございませうか、私の魂は、今市の空に漂うことが多いのでございます。

今市の大空に、白い雲が浮かんでいるのを御覧になりましたら、私、二宮鉸が、皆様を見守っている、と、おおもひ下さいます。

マリーの丘

相馬 龍久

先ほどからジョージくんの草笛の音が心地よい風に乗って、草いきれと共に僕たちの頬をなで丘の上の薄雲に溶け合っていくようだった。薄雲は静かに私たちの上を流れていた。私たちは飽きもせず見ている。草むらに寝っ転がり流れる雲を眺めていると空を飛んでいるような気がしてくる。ジョージくとマリーと私の三人は手を繋ぎ、はるか下に雲を見おろし、悠々と空を飛んでいる気になっていた。

三人は自然と遊ぶようになった。ジョージ君は小学五年生、マリーは二年生、そして私はまだ幼稚園だった。三人は集落の子供たちと仲が悪いわけではではないが、どこことなく馴染めないところがあった。

一人っ子の私にとって二つ年上のマリーは姉のような存在だった。そして物静かなジョージくんは優しい歳の離れた長兄のようだった。三人とも一人っ子だったから、一緒に遊んでいたのかもしれない。集落では兄弟姉妹が多いのが当たり前だった。

男の子は十数人の集団で遊び女の子は五、六人で集まって遊んでいた。私は味噌っかすと言われていた。仲間外れではないが正式な仲間としては認められていなかった。男の子たちは里山に入って遊ぶのが好きだった。その仲間に入るにはナイフが必要だった。折りたたみ式で小さなノコギリがつい

ていた。そんな物は母が許す訳がなかった。

私の母は躰に厳しい人で、毎日小遣いというものをくれなかった。子供が小銭を持って駄菓子屋で買い喰いすることを嫌っていた。近所の子供たちは毎日五円、十円と小遣いをもらい買い喰いをしたり、紙芝居を見たり少し小銭を貯めて安っぽい子供だましの玩具を買っていた。駄菓子屋の前は子供たちが何時もたむろしていた。私はお金も無いので駄菓子屋や紙芝居には行けなかった。ただ二十円のナイフは欲しかった。遠くから紙芝居を見ていたとき、優しそうなおじさんが急に怖い顔になり、飴を買わない子はあっちに行けと言われた事があった。その時ジョージくんがお金を払って私に紙芝居を見せてくれた。それが最初で最後の紙芝居見物だった。

私の母は言葉遣いも厳しくて、地元の独特の言葉は厳しく注意されていた。また遊ぶ子は決められていた。あの子たちとは遊んではいけない、などと言われている子もいた。その中にジョージくんもマリーも入っていた。私は地元の仲間に入りたかったが兄弟もなく、里山に入る時のナイフも持っていないかった。私たち三人は集団の外周にいるもの同士親しみを感じていたのかもしれない。ジョージくとマリーは私のことを「ター坊」とよんで遊んでくれた。

ジョージ君はアメリカ人の父と日本人の母との間に生まれた。お祖母さんに育てられていた。集落ではジョージ君の両親にまつわる噂話があるいろいろあったが、どれものを射てはいなかったようだ。母親は米軍キャンプのドサ回りの歌手だと女学校校出の進駐軍民政局タイピストだったなどと噂されていた。一方父親はアメリカ軍将校か新聞記者だったとも言われていた。根拠がないわけではない。ジョージ君は頭がよく成績が良かった。運動神経もよく野球をやっても走っても群を抜いていた。何よりも父親の血が濃いのか北歐風の顔立ちで金髪、長身であった。父親は朝鮮戦争で死んだとジョージ君は言っていた。

ジョージ君の家に遊びに行くとお祖母さんが喜んでくれるので私も嬉しかった。珍しいおやつを沢山出してくれた。初めてコーラというものを飲んだ。葉くさかった。ジョージ君の家で何より楽しみだったのはSP盤レコードを聞かせてもらうことだった。電蓄（電気蓄音機）のある家は珍しく、早く回転するレコード盤を飽きもせず見ていた。茶色や黒の重々しいラベルにびっしりと英語が書かれていた。レコードが回転しだすと全く見知らぬ世界が開かれていくようだった。ジョージくんは父親の形見だというトランペットを大事にしていた。レコードの曲に合わせてトランペットを吹く真似をしていたけど音は出なかった。そんな僕たちを見ながらお祖母さんは内職の針仕事を黙々としていた。ある時私はその仕事を覗き込んでいた。光沢のある絹の生地をピンと張り、色とりどりに派手な刺繍をしていた。

「これはね、パラシユートの生地だよ。もう必要がないからね」

お祖母さんは手を休めることなく、ひとり言のように言った。

「お土産にアメリカさんが買って行くんだよ・・・」
と静かに言い、また黙々と針仕事をしていった。

マリーの家は倉田ヶ谷を囲む丘の上に建っていた。小さいけれど周りに木立のある当時としては珍しい洒落た洋風の家だった。別世界のお伽の国の家のように感じられた。マリーは何時もきれいな洋服を着ていた。集落の女の子たちは羨望と嫉妬の眼差しで見ている。

本当はまり子という名前だけだ。マリーと呼ばれていた、マリーは両親のことをパパ、ママと呼んでいた。マリーの父親は事業家のように多忙であった。月に一度ぐらいいしか帰宅しなかった。マリーの母親はとても綺麗な人で、何時もいい匂いがしていたが、気が強そうでもあった。私たちは木立を抜けた丘の上の草原でよく遊んだ。そこを私たちはマリーの丘とよんでいた。マリーの母親は私たちを家に上げたくないようであった。ママがいない時に一度だけ家の中に入ったことがあった。綺麗で見たこともない物が飾ってあった。いい匂いがして、別世界にいるようであった。しかし生活感とは別のよそよそしい感じもした。パパが帰ってくる時は大騒ぎだった。その日は絶対に遊びに来ないように言われた。マリーのおねだりした物は何でも買ってきてくれたそうだ。集落の女の子が持っていないような高級な洋服を沢山持っていた。持ち物や人形も何から何まで東京のデパートで買ってもらったと言っていた。

私が小学校に入学するころ我が家は駅に近いく所に引越した。マリーの丘からも遠くに見えていた広い田畑で宅地用

に造成されていた。その頃はちらほらと家が建ちはじめていた。新興住宅地で会社勤めの人が多かった。

倉田ヶ谷を出た私は小学校でも近所でも友達ができた。かつての味噌っかすではなく私は澁刺としていた。私の中では引越しは大きな出来事で、まるで急速に近代が始まったようであった。数年のうちにテレビ、洗濯機、冷蔵庫などの家電製品が揃った。

あの集落の事は古いアルバムのように閉じられ、ひっそりと記憶の底に沈んでいった。

☆

二十代半ばになった私は一人酒を覚えていた。週末の深夜、駅近くの焼鳥屋のカウンターで手酌で飲んでた。テーブル席ではスナックのママらしい女と客が飲んでた。連れの客たちが帰ったあと崩れるように私の横に女が座った。そのまま両手を枕に顔を埋め、ひとり言を呟いていた。その女は和服姿だった。襟抜きから白いうなじが見えた。襟足からほつれた髪が酒に濡れたように首筋にまとわりついていた。

その寝姿に私は女の年輪を感じた。

女は目を覚まし私をじっと見つめていた。やがて笑い出しと言った。

「あんた、ター坊でしょ？背広なんか着ちゃって、立派になったね」とネクタイを引っ張った。

マリイのママだった。私は驚いた。その後少し飲んで二人で店を出た。

「ママさんタクシーで送ってあげるよ」

「いいわよ。どうせ最後の階段までタクシーは登ってくれなからね」

「それよりター坊と話しながら歩きたい」

マリイのママは私の腕にしっかりとつかまりながら話した。

「こう見えてもおぼちゃんね、東京の女学校出てるんだよ」戦後働き手を失った家のために花柳界に入ったという。いい男性にめぐり逢い引かされて家も建ててもらいマリイも産んだ。ただいつかはパパと縁が切れることは分かっていた。中学生になってマリイはパパにもう一つ家庭があることに気がはじめたが、自分の家が本宅だと信じていた。高校生になりやがて自分が別宅の子と分かるとマリイは荒れだしたという。

ジョージ君は小さい頃から可愛いかったという。私はジョージ君の母親を見たことはなかった。夜陰に紛れて会いに来ていたらしい。

「ジョージ君の父親が朝鮮戦争で死んだというのは嘘だろうね、結局捨てられたのさ。あの当時は別に珍しい話じゃないよ」

ジョージ君を最近テレビで見かけたという人がいると言っていた。ジャズバンドでトランペットを吹いていたそうだ。

倉田ヶ谷の入り口までやって来た。この辺りはもう何年も来ていない。今は丘の直ぐ下まで家が建ちならんでいる。急な階段なのでマリイのママをおんぶするにも危ない。しっかりと手摺りが付いていたので、よろけてもいのように直ぐ後ろから登って行った。

息が切れたのは私の方だった。

「ター坊、大丈夫かい」と声を掛けられてしまった。

「おぼちゃんね、毎日々この階段を四十年近く登り降りしてきたんだからね」

自分に言い聞かせたようだった。

「ター坊、上を見ちゃだめだよ、足元見て一歩一歩ゆっくりと登るんだよ」

「結局マリーは私と同じでね、うんと年上の男と結婚したよ。でも子供も生まれ幸せにやってるよ」

階段を登りきり夜空を見上げた。マリーの丘に星が降っていた。

亜子

徳永 楽遥

どうしてここにいる？亜子。

「亜子」と喉までこみ上がる。頭を振った。違う、似ているが。亜子は小柄で肩が細く、切れ長の眼はいつも泣きそうだが。しかし二つ向こうのレジを打っている娘は小柄で細い肩は似ている、が切れ長ではない。どうしたのだ、その眼は。赤く縁取られた両の眼。それに赤い鼻。それはたつたほんの少し前まで涙を流していた証である。亜子は泣きそうな眼をしているが芯が強い。決して泣かないと私は妙な自信をもって言える。レジの娘は泣いたが相当に気丈である。涙が洗った眼で顔を上げ接客している。昼前のスパーは幼い子連れの主婦、年寄り、勤め人、夕方からの仕事を持つ人たちがレジに列をなす。それに応対しているではないか。生半可な心根でこのようにできようか。彼女の後ろで若い男の店員が店長に叱られうなだれている。レジの近くで客が見ていることに配慮しない店長はそこまでの器量だ。亜子に似ている娘よ、気丈な娘よ、明日は黒い瞳に朝の光を輝かし、胸を張って仕事ができる。レジの仲間は温かく迎えるさ。

「お客様……お客様」

声をかけられ我に戻った私は三九八円の焼きサバ弁当を手取る。

後ろの客はネクタイにすこしくたびれたスーツ姿なのに妙

ににんまりしている。いい仕事ができただろう、それは実にすばらしい、他人事ながらともに喜ばせてもらおう。だが、である。レジに出した弁当は五九八円。耳を疑った。このすこしくたびれたにんまりが大海老天井を買った。もっと正確に言うと「秋野菜と特製大海老の天井」である。さつきは労をねぎらい、ともに喜びを分かち合おうと思った。しかし私は断固としてキャンセルする。私は食べたかった、買ったかった。「秋野菜と特製大海老の天井」の前で立ちつくした。男子とあろうものが涎を垂らさんばかりに弁当を覗んでいるのは礼に失する。足を動かそうとするが両の眼が「秋野菜と特製大海老の天井」に食らいついて離れない。天井の得も言われぬ甘い匂いが鼻孔を攻撃する。脳が激しく抵抗し命令する。両手は体側から離すなど。焼きサバ弁当と「秋野菜と特製大海老の天井」の値段は二〇〇円の違いである。それは天地の差であり、雲泥の差である。大学生としての矜持を私は護護しなければならぬ。人は言う。二〇〇円出せばいいじゃないか。令和の時代だぜ。AIがのさばろうとなさるこの頃に痩せ我慢という精神を担ぎ出すなんぞアホらし。たかが弁当で何をほざくか。欲しけりゃ手に入れる。金がなければ……。だからこそ私は大学生という身の程を知っている。「食はず貧樂」を背負って歩く。

脇道に逸れた。「秋野菜と特製大海老の天井」の弁当が冷めないうちに戻ろう。

ご飯の上に大きな海老が二尾その図形で斜めにのけ反っている。さらに、二品の秋野菜の天婦羅が一つの角を占有している。そしてまた一角にこれ見よがしの揚げ茹で卵が黄身の腹で鎮座している。ご飯はといえば、こんなに失敬な話があるのか、残った一つの角に白く輝く肌をわずかにのぞかせているだけである。美しいご飯の姿を隠すとは弁当に対して無礼である。ご飯あつてはじめて弁当はその体を成し、存在価値を持つものであるから、これを無礼だと言わずして何と言おうか。義憤が煮えたぎる。だが……海老天婦羅が二尾も乗っかっており、甘辛いだし汁がしみ込むご飯はまたご飯冥利につくというものだろうか。

愕然とした。「秋野菜と特製大海老の天井」を亜子と食べなかつた。食べたのは学食、のり弁、バイト先でいただいたおにぎりとおかず。あの細い肩は、泣きそうな切れ長の眼はおいしいものを食べなかつたからか。「秋野菜と特製大海老の天井」は大熱量の八九三kcal、これだけのカロリーがあれば健康的な肩となり、切れ長の中の瞳は幸せの笑みを湛えていたのではないか。己れの矜持を亜子にも強いていたか。タピオカミルクティーが飲みたかつたら一緒に飲んでいたのに。口数少ない亜子と知っていないながらその意を汲まなかつた。

亜子との連絡が途絶えたのは海辺から人影がまばらになるころだつた。次から次へと上陸する台風が亜子をさらつたように思えて雨を風を憎んだ。そうでもしないことにはやりきれなかつた。毎日をどう過ごせばいいのかわからなかつた。精神的に落ち込んだ。

十月半ばの夕方、私は居酒屋のアルバイト先にいた。そこは広いガラス窓があり店の中が見える。料理はうまい。手頃な値のランチ、デザートがあり女性や子供連れにも人気がある。

自動ドアが開いたので私は「いらつしやいませ」と言おうとした。言い終わらないうちにドアにぶつかる音。黒服黒ネクタイの男が十二三人よるめきながら入ってきた。靴は脱ぎ捨てたまま、どかどかと上がり込み、テーブルをくつつけると、座布団が行き交い、腰を下ろし、自分らの世界を作つた。中高年、背が高いのも低いのも、太つたのも痩せたのも、眼鏡をかけたのも、ひげ面もいる。似ているところといえば皆大声を出し、がさつなふるまいをする。板前の坂上さんが眉をひそめて厨房からのぞく。

「おい、注文だ」「はい」と応じる。

「酒、つまみ」「酒は熱燗でしょうか、おつまみは……」「気をきかせる。客を見て」男はすでにできあがつている。テーブルの端と端が雷のような声を出す。コップ酒とつまみを出す。呂律の回らぬ男の前にも酒がいきわたつた。騒動の渦が消え、胡坐から正座に直り、背筋を伸ばした。霜降り頭の「黙祷」で空気がはりつめた。「榊原さんに、献杯」「献杯」店内に響いた。「おい、若いのお祭り」店の外には月の光が白く降っていた。白い光を見ながら、私は音沙汰のない亜子がどうぞ無事でありますようにと祈つた。

十一月に入った。亜子は休学願を提出していたと仲良しの子がおしえてくれた。理由やどこで何をしているかということはわからないという。いったい若い女性が自分の存在を誰にも知らさずにいられるのだろうか。寂しさに打ち勝てるの

か。いや芯の強い亜子ならばできる。できるからこそ亜子なのだ。だから私が心構えの一つ二つをしておかねばならなかった。自分の不覚を恥じた。

十二月が深まるにつれ空気が澄明となる。いつもは霞んでいる遠山が指呼の間にあり、輪を描いてゆったりと舞うトンビが啞えた油揚げは横取りできそうだ。

夢見が悪かった。追いかけられた。追うから逃げる。逃げれば追う。逃げなければ追いつかれる。追いかける主体が何かわからずに恐れる。逃げるにつれ追いつかれることそのものに恐懼する。逃げる追うともに足音はしない。滑空もせず、空を飛ぶわけでもない。後ろを振り向くことはおろか私の足元を見る余裕さえない。一晚中追いかけられ、逃げ続けた。亜子がいるときには夢の中でも行き来していた。そう夢通いをした。それなのに今はこの体たらくだ。鳩の鳴き声がうるさい。ククッポーククッポーと繰り返す。悪い夢でもしばらくは浸りたいものだ。カーテンを引くと光が部屋に満ち眩しい、窓を開ければ青空に太陽、足元に冷気が迫る。息を深く吸うと全身の血が洗われるようだ。深い青空だ。

顔を洗いながら閃いた。人間様の夢の余韻を破った鳩に説教しよう。亜子の不在を何かにぶつけることでようやくバランスをとっている。時計はゼミに出かける時間を示している。そのあとは居酒屋でのアルバイトだ。外に出ると青空を見上げた。カーンと音がした。視線を落としていくとクーポの鳩と眼が合った。お向かいのテレビアンテナの上だ。この青空のせいかな、近い近すぎる。クーポと鳴いても眼は私からさらさない。後悔した。鳩の喉が風船のように膨らむと羽と羽の間に隙間ができる。そこからなんと小さな虫がワラワラと落

ちていく。オスの体に巢食った虫も盛大にシヤラシヤラと落ちる。私は息を止める。目をそらした鳩の視線をたどるとスタイリッシュな若いメスの鳩がいる。求婚の最中を邪魔したようだ。しかしどう見てもこの二羽の立ち位置がよくない。スタイリッシュは風下にいる。風下でオスのワラワラとシヤラシヤラをまともに身に浴びている。スタイリッシュは癩癩を起こした。

「埃や垢もきらい。あなたから零れ落ちる虫なんて、虫酸が走っちゃうのよ。オォーいやだわ。いい、レディが風上に立つもの、マナーも心得てないなんて非常識極まりないわ。この鈍感さ、無神経なのに、わたしに求愛するなんて身の程知らずよ」と鶴のように羽を広げ飛んでいった。オスは喉をふくらませ、後ろ羽を上げたまま凍りついた。そして風船から空気が抜けるようにしぼんだ。振られた鳩が私に向き合う。

「見ていたな」おとお男らしく私。鳩は恥ずかしさのあまり片足を踏み外しそうになった。あなたの一途な求婚は素晴らしかったよ。

「今は十二月だ。こんなに遅い時期まで恋歌を唄わなければならぬ男がいるか」いるもんかとすすり泣く。「おれはイケメンじゃない。だけどもって生まれた顔だ、どうしようもないじゃないか」私は返す言葉もなく、同情もできず黙った。鳩は首を元に戻した。身震いしワラシヤワをまき散らし飛び去った。説教をしなくてよかった。この冬はあの鳩も私も一人なのか。亜子はどうだろう、一人で過ごしているのか、楽しい仲間と一緒に火を囲んでいるだろうか。またカーンと聞こえた。十二月の青空は悪戯をする。

自動ドアで大きな音がした。千鳥足の黒服たちだ。「いらっ

「しゃいませ」黒服の集団に負けてはいられない。前の来店同様靴は脱ぎ捨て、どかどかと畳敷きに上がり、テーブルをくつつける。座布団が行き交い、腰を下ろす。自分らの世界を作る。がさつでうるさい男たちだがここまでは世話をする必要がない。とはいえお客様は大切にしなければならぬ。霜降り男のそばにいき注文を取ろうとすると、「バカヤロー、幹事はあの太ったやつだ」「いや、俺じゃないっす」「俺だ、俺だ」髭面が叫ぶ。「生ビール大を人数分、電車の時間があるから長居できん、つまみはそこんとこよろしく」ジョッキを上げた霜降り男が「今年の慰労と来年の健康を祝して、乾杯」

「乾杯」

アパートの郵便受けにクリスマスカードがあった。亜子からだった。

二宮尊徳と静塔

石川文之進

静塔先生を報徳会宇都宮病院院長にお迎えする折りに病院の名前の由来を聞かれた。

文之進、「二宮尊徳が、私の母の徳次郎の実家に止宿し、農政に励み、下野の困窮を救ったので、彼の思想、報徳の名前を冠したのです。当時は全国の学校に薪を背負い読書する金次郎の像がありました。誰もが親しみをもって報徳の精神を愛しています」。

雅な京文化で育った静塔であったが、昭和三十七年来宇された。無骨で粗野なこの地に尊徳と身をだぶらせたのかも知れない。

文之進、幼少期より父母に我が家の尊徳への報恩と、厳しく報徳訓を暗唱させられ、尊徳の生き方を学んだ。

二宮尊徳は、江戸時代後期の思想家「万物にはすべて良い点(徳)があり、それを活用する(報いる)」。通称「金次郎」。六尺を超える長身、筋肉隆々、剛毅一徹、一見染色体XY Y のようでもあるが、子があり「診断」は否定される。

尊徳は、五歳時田畑は酒匂川の洪水で流失、一家は借財を抱え貧窮。十四歳時父、十六歳時に母を失い、幼い二人の弟達は母の実家に預けられ、他に手を引かれ振り返り、振り返り別離、断腸の思い。伯父の家に寄食、身を粉にして働く。伯父は尊徳が夜に読書をするのを嫌い、「燈油の無駄使い」

と口汚く罵った。尊徳は、無税の堤防にアブラナを植え菜種油を得、余り捨てられた苗を用水堀に植え一家を再興し、苛斂誅求に悩む民を助け、田畑約四町歩をもつ地主となった。又稗は寒冷に強く毎年実り、家の五倉に積み二十年に一度の飢饉に、飢える村人に一碗ずつ与え一人の餓死者も生ぜず。その徳は綿々と受け継がれて、なんと、今次大戦に文之進始皆、赤飯の如き美味しい稗飯を食し、生き延びた。

文政元(一八一八)年、旧主小田原藩家老服部家の家政改革を託され、その手腕を認められて、論語の以德報徳(徳をもって徳に報いる)と表彰された。

文政四(一八二二)年、小田原藩領下野国芳賀郡桜町の復興を命じられ、下野に移住し手腕をふるい見事に復興させた。弘化二(一八四五)年、下野国真岡の代官山内氏の属吏となり真岡に移住。日光神領仕法を施していたが病を患い、安政三(一八五六)年、下野国今市村(現在の栃木県日光市)の報徳役所にて没す。享年七十歳。

静塔、栃木県内各地の精神病患者さん達の精神鑑定に飛び回り、田園や畦道に立つ人達に五句創作された。

尊徳を畦に敬ふ野火の灰

平畑静塔 昭和四十一年 新編栃木集

季語「野火」は初春。稲や麦の発育に必須、害虫を駆除し、灰は田の肥料となり、おたまじゃくしだらけの田んぼで常なり。化学肥料を用いて今は野焼きは行われぬが、当時は、春先の風のない晴天を選んだ、田の畦に枯草を焼く煙が真っ直ぐに立ち上り、畦に立ち眺める静塔に、尊徳が乗り移り徳に報いてる。

尊徳堀汚さず畦を焼き申した

平畑静塔 昭和五十四年作 漁歌

季語「畦焼き」初春。畦に寄り共に流れる二宮堀、田畑を潤し神々しく豊穰の助っ人。村人は野火の噴煙、灰等で汚しませんよ。一心に火を焚く。

年末、困窮の一村民、尊徳に餅を乞う。尊徳もち米の種を与え「来年勤勞もて餅を得よ」。

文之進実家は長屋門、深さ二メートルの堀に流水猛し、丸で城砦であった。幼児が落ち二名溺死。弟裕郎も落ち、縁に掴まれと叫び文之進急を母に告げ無事だった。

尊徳に二宮講とし当時五百兩を貸し、夜間提灯で土地の高低を測り、大谷川から水を引き二宮堀を作ると古老は云う。祖母がその古文書を、藁作の米櫃箱に貼り付けているのに、驚いて止めたが、全て貼ってしまった。

尊徳止宿せし上の間に、一メートル余の白木鞘に収まれる長刀が飾ってあった。持ち出して振り回し怒られた。

定日の尊徳晴に畦を眺く

平畑静塔 昭和五十四年作 漁歌

年々歳々「定日」定まれる野焼き、晴天、畦を焼く村の人々

そわそわ、うきうき。春が来た、祝い酒。

徳を伝へて総出畦を焼く

平畑静塔 昭和五十四年作 漁歌

儒教の徳「至誠」、仁・義・礼・智・信の五徳や孝・悌・忠の実践であり、実生活で経済と道徳を融合させ、「働かざる者喰ふべからず」（百戒禅師）に一致し、これが農の原点だ。実家の大きな倉に四書五経、史記、十八史略等あり、毛筆で書き込みがあった。文之進驚嘆、五百年前吾が祖先がこれを読みしかと。

曰く、「父死不葬、爰及干戈、可謂孝乎、以臣弑君、可謂仁乎」（父死して葬らず、爰に干戈に及ぶ。孝と呼ぶべけんや。臣を以って君を弑す、仁と謂ふべけんや）。

父親の埋葬も終わらない内の拳兵は不孝であり、臣下の身で君主を弑するのは、仁に反く不忠者である。伯夷叔斉、史記司馬遷

祖父石川文三郎は文之進に、「孝と云つべけんや、仁と謂つべけんや」と教えた。後年、宇高国漢古石辰五郎先生（京大卒）に問うに、誤りに非ず、却って語句を強めると。

芭蕉の奥の細道巻頭「月日は百代の過客にして、行き交ふ年もまた旅人なり」と。李白の盗用、芭蕉つまらない。詩歌尚よし、

後年静塔に「杉並木幹にまつわる朱（あかさ）かな」を提示。長時間熟視黙考後曰く、「君は作句するな」と。漢語で句を現わすは句ならずと、俳人青々も佛語で作句、駄句。

稲車見えぬ尊徳後を押す

平畑静塔 昭和四十三年作 新編栃木集

季語は秋「稲車」、刈り取った稲を積んで運ぶ車のこと、たわわに実った重い稲穂、一家総出の刈取り。稲穂は天日干しのため、稲車に載せ凹凸だらけはざ掛け（稲干し台）場へ運ぶ。尊徳の後押しだ。

静塔、文之進、共に関東一円の精神病困難患者たちの診断治療に日々邁進した。見えぬ尊徳が後押し、多々難事を乗り越えた。

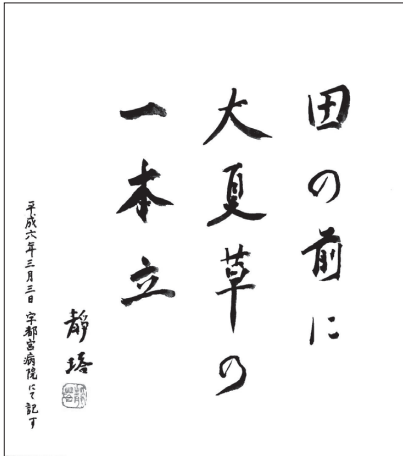
尚、二句あり、良し。

学童ら箒を肩に尊徳忌

尊徳像あゆむ親しむべき灯なく

富安風生

鷹羽狩行



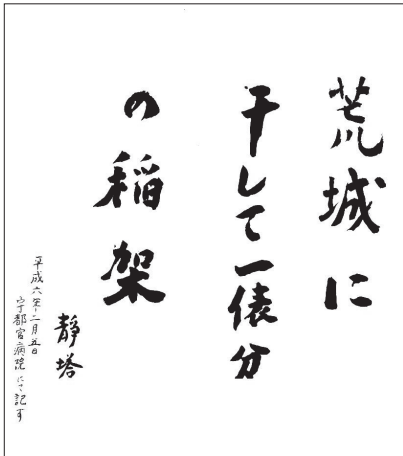
身を掻き立て

後も立ち去る

枯峠

静塔

平成六年三月三日
宇都宮病院にて記す



「地理篇」を読む

森 羅一

逸見猶吉(*1)の詩集(思潮社)末尾にⅢ「地理篇」がある。作品は前半「汗山(*2)、哈爾濱(*3)、海拉爾(*4)」と「無題」四篇の計七編。後半「黒竜江のほとりにて、人傑地靈、歴史、大いなるかばね、烈々として猛鷲なり、みどりちみどろ」の六編、計十三編である。

前半七編の発表は昭和十四年から十五年であり、中国辺境をモチーフにした作品である。逸見の詩精神の衰退と絶望が色濃く表れている。痛々しいまでの絶唱である。

後半の六篇は翼賛詩(*5)とみなされる。発表は昭和十八年、関東軍報道隊員の頃である。

「汗山、哈爾濱、海拉爾」は日蘇通信社の国境取材と個人の旅行時のモチーフに詩情を織り込んだ作品である。

「汗山」(9行)は黒竜江を含む興安嶺への辺境取材の時のモチーフであろう。

《茫々たるところ／無造作に引かれし線にあらず／バルガの天末。／生き抜かんとする／地を灼かんとするは／露はなる岩漿の世にもなき夢なり》(前より6行)

茫々たる蒙古の草原に佇立ち、筆者は現在の戦禍の行く末を北方民族の興亡に重ね思いを馳せ、強酒に酔い死んだような来し方にあらためて生きようと願う。雄大である。

「哈爾濱」(18行)《かかる日を哀憐の額もたげて訴ふる／優

しき著るしきいたましき／少女名は／風芝とよべり》

「満州浪漫」で一緒だった長谷川浬がこの作品を朗唱すると逸見は涙して聞いていたことを関合正明が証言し、末尾にある少女「風芝」に愛娘を連想していたのではと付け加えている。「海拉爾」と共に興安嶺の高原及び満州の「怒りや叫び」を身に負い、現実を見つめる作者の深い眼差しが見える。

「海拉爾」(16行)《野生の葦を囁むことき／ひとりなる汗の怒りをかんぜり／げに我が降りたてる駅のけはしき》

この地の古今の戦乱と荒廃に思いをはせ、「汗」即ち辺境遊牧民の声なき声を感じとっていたのではないかと思える。

「無題」は1「無題」(冬なれば)、2「無題」(おほいなる) 3「無題」(醒めがたき)、4「無題」(夏は爛燦の) 四篇。発表年『歷程』12号、13号(昭和十五年)。詩集には入っていないが、未収録「無題」(身は退くなかれ)『歷程』(昭和十六年)がある。5作品とも全9行。時間的推移と内容から判断するとこの五篇が逸見のノーマルな詩人としての視点で書かれた最後のものではなかったかと思える。

1「無題」(冬なれば)《なにごとか祈らんとしていのりあえず／道のこといはずとも知らされど／壮なる時をよばひて樹々は光にちぬれたり》後半3行

どこへ踏み迷うのか。祈ることすら適わないのか。

2 「無題」（おほいなる）《おほひなる纜あげて／わが怒りの発たんとするに／いまだ擾乱のあくなき海はあやしとも／ほーうおーうの叫びしきりなり／見えわかぬ無垢の道／冬ブルキの雲間にいりて／非情の友は最末の日溢れたり／かゝるとき蒼茫の日なかにかくれて／何者かわれにせまらんとすなり》

「擾乱のあくなき海」「無垢の道」からは未知なるものへ向かう「旅」＝内省のイメージを彷彿させる。

3 「無題」（醒めがたき）《醒め難き虚妄に身をゆだねつゝ／わが飢えの深まりゆくを／日はすでに奪われて／前半3行（中略）醒めがたき日を受けつがば／なにをもてわが歌のうたはれん》後半2行

冒頭にある「醒めがたき虚妄」とはそのまま読めば「醒めない・酔っている嘘」となる。逸見はウルトラマリンの中で虚妄なるものは体制であり世界であることを詠っている。この「虚妄に身を委ねる」とは現実世界いわば修羅世界に委ねると解することができる。「醒めがたき」は理性や感覚が麻痺した状態であるから、これを繋げれば「麻痺した理性で修羅に身を委ねる」となる。そして、末尾「なにをもてわが歌のうたはれん」このような状態（戦時体制）でどのような方法で詩を書けばよいのかと結ぶ。透明に近く詩心は衰退している。次篇4「無題」（夏は爛燦）と同じ思いを覚える。つまり、詩人としての「壊乱する精神」はすでに存在してないのである。

4 無題（夏は爛燦）《夏は爛燦の肉をやぶれど声なく／われは仮相の作者にすぎざるなり／痺れる水もとうめいに炎をひとたび上げたれど／眼は蒼緑のにがき光をうがちなば／あ

はれ酔ふこともならじ／迅速のつばさはいや涯の杳き渦流に墜ちんとして／肉のうちをつらぬかば擾然たるを／日ごろむなしきことのみを歌ひ／そが夢のおどろしさに狂奔するもの傷ましきかな》

この作品で注目するのは「仮相の作者にすぎざるなり」と「酔ふこともならじ」である。酔うことのできぬ仮相の作者とは何か。かつてランボーに倣い詩の方法論として暴力や壊乱を挙げていたが、詩の基底そのものが根底から消滅しているように見える。末尾は軌跡への醒めた述懐に終わっている。

逸見の詩的軌跡を見ると二期に区分することが出来る。昭和三年から十一年を東京時代とする。昭和十二年から二十一年を満州時代とする。ほぼ二つの軌跡は等分であるが、当時の情況の急激な変貌によって「詩と生活」は相反の様相を呈している。

逸見の詩業は東京時代にウルトラマリン（体制、世界、虚妄、修羅、精神）との対峙に始まり、満州時代にウルトラマリンの帰結と崩壊を示している。すでにここではウルトラマリンを客観視するのではなく、ウルトラマリンすら消滅させる情況に包囲され、その中で日本特有の文語詠嘆調に変貌している。時局は暗澹たる様相を呈し始め巨大なデーモンが大陸を覆い尽くし、やがて来る惨禍に向かっている。このような情況で真の文学は皆無に等しいと言わざるをえない。

満州時代、前半は逸見が未だわずかに真つ当な詩的感性を所有しえた時期であり、文学的には長谷川瀟等に勧められ「満州浪漫」同人となり、地理篇の諸作を発表している。この後、翼賛詩（*5）に向かう。この六篇の内、明らかに翼賛詩と認められるのは四篇で、二篇は紀行詩と人物スケッチ詩の印象

を受ける。

I 「ウルトラマリ」 II 「牙のある肖像」は詩人逸見猶吉が書いており、III 「地理篇」は素の大野四郎が書いているように感じる。未言及の翼賛詩は更に進んで日本男子として書いている。翼賛色の強い「歴史」への友人の詰問に逸見は「仕方ないのだ」と言う応えに苦渋の思いが表れている。逼迫した戦況で関東軍報道隊員の立場上、国策に従う複雑な心情が見える。研究中頃、俳優森繁久弥氏がこの時の新京放送局での朗読の様子を手紙で知らせてくれた。別稿で述べたい。

* 1・逸見猶吉（一九〇七〜四六）栃木県谷中村（現・藤岡町）生まれ。昭和四年詩篇「ウルトラマリ」で日本詩壇に登場。昭和十年に草野心平等と詩誌「歷程」を創刊。昭和十二年渡満。二十一年新京で病没。本名・大野四郎。

* 2・汗山・ハンオーラ・興安嶺、中国東北部の高原ないし陵性の山系。

* 3・哈爾濱・ハルビン・中国、黒竜江省の省都。松花江の南岸に沿い東北地区北部の都市。

* 4・海拉爾・ハイラル・中国内蒙古自治区。興安嶺西部草原地帯の都市。

* 5・翼賛・昭和十五年近衛内閣の時に大政翼賛会が成立。同十七年に東条首相により強化された官僚統制組織。言わば国民全ての活動が国策に沿って制限、協力を強いられた。翼賛詩、国策に協力した詩文学。

事ある毎に浮かんでくる川柳がある

大出

京子たかこ

—イクメンを食べてみたいと祖母が言い—

新聞や雑誌で、よく見かける川柳なのでご存知の方が多いのではないだろうか。

高齢で新語に疎い私でも、「イクメン」は知っている。「イクメン」も。だから、この川柳に笑える。どんな趣なのかと、このおばあちゃんは、食べてみたいと思ったのだろう。

〈言葉は生きもの〉とは、よく言われる。でも、近頃、こう言ってしまうことが出来なくなっている。私が高齢者になつたせいもあるが、あまりにも変化の速度が速くて、ついていけない。

初めて出くわしたとき、まごついた言葉の幾つかを上げると、「チェンソー」「トリセツ」「いつメン」「茶葉(ちゃば)」「つかみ」「おとなかわいい」「ほうれいせん」などがある。

話の繋がりで何となく解る言葉もあるが、漢字で、どう書くのかとなると、見当のつかないものが多々ある。「ほうれいせん」がそうだった。容貌に関する言葉だから「豊麗」か、と見当をつけたら、「法令線」だった。語源を調べ、人相学からきていると分かって納得できた。

私が戸惑う言葉の多くは、カタカナ語と略語である。略語

は、IT機器の普及から使われるようになった一種の新語として容認できる。といっても、「MMT」(モダン・マネタリー・セオリー)現代金融理論)というように、説明書きを読まないで理解不能なのが。

カタカナ語で蹟くのは何とも寂しい。

例えば、「デザート」をサーヴするボーイ」という文に出会うと、英語疎外の教育を受けた、あの時代を思い起こす。

人を、人の生涯を左右するのは時代の流れなのだと、抗えないその力に気付き、小説の中にも、抵抗なく日常会話として使える感覚に羨望感を覚える。

自分の語学力をさておいて、日本語は今、大きな変化の時期にあるのではなからうか、などと考えたりする。考えながら、今更バイリンガルになれないし……と、寂しくなる。

新聞も、雑誌も小説も、カタカナ語辞典なしでは理解不能になっている情けなき。

何年前だったろうか。差別用語だから使つてはいけない、という言葉の表示があった。「これでは、小説が書けない」と言われたのは、確か、筒井康隆さんだった。「びっこ」「めくら」は解る。他の言葉は覚えていないが、確か「女中」もあつた。「女中」は、明治・大正、否、昭和も戦前の小説には幾

らでも出てくる。「女中」が「お手伝いさん」になり、実質、格が上がったのかどうか。言えるのは、最近、漱石の作品の中でこの言葉に出合うと、違和感を覚えるようになったことである。

こうして、言葉はいつの間にか人口に膾炙し、辞書に載り、変化していく。まさしく、「言葉は生きもの」である。

私は数学が苦手である。数字アレルギーと言えるくらい、数字を避ける向きがある。孫達は数学の宿題で解らないところがあると、「オバアチャンじゃダメ。オジイチャンが帰ってくるまで待ってよう」と言ったものである。

数学苦手なら、国語は得手だったかというところ、国民学校、今の小学校時代まで、数学よりも嫌いな学科だった。「嫌い」の理由は「かなづかい」にあった。どうして「カンピョウ」が「カンペウ」なのか、一つ一つ覚えるのが面倒だった。「言文一致」になって、国語は面倒なことのない、馴染める学科になった。今では、言葉によつては、「チョウチョウ」ではなく、旧仮名遣いの「てふてふ」、それも平仮名で書きたい思いが強いものもある。表記はかつて、そのように言っていた時代があったという歴史上の事実からきていたのだろう。漢字もカナ遣いも、現代に合わせて変えたのは素晴らしい変革だった。

それにしても、近頃のように余りにも変化が激しくて速いと、ついていけず、寂しくなったり危惧の念を抱いたりするようになってしまう。

どなたの言葉だったか、

「やさしいことを難しく書くのは易しい」
「難しいことをやさしく書くのは難しい」

は、名言である。書くとき、そして推敲するとき、決まって浮かんでくる。

と言っても、あまりにも平易な言葉で書いてある文章に出合うと、内容まで幼稚にみえてしまうから怖い。そうかと言って、難しい熟語や漢字の多い文章では、読む気が殺がれる。読んで貰えなかったら、書く意味がないのだが、「書きたいことがあるから書く。読んで貰おうとは思わない」と主張する御仁に出会おうと、それ以上干渉することを思いとどまる。そうかと思うと、「読み返す度、削るところが出てきて、短くなってしまう」と悩む方もいて、文章って、書くことって、本当に難しいと思う。エッセイ講座の講師といつても、かつて、自分が躓いたこと、疑問に思ったこと、悩んだことなどを思い起こしながら務めてきたに過ぎない。詰まることろ、〈舵取り〉である。

「上手い文章」を書くには、こうすれば……などと言えるものではない。そのようならまい手があるなら、教えてもらいたいと、真実思う。

冒頭の川柳ではないが、「イクメン」を食べてみたい、と口にする日が私にも、やってくることだろう。

それはどのような言葉だろう。想像すると、怖いような楽しいような、妙な気分になる。

民謡を尋ねて

館野ひろ子

暑い日の昼食は長いもので済ますことが多い。そんな時ふっと冷や麦をすすする時の父の動作が浮かんできく。

あれは母が手遅れの癌であることを知った十日ほど後のことであった。

「ただいま。おなかすいたでしよう」

母の入院先から帰った私はそう言って仕事場を覗いた。修理用の時計を分解したまま、手は動いていなかった。

「ああ」

父は、母の容体を聞こうとしなかった。

二人で冷むぎをすすった。すする音と動かす箸の音だけで、とりつくしまのない無言の父だった。

かつて民謡酒場というのがあって、夜になるとそこへかけて、父は好きな民謡を唄い、太鼓を叩いて手拍子を打ち、ご機嫌な日々を過ごしていた。

そんな母の入院の最中、民謡センターで大騒ぎをしながら、父は倒れた。

「しようがない人ねえ」

父が小太鼓を叩きながら倒れたという知らせを母に伝えると、母が独り言のようにそう言った。

「お母さんが危険な状態のとき、倒れるなんて」

私は、父の病状を心配するより責め言葉を発していた。

多趣味で凝り性、宵越しの金は持たない気質の父に苦勞をかけられっぱなしの母にしてみれば当然であったろう。自分を抑えて、髪を撫で付ける暇もなく針仕事をして生活を支えて来た母が可哀想で、私はいつも母に味方して、自分ばかり楽しんでいて、父を冷ややかに見ていたように思う。

その一方で昔から箸や指でお膳をドラムに見立てて見事に叩いていた父、バンダラダッタッタという響きは今でも頭の片隅に残っている。また、紙、葉っぱ、タンポポの茎で笛を作り、それで童謡を吹いてくれた。はたきや箒の竹で出来た柄の部分の切った横笛を作ってしまった、母にたいそう叱られていた父が思い出される。

父は、横浜生まれの横浜育ち。戦前は消防音楽隊の一員となるために、独学で夜遅くまで音符に取り組んでいた。やがて出征兵士を送り出す行列に加わり、ピッコロを吹く姿や、ドラムを叩いて行進する父の姿を見るようになった。そんな父を幼いころの私は嫌いではなかった。むしろ誇らしく思っていた。

戦時中、横浜の大空襲で家を焼かれ、家族ともども徴用されていた軍需工場と共に宇都宮に移って終戦を迎えた。

還暦を過ぎたあたりから、父はリール式テープレコーダー

を抱え、よく出かけていた。

何のためだったのが分かったのは、父亡き後二十年ほど後のことだ。今にして思えば、ああそうだったのかと頷ける情景がいくつも浮かんでくる。

テープにとってきた唄を竹笛で音を確かめながら、五線譜に書き込んでいた父。民謡の楽譜は独特なものだ。

かつて横浜で消防音楽隊のピッコロやスネアドラムの奏者だった父は、聴音の技術を生かして誰にでもわかる楽譜にしたてるくらは、お手のものだった。しかし民謡を知らずして民謡を訪ね採譜するのは難しい。ピッコロが横笛や尺八に代わり、ドラムやスティックが小太鼓とバチに変わった。しかもいつの間にか、栃木県郷土民謡協会の会長という看板がかかるようになっていった。

当時、『民謡をたずねて』というラジオ番組を父はよく聞いていた。その番組に父は足尾まで足を運び、発掘したと言う『足尾石刀節』の楽譜を送って放送してもらえたと、ご機嫌に話してくれた日のことも思い出す。

「NHKのお墨付きになったから、そのうち全国版になるぞ」と子供のようにはいしゃいでいたものだ。

父の愛読書であった昭和四十三年に発行された『ふるさとの歌』のとき版を開いたところ、監修に当たった民謡研究家の町田佳聲氏と竹内勉氏は、

「栃木には民謡は、日光和楽踊りくらいしかなく、もっと栃木らしい、美しい唄の発掘と普及を栃木県民は考えるべきところきているのではないか。民謡に関する研究をする人材も不足だ」と訴えていた。そして栃木県出身の作曲家福田蘭堂は、山が多く外にでにくいので、知られていないのが消

滅を免れていくつかが残っているはずだ、と書いていた。それらの箇所には父は赤線を引いていたのである。

当時の民謡分布図にもなかった、足尾馬方節も父がこのままではやがて消えてしまいかもしれないと、土地の長老たちを訪ね歩き、採譜したのだと知ったのは、ずっと後のことであつた。

民謡愛好家の知人が父の事を記した、足尾馬方節に関する文献を届けてくれた。そこには、

「足尾銅山には馬は欠くことのできない輸送の手段であつた。そんな時代に唄われた足尾馬方節も時代と共に消えてしまふ運命にあつた。それを『大家博氏』が足尾の古老から唄の断片を聞き出し耳にとどめて楽譜に記し、点から線へと歌詞を書き加えて、この足尾馬方節を纏め上げた」と解説してあつた。

一方、石刀節は全国各地にあつたが、今に残っているのは、NHKの「民謡をたずねて」に送つたという足尾石刀節だけであると言われる。今では全国版の民謡集に載っている。

さらには、父と共に民謡を練習していた青年が、後に全国民謡大会で足尾石刀節を唄って、堂々と優勝している。

今では押しも押されぬ栃木民謡会をけん引されている御仁だ。この嬉しいニュースも父は知る由もない。

五十三年目の鎮魂歌

小島 延介

友人の陶芸家が板室温泉の大黒屋で個展を開いていると聞いて、この機会に「保養とアートの宿」に一泊しようと三人、車で出かけた。

黒磯で国道四号線を左折して板室街道をずんずん進んで行くくと、木の俣川を渡る手前に左へ曲がる道があった。

それは、けたたましいサイレンを響かせた救急車が出入りし、警察のパトカーや社旗をたなびかせた報道各社の車がひしめいた、木の俣用水崩落事故現場に通じるただ一本の道だった。

あの日、私はいつものように、午前中に取材した記事を仕上げ、県庁記者クラブの机に足を投げ出して他社の新聞を読んでいるときだった。

本社編集局と結ぶ直通電話が鳴った。受話器を取ると、デスクが叫んだ。

「黒磯で数十人がガス中毒で倒れた。すぐに現場へ急行してくれ」

急ぎ足で本社に戻ると、私は警察担当や遊軍記者と五人でジープに飛び乗った。

思えば七年間の記者生活のなかでの最大のニュース、「木の俣用水隧道事故」に遭遇したのは、もう半世紀以上も昔に

なる。

一九六六年（昭和四十一年）七月八日午後三時ごろ、那珂川の支流木の俣川から取水している用水路のトンネルで、台風による増水で崩落した土砂の除去作業をしていた黒磯町（現在の那須塩原市）百村地区の人たち六十一人は、照明のために持ち込んだ発電機のガソリンエンジンから出た排気ガスによって一酸化炭素中毒に罹り、二十五人の尊い命が奪われ、三十四人の重症者を出した。

水田耕作者にとって用水路の水が止まれば大問題。だからと言って水を求めることの厳しさを示すには、あまりにも大きすぎる犠牲だ。

いつもは静かな農村に突然起きたこの大惨事、各社は記者を大勢派遣して報道を競った。私たち栃木新聞社も、事故現場の模様、亡くなった家族の表情、事故をもたらした那須野が原扇状地の水問題、集落共同体の実態などを深掘りして解き明かそうと泊り込んで取材を続けた。

とはいっても、ファックスも携帯電話も、ましてやメールもない時代、あるのは一台の運転手付きジープと公衆電話で送稿する十円玉、そして記者の足だけだった。

そんななかで、最も辛かったのは亡くなった人の顔写真集めだった。

悲しみにくれる遺族に「○○さんの写真を貸してください」と請うても、「それどころじゃないんだ」と玄関払いされ、他社には先を越されて持って行かれるので右往左往していると、デスクからは「まだか、まだか」と催促の矢。暑い中で泣きたくなったが、記者として最も鍛えられる場面だと、汗を拭き拭き手分けして二十五人の顔写真を集めることができた。

こうして「水との闘いがひき起こした農民の悲劇」として全国的に強い衝撃を与えた現場での深い思いは、今なお私の記憶の奥底に沈んでいる。

私は板室温泉に出かける前に、生涯のなかで最大の犠牲者を出したこの惨事を思い出し、旅館に着くとすぐに「今はどうなっているのか」と聞いてみた。

「何分昔のことですから……」と渋い顔をしながらも詳しく調べてくれた。それによると、事故の現場には殉難者供養塔が、百村集落の寺には同じく殉難者慰霊碑が建っていることがわかった。わかった以上、帰りにはどうしても寄りたくなり、運転の友人に頼んで供養塔と慰霊碑への道をたどった。

供養塔には、その脇に犠牲者を供養する仏像が建っている。深い山の中にあつて、今は訪れる人も少ないようで、年に一回ほどボランティアが道にはびこったツタなどの雑草を刈り取っているという。

街道から「ここだろう」と入った道は、曲がりくねった細い道。水溜まりをはねながら、しばらく平地林の中を走ると広い道に出た。道を間違えたようだ。

友人は「引き返してもう一度探そう」と言ってくれたが、

供養塔までは車が入らないのではないかとあきらめ、寺にある慰霊碑へ向かった。

百村集落にある二つの寺の一つ、光徳寺の杉並木参道入り口に大きな慰霊碑は建っていた。当時の県知事横川信夫の書で「木野侯隧道殉難者慰霊碑」と書かれ、裏面には二十歳から七十二歳までの女性六人を含む二十五人の名前と年齢が書き込まれている。これを見るだけでも、集落総出の勤労奉仕にはそれぞれの家で誰かが参加しなければならぬという無言の縛りが感じられる。

慰霊碑を背にすると、大きな犠牲を払い、翌一九六七年に着工された国営那須野原開拓建設事業の農地開発事業で整備された水田が、収穫を終えて水はもう心配ないという光景で広がっていた。

それにしてもあのとき、この辺りは何度も行きつ戻りつしたはずなのに、いくら記憶を手繰っても当時の風景は何ひとつ浮かんでこない。

私は五十三年という歳月の流れと、夢中で駆け巡った若き日に思いを馳せながら、慰霊碑に深々と頭を下げ、刻まれた二十五人の冥福を祈った。

夏の思ひ出

小林 博

去年の七月中頃の暑い日、妻がアシナガバチに手首を刺されて大騒ぎになった。見る間に腫れ上がったので、近くの病院で点滴を受け、騒ぎは収束するかに見えた。

ところが妻の蜂への恨みは収まらず、帰るとすぐに殺虫剤を連射して蜂を追い払った。

アシナガバチは七月初めに一匹で飛んで来て、軒先の水道の洗剤やスポンジを置く棚の下に巣をかけ始め、一、三匹になつたところで妻と衝突した。巣は洗い場の目と鼻の先で、妻と蜂は生活圏がぶつかったようだ。

私は蜂が棚を屋根代わりに利用しているのを見て、今年の夏は雨が多いな、とその賢さに感心させられていたので、蜂の巣が取り払われてしまったことは大変なショックであった。それにも増して、アシナガバチは一匹で飛んで来て、順次、子を増やしていったことに強い関心を持っていた。

ミツバチの女王蜂は卵を産む繁殖が専門で、働き蜂は働くことに専念する。ミツバチは役割を完全に分担しているのに、アシナガバチにはそれが無い。スタート時にはそれら全ての仕事を一匹の蜂が受け持っている。オスの蜂はどこにいるのだろうか？

アシナガバチが追い払われて、物足りなさを感じながら庭の草花の水遣りに軒先の水道を使っていると、四、五日後に

はまた飛んで来て、蜂も私の心配を察知したかのよう、今までよりはもっと高い三メートルほどの軒下に巣をかけた。朝夕に蜂と顔を合わせる楽しみがまた戻って来たと、私はニンマリした。

「そつとしておけば襲って来ないから、鉢合わせしても手で払いのけないで、動かずにじっとしているように」

妻には因果を含めて巣作りをしなすぶ納得してもらった。気象庁からは何度も「災害級の暑さ」と警報が出されたが、数匹の蜂は屋外の暑さにもめげずに巣作りは活発を極め、瞬く間に直径十センチほどの分厚いものに拡大し、十五匹ほどに増えて黒々と飛び回っている。

私も巣の建て増しを眺めるのが楽しくて、すっかりアシナガバチがマイ・ペットに変わってしまった。これには妻も「いつも、冷や冷やして洗い場を使っているのに」と呆れていた。

春先に黄色い花の臘梅や万作が先陣を切つて咲くのは、自然界の植物と蜂類の間に暗黙の心遣いがあるものと、前々から考えていた。

この際心を鬼にして、竿の先に黒いテープをヒラヒラさせて巣に近づけた。蜂はカラスか熊が襲って来たと勘違いしたのか、いっせいに狂ったように飛びかかってきた。

次に赤いテープに付け替えて同じようにしたが、反応は鈍かった。アシナガバチは赤い色が見えないようだ。

春先に、黄色に遅れて赤い花の桜や桃が咲くのはそのためだと、私の推理が正しかったと妻に自慢し、実験に協力を惜しまなかったアシナガバチに、感謝の気持ちが湧いてきた矢先のことだった。

台風の大雨の翌朝、巣は壊されていて蜂が一匹も見当たらない。巣の黄色の蓋は千切られて幼虫も全滅。蜂との親密度が増して互いの生活圏を認め合っていたのにと落胆し、和製ファープルが予定していた実験計画は中断せざるを得なかった。

犯人は巣が軒下だから犬や猫ではない。オオタカやハヤブサの猛禽類ではと考えたが、民家の軒先までは襲って来ないだろう。まさか我が家の誰かさんでは？

ニホンミツバチの飼育を趣味にしている友達に相談してみると、「多分、スズメバチの仕業だろう」と、スズメバチを退治する仕掛け付きのペットボトル二本と、呼び寄せる試液の作り方の手引きを送って寄こした。

私はその手引き通りにコーラと酢を配合して試液を作り、二本のペットボトルに満たして、壊れた巣の周りに吊るした。これで蜂も安心して戻って来るものと待ったが、巣作りの時期が過ぎたのか、いっこうに姿を見せなかった。

暑さがようやく去った十月四日、庭木の手入れをしていてアシナガバチと再会した。椿の枝先に黒々と二十匹ほどが塊まっている。危うく枝ごと切り落とすところだった。幸いなことにあの好戦的な動きは影を潜め、急な冷え込みに温め

合っているのか、互いに体を寄せ合っていた。

気になって落ち着かない十月二十日、恐る恐る葉っぱをめくると、二匹の姿しかない。七月初旬の最初の巣作りは、女王蜂兼働き蜂の一匹で始まって、今、二匹に戻った。

目の前の大きいほうが新たな女王蜂、もう一匹はお相手のオス。仲睦まじく寄りそっている姿からも、そうとしか考えられない。残りの蜂は、このカプセルに来年を託し、どこかに飛び去って死んでしまったのでは……。

それにしてもアシナガバチの一生は何だったのだろうか？ 殺虫剤を連射されて住み家を追われ、実験台にされて踊らされ、揚句の果てにスズメバチに襲われて一家離散の散々な目に遭った。

「蜂の命は短くて苦しきことのみ多かりき」激動のひと夏であつたらう。

これからは、たった二匹で厳しい冬を越さなければ一族が途絶えてしまう。それどころか私は来年の春先、臘梅の黄色の花の上で再会することを心に描いている。

来年のことを言うときと鬼に笑われそうだが、太めの篠竹を長さ十五センチほどに切って数本を束にし、竹の中空が寝ぐらになるようにと、アシナガバチの目と鼻の先きに吊るしてやった。

八十路の菩提登山

水野 弥彦

人には誰でも、その生涯の内度一度や二度は何かチャレンジすることが、よくあるものだ。学生時代ならば自分の将来を方向づける希望校を選び、それに向かって努力する。また将来の自分の生活基盤を支える職業選びは、なおのこと大事な事柄なので真剣に取り組まざるを得ない。さらに各種の資格取得など自分の生涯で、何度となくチャレンジせざるを得ない機会はやって来るものである。

趣味やスポーツの分野に関しても、同様のことが言えないだろうか。よく言われることだが、仕事に従事している現役世代に、将来の退職後のことを見据えて、生涯続けて行ける「趣味」と「スポーツ」を身に付けておくことの大切さを指摘されることが多いからである。本格的な長寿・高齢化社会に入っているわが国である。自分が高齢者の仲間入りした時に、いかに「健康で心豊かな生活」を送ることができるかを念頭に置いて過ごして来たかが問われよう。

私の場合は、良き上司、多くの知人・友人に恵まれ七十八歳までジャーナリズムの世界に身を投じ五十数年、東京をベースに好きな仕事に従事、恵まれた環境の下で生活を「送って来たことに、感謝の気持を一時も忘れたことはない。八十路を直前に迎えた時に、心に誓ったことが一つあった。七十五歳の時に妻に先立たれ、残る人生の指針に掲げたのは

終生「チャレンジ精神」と「好奇心」「感謝の気持」を忘れず、前向きに生きて行く姿勢を失わないこと——であった。

一昨年、八十路に入った。お陰様で、これといった病気に罹らず、現在、残り少ない余生を好きな趣味（登山、太極拳、卓球、俳句、囲碁、歴史散策、カラオケ）などで、地元の仲間と励まし合いながら、日々の生活をエンジョイしている毎日だ。そんな時に、ふと脳裏を掠めたことがあった。「秋の十月には亡妻の七回忌を執り行うのだから、何か供養に結びつくものはないだろうか」。

そこで浮かんだのは、自分一人で出来る「山登り」の年間の山行回数を、過去に達成したことのない七十回にチャレンジしてみてもどうか。家内は満七十歳で、この世を去っている。結婚当初は、よく二人で日光や奥多摩、八ヶ岳方面へ足を延ばしていた時代もあったから、それに「山の神」に参ることで菩提をともらうことにもなる。

昨年の元日に、新年の誓いとして、この目標に向かって一年間チャレンジすることに決めた。前年の年間山行は五十回、これまでの最高山行回数は六十五歳の時に達成した五十六回が、年間の最も多い到達点。日帰りであっても何日山に入ろうが、一旦、家を出たら自宅に戻るまで、幾つの山を登ろうが数のカウントは同じ。

戦後、間もない一九五二年（昭和二十七年）、中学生の時代に登山家だった父親の誘いで本格的な山登りを始めた。五人兄弟の四番目、上三人の兄達と異なり、母親が大病したあとに出生したこともあり、幼少の頃は虚弱体質で父親の心配事の一つだったらしい。こんな背景が私を山登りに誘い出した切っ掛け。中央線沿線の三ツ峠、大菩薩、奥多摩の大岳山、富士山（須走口、太郎坊口）、日光の男体山、白根山、尾瀬などの山々に足を運んだ。その健脚ぶりは父親を喜ばせ、何かと目を掛けてくれた。

もちろん、有名私立大学の附属高校に進学するや直ちに名門の山岳部に入部。高校一年の時は早くも甲斐駒ヶ岳（釜無川源流遡行）の厳しい冬山合宿を皮切りに穂高連峰、八ヶ岳連峰、後立山連峰、谷川岳、奥秩父全山縦走、剣・立山・南アルプスなど夏、冬、春、秋の合宿などを経験し、その後、全国各地の名だたる山域に足を運んできた。

その甲斐あってか、八十路に入っても、これといった病気にも見舞われずに健康に過ごさせてもらっていることに常に感謝の気持ちでいっぱいだ。中学時代から本格的に始めた山登りは、その後、今日に至るまで自らの健康法の一つと自覚し、何よりも最優先して実践することを心掛けている毎日だ。ただ悩みがないわけではない。長年の山登りのせいであろうか、足の膝の軟骨が摩耗し、山の厳しい下り道では、膝に激痛が走る。数年前から整形外科医の指導を仰ぎ、対応策を講じる措置を取っている有様。

こうした背景もあって、七十五歳を過ぎた頃から、歩くペーペースをワンランク下げた。まず自分の息が荒くならない程度に歩くことを心掛け、所要時間も通常の人の歩く時間に一・五

倍を掛けて歩く。親しい呼吸内科医の助言でもある。二時間なら三時間、四時間なら六時間、六時間なら九時間。この方式で、その日歩く時間を想定し、コース途中の到着時刻や最終目的の時間を予想する。休憩の取り方、昼食場所を決め、これらを事前にシミュレーション。装備・食料などを準備する。移動する際には格安きつぷや安宿を利用する。対象山域も原則、関東周辺に絞り、今まで余り目を向けなかった千ヶ程度かそれ以下の低山に足を向けることが多くなった。

さて、昨年一年間は一月六回、二月六回、三月九回、四月七回、五月五回、六月六回、七月三回、八月五回、九月七回、十月九回、十一月九回、十二月八回となり、最終的には当初の目標を大きく上回る八十回山行を達成した。一月四日が第一回、そして十二月二十八日の山行で八十回目、八十路にマツチした数字となってしまった。山仲間の助言もあって、亡妻の七回忌法要の折に決断し、孫や子供達の声援もあり、秋から年末に掛けては、山登りをかなり優先するハードな日々が続いたことは言うまでもなかった。

足を運んだ先きは、地元である栃木県は勿論のこと、福島、茨城、群馬、埼玉、東京、山梨、長野、神奈川、静岡の十都県に及んだ。海拔千以上以上の山は会津磐梯山（福島県）、那須岳と鳴虫山（栃木県）、御岳・大岳山（東京都）、扇山（山梨県）、竜爪山（静岡県）と数少なく、いずれも過去登っている。複数回登った山は大平連山、大小山、諏訪岳、男抱山、古賀志山、鞍掛山、半蔵山、宇都宮アルプス、二股山、かまど倉、鳴虫山、お天気山、羽賀場山（栃木県）、吾国山、難台山、高鈴山、神峰山（茨城県）、南郷山・暮山（神奈川県）など。山行は原則・単独行で行った。

バス停にて

柴崎 幸子

今降りた駅はとても小さい。時刻表には一時間に一本の表示しかない。携帯で時間を確かめると、目的のバスが来るまでまだ時間がある。

夏の日差しは強烈で薄物のブラウスでは紫外線を通して肌がジリジリ焼けてくる。急いでバスの発着所脇の小屋に避難した。硬いプラスチックの長椅子に座り、電車とバスを乗り継いで出かけて来たことに後悔する。

会うたびに膝の不調を訴えていた友人が数日前、手術をするので離れた病院に入院したと連絡があった。

車を使えば簡単に行ける。しかし、あいにく家人が使用中で、私の移動手段は自分の足だけだった。必ず行き着く方法はあると思ひ、慣れない公共機関を使って見舞いに来た。

目的のバスは定刻通りに到着して、私を友人の入院している病院まで運んでゆく。久しぶりに乗った路線バスの車窓から眺める風景は妙に懐かしい。

病院は立派な七階建てで、田んぼの緑の中でひときわ大きく目立っていた。もちろん、帰りのバスも一時間に一本しかない。素通りされたら大変だと思ひ、到着時刻二十分前には停留所に立っていた。

昼近くになると、真夏の太陽は頭のとっぺんから、これでもかと勢いよくギラつく。バスが来る方向を目を細めて見つ

めていると燃える空気がグニヤリと曲がり時空をゆがませた。

白い日傘を差した母に連れられて、麦わら帽子を被った幼い私が歌をうたいながら歩いている。これから行く母の実家は、周りを水田に囲まれた郊外の農家だ。

私たちの住んでいた家からは、一度バスで駅まで行って、そこから別の路線に乗り換えてやってこなければならぬ。さらにバスの停留所からも遠かった。水田に沿ってぐるりと歩くと小学校が現れる。その横を通り竹が群生している薄暗がりを抜けると、赤い屋根の家が見えてくる。

そうやってバス停から延々と歩く。顎を出した私は母に手を引かれ、頑張って歩けば土産に持参した菓子がもらえる、などと諭されどうにかたどり着く。

長時間の移動ですっかり疲れ、私は昼食後にはカエルの鳴き声を聞きながら昼寝する。

母の実家には、祖母と祖父の妹、長兄の伯父夫婦と従兄弟の二人が暮らしていた。兼業農家はみんな忙しそうだった。

昼寝から目を覚ますと慌ただしく帰りの時間になる。「早くして、バスが行っちゃう」

母に急ぎ立てられ、持ってきたウサギのぬいぐるみを忘れ

ないように抱え上げる。そうして、急いで出て来ても歩く速度が遅かったり、バスがほんの少し早かったりして停留所が見えた時には排気ガスの煙の中に、バスの後ろ姿を眺める。その場で私たちができることは、ただひたすらバスを待つことだった。

丸看板と時刻表が付いた棒がある道路の端に、母と二人で佇んでいた。座るベンチなどない。幼い私は「まだ？」を連発した。しまいに待ちくたびれて、しゃがみ込む。バスが来るころには母の背中におんぶされている。

それでも母は里帰りを心待ちにしていた。

父は八人兄弟の長男で、母が嫁いだときは、年の若い叔父たちが一緒に生活していた。

みんながこたつを囲んでいると誰かが、

「義姉さんも一緒に暖まろう」

と言ってくれるのだが、入る隙間はなかった。ちよつとつめて下さいとも言えなかった。独り言のように話す母の言葉を覚えていて。

その後、私も成長して久しぶりに二人で実家に行った。水田の苗が美しく並び緑がサワサワと揺れる中、帰りのバスを待っていた。

「実家といつても、嫁として働く同じ立場の人がいるんだもの、甘えて長居するわけにはいかない」

誰に話すわけでもない、風のような母の声を聞いた。

昭和四十年代、長男の嫁という見えない鎖に、もがいていたのは自分だけではなく、実家の義姉さんも同じなのだ、自分に言い聞かせるように静かに言うのだった。

遠い風景を思い出しながら一本道を見ていると、小さな黒点がゆつくりと大きくなってバスが近づいてくる。

「やっと来た」私は安心する。同時に母を想う。実家を後にして嫁ぎ先に戻るとき、どんなに長い時間待ったとしても「もうバスが来てしまった」

と感じたのではないだろうか。

箏曲「奈良の四季」・祖母のことなど

藤田 香月

奈良興福寺の境内、五重塔を右手に見て 東金堂との間の道をまっすぐに進む。本坊前まで来ると、右手に生駒石の大きな歌碑が目に入る。

はるきぬと いまかもろびと ゆきかへり
ほとけのにはに はなさくらしも

秋艸^{しゅうそう}道人、會津八一の歌で、この興福寺歌碑は平成十九年（二〇〇七年）三月三十一日に除幕式が行なわれた。私は式典に参列できなかったが、新潟市會津八一記念館から求めた歌碑建立のDVDや、会報「秋艸」第二十四号などにより、その様子を知ることができた。

そして、箏曲「奈良の四季」のあることを知ったのだった。

會津八一の奈良の歌四首に 宮城道雄先生が作曲されて、昭和三十年（一九五五年）六月にできた曲とのこと。

八一の養女、蘭子^{らんし}さん（本名は蘭）が宮城先生の門下であったことから、二人の巨匠は親交がおりであったという。八一が書を贈ると、宮城先生は指先でなぞられ 心で読まれたと聞く。興福寺歌碑の碑面の書は、宮城記念館蔵の八一の詩箋が選ばれたということも嬉しい。

ほとけの庭（興福寺境内）は、奈良を訪ねた折によく歩く。碑の前に立つとき、お二人のほほえみが浮かんでくる。私はそっと「はーるーきーいぬーうううとー」と声に出してみても、かきねのないほとけの庭に入り、碑に会い、五重塔の下を通り（いつかの夕ぐれには、丁度塔のあたりで鐘の音を聴くこともあった。「奈良の四季」の春に鳴る鐘の音はこの鐘であろうか）五十二段の石段を降り、傍らにある猿沢池前の八一歌碑（わぎもこが きぬかけやなぎ みまくほり いけをめぐりぬ かさゝしなごら）にも挨拶をし、池に沿って三条通りへ出て宿へと向かう。この道は何度か歩くうちに、私の奈良の旅での好きな道の一つとなった。

昭和三十一年（一九五六年）、宮城先生は六月に、そして八一も十一月に亡くなられた。

没後五十年、お二人の残されたこの曲が気になって、私は疎遠になりかけていた黒尾タマ子先生（箏曲教授 沢井箏曲院門下）をお訪ねした。

『奈良の四季』をご存じでしたら お教えいただきたいの

ですが」と勝手な申し出をしたのだった。

先生は「以前に弾いたことがあります、少し時間をください」とおっしゃってくださった。

数カ月後、黒尾先生は私ひとりのために、ご自宅で演奏会を開いてくださった。今は亡き木村朝子さんにも習っていた、お二人で「奈良の四季」を聴かせてくださったのだった。このことは忘れることができない。

平成二十五年（二〇一三年）六月二十三日、箏曲宮城会主催の「宮城道雄生誕百二十年記念 講演と演奏の会、會津八一と宮城道雄——伝統と革新——」が新潟市音楽文化会館ホールで開催された。

この日、黒尾先生と二人新潟に向かい、先に八一が晩年の十年を過ごされた 南浜・秋艸堂（北方文化博物館 新潟分館伊藤邸）を案内させていただいた。

八一が起居された西洋館、蘭子さん憩いの間、そして八一の書「北苑芳芬」の横額のかかるお座敷に。

そこにはかつて、箏を弾かれる宮城先生のお姿があった。そのすぐ間近には、同じ畳の上に、神妙な面持ちの八一が

宮城社中と蘭子さんたちも一緒に稽古の様子を見守っていたのであった。昭和二十五年（一九五〇年）十一月十八日のことで、伊藤邸に残る写真によって知ることができる。ご当主伊藤勝也氏のご厚意により、後日この写真の写しをお頂戴し「奈良の四季」の楽譜とともに持っている。

お二人の座られた畳の前に私たちも座り、お庭を目にしたがら当時を偲ばせていただくのであった。

南浜のお邸をおいとましようとお関近くの間に移った時、黒尾先生は「あらッ、何かしら？ これッ！ 風？ 海からの風なの？」と驚きの声をあげられた。だが、たしかに、私にも感じられたのであった。今までに味わったことのない、やわらかく厚みのある風のうねりを。透明でありながら目にも見えたようにさえ思われたのだった。まるで、川上澄生の版画「初夏の風」のように。

あの時、私たちの囲りを優しく巡っていた風は何だったのだろう。単なる浜風の通り道による現象であったのか、それとも、八一が歓迎してくれたのだろうかとも今も思う。

お邸を後にして近くのレストラン「ネルソンの庭」で食事をし、黒尾先生と演奏会会場へと向かった。

會津八一やお箏に導いてくれたのは、祖母、高杉キヨであったとこの頃思う。祖母は越後の三条から小川町（現那珂川町）の高杉政庸のもとに後添えとして来たのだった。

政庸の子のひとり、早稲田大学で八一に学び、秋艸堂への出入りも許されていた。

祖母はお茶やお箏を能くし、まだ若い頃の私の母を三条から小川町に呼び寄せていた。もし母がこの地に来なかつたら父と出会うこともなく、私という人間は存在しなかつたことになるのだった。

赤いセーターの女の子

大野比呂志

日中、軽くノックをして病室に入ってくるのは看護婦（現看護師）か医師だった。

しかし、そのときのノックは、どうみても遠慮がちにしか聞こえない音だった。もしも友人が知り合いであったなら、ノックをするなりドアを開けて入ってくるはずだ。

けれども、ドアが開くようすはない。ちよつと間をおいて、再びノックする音。

「はい、どうぞ」

わたしは読んでいた本をベッドの横に置き、起きあがりながら言った。

ドアが少し開いた。その隙間から女の子の顔が覗いた。初めは、教え子のだれかが見舞いに来てくれたのだろうかとも思った。わたしが担任している子どもたちは小学生である。ドアの隙間に見えるのは、中学生か高校生の顔だった。

「どうぞ」

静かにゆつくりとドアが開く。初めて見る顔だ。

「あの、絵を見せてもらってもいいですか？」

大きく見開いた目で、窺うようにわたしを見ながら言った。

「絵？」

「はい、その絵です」

絵は壁に立て掛けてある。わたしの部屋は二人部屋で、ベッ

ドが二つ入っていた。しかし、隣に入院患者がいなかったの
で、そのベッドの上に絵の具を広げて絵を描いていた。

「下手な絵ですよ」

「ううん、綺麗です」

女の子は笑みを浮かべて首を振った。

胃潰瘍、十二指腸潰瘍の治療のために病院に入院していたわたしは、よりによって病室で絵を描き始めたのである。これまで絵を描いたことなどほとんどなかった。たまたま見舞いにといただいた深紅の薔薇の花が花瓶に差してあり、退屈しのぎにと筆を持っただけであった。

入院患者の知り合いはいない。散歩がてらに院内を歩くことはあるが、談話室に立ち寄っておしゃべりをするということもない。まして散歩の途中で親しくなったという人もいなかった。

この娘は、わたしが絵を描いているのをどうして知っていたのだらうと思つたが、素っ気なくふるまうのも大人げない。

「まだ描き終わらないのですか？」

そう訊かれて困った。下手な絵に完成などありはしない。気に入らなければ、ペインティングナイフで削り落としてしまふかもしれないし、塗り潰してしまふことだってある。だからといって、「永久に終わりませんよ」と言うわけにもい

かない。

「あと少し……」

「終わったら、また見せてください」

わたしの返事も待たず、「お邪魔しました」と、言い残して、女の子は部屋を出ていった。

昼食の食べ具合を調べるために看護婦が病室に来たとき、わたしは赤いセーターを着た女の子について尋ねた。

「ああ、七階の可愛い子ね」

だが、その子の名前も病名も教えてはくれなかった。「七階の」ということばが、何か特別な響きをもってわたしの耳に突き刺さった。

食事療法を続ける上で欠かしてならないのが適度の運動である。わたしは、エレベーターを使わず、階段を使って院内を歩き回ることを日課にしていた。

廊下を歩きながら、別棟の最上階のペランダを見上げるこゝろがあった。そこにはさまざまの花が咲きほこっていた。ペランダを花壇のように使うことが許されているかのように彩に満ちていた。

鈍感なわたしにも、そこが長期間の入院を余儀なくされている人たちの病棟であることぐらひは察しがついていた。患者たちは、闘病に堪えるためのささやかな楽しみとして鉢花を並べていたのである。

赤いセーターを着た女の子について教えてくれたのは、入院患者の付き添いの婆さんだった。廊下を歩いていたとき、

「ハンセン病の子が来ていたようだね」

と、耳打ちされたのである。

「まだ、子どもだというのに、可哀そうだね……」

そのとき、わたしは別棟について誤解があったことに気づかされた。肺を病んでいる患者の病棟と思いこんでいたが、それだけではなかった。暫定的な処置であったのか、それはわからないが、ハンセン病患者の病室もそこにあったことを知ったのだった。

ふたたび赤いセーターの女の子が姿を見せたのは、それから一週間ほど後だった。

「絵は仕上がりましたか？」

わたしは、これ以上手を入れる気はなかった。と言うより、どこにどう手を入れてよいのかわからなかっただけのことだった。

「すると、その絵はどうするのですか？」

そのとき何と答えたのか、正確には覚えていない。ただ、細切れのことばが交わされたことだけは記憶している。

女の子は、数日後、別の病院に移るようになったこと、転院しても大事にするのでその絵をいただけないかということを手短かに話した。ハンセン病患者の隔離施設に入所することが決まったのだなど、とつさに理解した。こんなとき、下手な絵であることを謙遜することにはどんな意味があるだろう。

名前も知らない女の子は、木枠だけの絵を抱きかかえ、笑顔を残して部屋を出ていった。

六十年も前のことである。

一九九六年、国の隔離政策は終わった。それから二十五年後、熊本地裁は国に三億八千万円の賠償を命じた。昔、赤いセーターを着ていた娘さんは、自分の人生を振り返り、どんな気持ちでその判決のニュースを聞いたのだろうか……。

宇田川君の意見文

松林 厚子

小学校三年生の時の担任は、赴任してきたばかりの近藤先生だった。四十代のふくよかな男性で、小さなたれ目が印象的だった。先生はご自宅から子供向けの名作集を何冊か持ってきて、教室の本棚に並べた。

「本を読みましょう。どんな本を選んで構いませんよ」

自宅にある本でも、図書室にある本でも構わないという。自宅にある本は、難しくて読めないし、図書室に行っても、どれが私に読める本なのか選び方がわからなかった。それで先生が持ってきた本の中から、一冊選んだ。フランダーズの犬、小公子、小公女、アルプスの少女ハイジ、そんな類の本だった。

本というと、難しくて理解できない、というイメージがあった。が、先生の持ってきた本は、どれも面白くて夢中になった。学級文庫の本は、少しずつ新しい本と入れ替わっていた。しばらくすると、先生は国語の時間に、読書感想文用のノートを配った。

「読書感想文を書きましょう。本を読んで思ったことを書けばいいんです」

子どもたちは、口々に、「えー」と不満な声をあげたが、私はちよつと違った。本を読んで、感じたことがあって、誰かに聞いてほしかった。感想文には、クラスの友達には言え

ないことも書いた。

「セーラは、お金持ちの時は、寄宿舎で大切にされた。でもお父さんが亡くなって貧乏になったら意地悪されるようになった。うちは、貧乏ではないけど、クラスの中には意地悪な子がいる。〇〇さんだ」

同級生や、家族のこと、自分の身の回りに起きたことをかためて、いくつも感想文を書いた。先生は、大きな花丸を付けてくれた。私は嬉しくなった。書けば花丸が貰えるのだらうと、深く考えずにあらすじだけの感想文を提出した。先生は、文章を読むと、残念そうな顔をした。

「これは、良い感想文ではないです。小田さんの気持ちが書いてない」

赤ペンで三角を描かれたノートを返された。私は、何が駄目だったのかわからなかったが、恥ずかしかつた。下を向いてとぼとぼと自分の席に戻った。

国語の時間に、私たちは「泣いた赤鬼」の感想文を書いた。それから数日後の国語の時間のこと。先生は、黒板に白いチョークで、「泣いた赤鬼を読んで」と書き始めた。教室がざわざわした。

「この前書いた感想文だ」

先生はチョークを動かしながら答えた。

「はい、そうです。みんなの中でよく書けた人の感想文です。皆さん、これを読んでどう思うか、考えてください」

だれ、だれが書いたの、と私たちは、教室を見回した。二、三行目で気がついた。あれは、私の感想文だ。身の置き所がなくなつた。顔が赤くなつて、黒板から視線をそらした。先生は、全文を書き終えた。

「これは、小田さんの作品です」

教室は、うわーっという声でいっばいになり、私は注目された。

「みんなは、これを読んでどう思ったか、文章を書いてください。『意見文』といひます。小田さんは、本を読んでいてください」

同級生たちが、鉛筆を動かしている間、私は本の内容がちつとも頭に入つてこなかつた。選ばれて得意になつていたが、みんながどう思うか、気になつた。

その数日後、先生は同級生たちの意見文の中から一つ、よく書けているものを発表した。それは、宇田川君が書いたものだった。宇田川君は、優等生で、私は密かに好意を寄せていた。宇田川君は、意見文を読み上げた。

——小田さんは、一人になつた赤鬼はかわいそうだ。私には家族がいる、と書いた。お父さんは、一生懸命に家族のために働いてくれるし、お母さんはご飯を作ってくれる。お兄さんは優しい。お姉さんは、遊んでくれると。でも、小田さんは、いつも休み時間になると、お兄さんにいじめられると文句を言っている。お兄さんの悪口ばかりで褒めるのを聞いたことはない——

宇田川君と話すことは、なかつた。私が友達と話している

ことを、聞いていたんだ。宇田川君のいう通りで、兄にはしよっちゅうからかわれたりいじめられたりしていた。家族のことを書くとき、兄だけ本当のことを書くと、「流れ」が悪いだらうと、兄の部分は創作したのだ。何も言葉を返せなかつた。

四十歳の時、亀有の居酒屋でクラス会があつた。宇田川君は転勤先の弘前から参加していた。金融機関に勤める真面目そうな宇田川君から、

「泣いた赤鬼、覚えてる？」

と問われ、「もちろん」と答えた。

「耀」への愛着

古谷 耀子

八月の蒸し暑い夜、うつらうつらしながらテレビを観ていた。上下していた脇が上の番になった瞬間、画面に映っていた耀の字が目に入った。ポーツとしているし、番組の途中とあってすぐには内容をつかめなかった。どこかの美術館で開催されている陶器の展示会らしい。字のことも気になったので頭をパンとひとつたたいて目を覚まし、そのまま観続けることにした。

老眼鏡をかけてしっかりと観ると、画面の下に出ている字幕には「曜変天目茶碗」と書かれている。

「耀」と読んだのは「曜」の見間違いだった。

耀子と書く自分の名を、長いあいだ好きになれないでいた。古めかしいし、書類に氏名を記入する欄では、画数の多い耀の字だけが不格好にふくらんでバランスがとれない。

子どものころ、「よの字はどう書くの？」と誰かに聞かれてもうまく言えない。母が、「コクヨウセキのヨウです」などと説明しているのを聞き覚えて、訳もわからないまま口まねをしていた。そんな名を好きになれる日が訪れた。

二十数年余り前のこと、次女が東京の中学に入学して学校の寮で暮らすことになった。

入学した年の九月に、娘から私宛に宅配便で荷物が届いた。娘から荷物が送られて来るのは初めてだったし、前もって何の連絡も無かったことが、中身への期待よりも不安が先に立った。ダンボール箱の粘着テープをビリッと性急にはがし、もどかしく中を覗くと、包装紙に包まれていない、リボンの掛かったちいさなクッキークッキーの缶がちょこんとひとつだけ入っていた。

カラフルなりボンは、不安をたちまち期待へと変えてくれた。

クッキークッキーの香りがしないのを不思議に思いながらリボンを外して缶の蓋を開けると、女の子らしい絵柄のついた封筒と、何かをくるんで丸く重なっているティッシュペーパーが、ぎゅうぎゅうに詰まっていた。それを取り出そうと持ち上げたとたん、小さな黒い塊がポロリと床にころがり落ちた。拾い上げてよく見ると小石だった。色は石炭によく似ていて、所々ガラスのようにキラリと光る片を持つ石は、全部で三つあった。

手紙の書き出しには赤鉛筆で、「お母さんの石です。お誕生日に贈ります」と大きく書かれ、続いて黒インクのボールペンで、

「一学期に行った遠足のとき、河原で石拾いをしていて見つ

けました。初めて見た石だったので、先生に教えてもらって
コクヨウセキとわかりました。今日まで寮の机の引き出しに
しまっておきました」と記されていた。

夏休みには寮から帰宅して、何日も私たちといっしょに過
ごしていたのに、宅配便のことはひと言も話題には出さず、
一人で秘密をかかえていたのかと思うと、さぞやお腹がふく
らんで苦しかったらうにと、可笑しかったり可哀そうだった
り目頭が忙しく働いた。

テレビの字幕の曜の字につられて、番組を最後まで観続け
た晩の明るる朝、さっそく「曜変天目茶碗」をネットで調べ
ると、

「この茶碗の歴史は古く、中国の南宋時代のもので日本では
国宝や重要文化財に指定されている名器。漆黒の器で内側は
は星のように広がる大小の斑紋が散らばり、玉虫色に光彩が
輝き移動する」と出ていた。

私はこれまで陶器には特別な興味を持たないでいたが、
ネットの画像を見て、ひと目で曜変天目茶碗に惹かれた。

しかし、ひとつだけ気になることがある。「曜」の字をな
ぜ「耀」と書かなかったのだろうか。

耀は輝きに繋がるが、私の中の曜は、カレンダーに結びつ
く。それについて何か触れたものが見つからないかと検索を
続けると、ついにぶつかった。

そこにはたった数行だけだったが、「曜の字は耀と書かれ
ることもある。どちらも同じ意味を持つ字で、耀の字は常用
漢字に入っていないため曜と表記することの方が多し」と説明
されていた。

（やっぱり耀にしたい人もいたんだ）なにかホツとした。

娘から届いた手紙を読んだあと、耀子と名付けられた由来
を知りたいとの思いに駆られた。

私の名は、父方の祖父の命名と両親から聞かされていたが、
両親の存命中に「耀」の字に込められた祖父の想いを訊いて
はいなかった。

祖父は文筆を生業としていた。私は、これまで祖父の著書
は難解と端から敬遠して手に取ることは無かった。祖父の想
いを探し始めた今こそ読まなければとページを繰り始めた
が、やはり手こずった。一行一行をゆっくりと読み進んで行
くうちに、しだいに面白くなり祖父の息吹を感じられるよう
になった。数冊を読み終えると、どの作品にも耀の字が出て
くることに気が付いた。

そうか、祖父は初めて女兒の孫が誕生したときには、名に
「耀」の字を付けようと小説を書きながら想っていたのかも
知れない。

苦手だった「耀」の字、二十数年前に娘から送られてきた
宅配便をきっかけに、今では愛着へと変わっている。

姑

関根喜久枝

姑は四十八歳の時舅を亡くした。長男の私の夫はすでに会社勤めをしていたが、次男、三男はまだ学生だった。自宅の隣にアパートの貸間が五部屋あったが、生活のために保険の外交員になった。もともと世話好きで社交的だったのでこの仕事は性に合っていた。七十歳まで勤めた。保険のお客さんが年金の手続きをするのに一緒に区役所に行ったり、住んでいたアパートを転居しなければならぬ人には新しい部屋を探してあげたりしていた。頼まれてお嫁さんの紹介までしていた。二人の息子も結婚、独立するとそれからはずっと一人暮らしでその生活を満喫していた。仕事の他に日本舞踊、カラオケ教室、書道、ダンス教室に通っていた。ある日姑が「今度料理教室にも行っているのよ」と話したので、「お母さん、料理作るのあまり好きじゃないでしょ。何で行き始めたんですか」「グループの人達が作ってくれるから、皆と話をしながら私は食べるだけでいいのよ。楽しいわよ」と言うのには思わず笑ってしまった。十年程習っていた日本舞踊は発表会にお金がかかりすぎるのでやめ、社交ダンス教室は男性のコーチに「ターンしてださいじょうぶですか。転ばないように気をつけてください」とその都度言われるので頑張って通っていたが、友人と二人でやめた。その時八十歳になっていた。カラオケ教室と書道は長く続けていた。

次男夫婦が沖縄でラーメン屋を営んでいたのので、寒くなるのと良く行っていた。高齢なのに一人で行くので心配したが、羽田まで電車で行き、飛行機に乗ってしまえば那覇の到着ターミナルに迎えがきているのでスムーズに到着する事が出来た。「冬は沖縄は暖かいから過ごしやすいのよ」と楽しみにしていた。

テレビを見ながらくつろいでいた日曜日、男の人から電話があった。「おばあちゃん、久しぶり元気にしてる」「ああ英雄かい、変わりないよ」「それは良かった、又電話するね」それから十日程して電話がかかってきた。「おばあちゃん英雄だよ、実は仕事でトラブルがあつてどうしてもお金が必要なんだ。必らず返すから貸してくれないかなあ。急ぐんだ。僕の口座に振り込んで」「あ、そうかい。英雄なんだね、判った。じゃあすぐ銀行に行くから」姑は少しの疑いもなく言われるままにお金を振込んでしまった。その後何の連絡もないのでおかしいと思つて家に問い合せて、騙された事に気がついた。「最初に電話があつた時、思わず名前を言ってしまった」とすっかり落ち込んでいた。八十五歳の時だった。

新聞に振り込み詐欺の被害にあつた高齢者が自責の念にかけられ心に深い傷を負うという記事が掲載されていた。「外国の宝くじがあなたに当たりました。10%の手数料を払えばお

渡し出来ます」と電話があり高額な金額を振込んでしまった。その八十代の女性には、そのお金があれば経営が苦しい家族の会社が救えると思つたという。いずれも家族の役に立ちたいという思いからお金を振込んでいる。

姑も沖繩で不動産をしている孫のためになると思つて騙されてしまった。その後思い出している溜息をついていた姑は一回り小さくなつてしまつたように見えた。それから三年程して八十八歳で亡くなつた。充実した一人暮らしを楽しんでいた姑の笑顔が忘れられない。

秋を知る

国井 和子

九月中旬になって、仏壇の菊が日持ちするようになった。八月末のころは、朝生けた花が夕方には、葉の周囲が枯れた状態に縮んでいた。水に細菌が出ないよう、こまかに水を取り代えたりしたのだが。

自然のものは、ほんの少しの気温の変化を敏感に受け止めているのだ。

数日前、庭の隅にコスモスが一齐に開いているのに気付いた。濃ピンクや白、赤紫色など、淡い華やかさを漂わせてかすかに揺れる。

今年の夏はあまりに暑く熱中症が恐いので、庭の草取りがほとんどできなかった。そのため緑や茶の雑草がひざ丈ぐらゐに勢いづいている。そんな中であって、コスモスの彩りは新鮮な気持を持たせてくれる。

いつだったか、コスモスの見事な年があった。例年より花が大きく色も濃い。

たまたまそのころ、保険の用事ができて、車の会社の社員が来たことがあった。

玄関脇の縁台に座ると、ちょうどコスモスが正面に見える。「私の家のコスモスも盛大ですよ。実は、芝犬が二匹います、それらがじゃれあって、時々休んではコスモスを見上げているんです。その様子が花の隙間から見えてほんとに愛らしい。

この情景を俳句にしたいんですが、なかなかピタツとうまい表現がありません」

彼は俳句クラブに属して五、六年になる。

その日以来彼は転勤になって、私のところへは来なくなっていました。でもその時の会話を思い出す。

雑草に囲まれたコスモスがあまりに可哀相なので、決心してコスモス周りの草取りをした。雑草も暑さに耐えていたとみえ、がっしりと根を広げている。その根の強靱さは驚くばかりである。

雑草が少なくなつて、コスモスの位置に立つと、道路を隔てて田圃が見える。今や一面の黄金色である。最初稲の穂先が黄色くなり始めたかなと思うと、すぐに穂をずしりと下げてくる。

まさに実りの秋独特の色彩である。今年は暑さに加えて、雨が全く無かった。穂が実入りするころは、隣近所が顔を合わせると、何とか雨が欲しいね、と言ひあう。

昔は日中の暑さが酷い時は、必らず夕立が来て、人も草木もほっとする時間があった。その夕立も一回もなく、土は乾燥して白い埃をあげている。

とに角雨があってほしい、と祈るような気持だった。

『方丈記』の中に「養和の飢饉」の様子が書かれている。「養和」という元号はたった十か月間だけ使われたものらしいが、「令和」と似ていて少し引つ掛かる。

「養和」の天候不順による大飢饉では、春から夏にかけて雨の恵みはまったく無く、秋から冬にかけて大雨、大洪水。田畑の作物はすべて無くなったという。

これほどの大飢饉でなくとも、米が半分しか取れない、ということでもなると大変である。

かつて、東北地方の冷害で、日本国中が米不足になったことがあった。その時は農家の米の盗難が多く、私の親類の家でも被害があった。

もし今年早ばつで、米不足になっては大変だと思っていたが、何とか切り抜けて雨も降るようになり、稲穂が刈り取りを待っているようになるまでたどり着いた。

良く見ると、稲刈を始めている田圃もある。何台かの稲刈機がエンジンの音を響かせていた。

九月も下旬になると、ほとんどの田が取り入れを終えて、華かな黄金色が土の色に変わる。

そんな或る日、軽トラックが一台、慣れたハンドル捌きで庭先に入って来て停まった。

白い麦わら帽子の若者が、日焼けした笑顔を見せている。「しばらくです。今年の米、持ってきました」

さわやかな声が響く。米作りを頼んでいる家の長男である。「親父も足が悪くなって、とうとう私が田圃の方を引き受けてます」

彼の父親は働き者である。毎年秋になると、三十キロ入りの玄米袋を軽々と運んできた。昔は米一俵六十キロですから

ね。それに較べれば軽いもんです、などと言いながら、一年分の米を私の家の倉庫に入れていく。

外の縁台にお茶を運んで、若者と世間話をした。

「真夏と真冬は亡くなる人が多いと聞きますけど、今年は何かお葬式が多いですね」

「年寄り暑さに耐えられないのかしら」

親しくしていた私の知人も、今年の夏、ついに亡くなってしまった。

「災害も多いですしね。生きてくのは大変ですよ」

若者は悟ったような表情で茶を飲んでいたが、縁台のそばに大きく場所を取っている白ハギに目をやった。

「この白ハギは随分良く咲いてますね。毎年咲くんですか」

白ハギの枝垂れ枝が、白い小花をびっしりとつけて、折からの風にひとつつ、ふたつと花を散らしていた。そういえば

年年歳歳花相似

歳歳年年人不同

という詩があった。この作者は誰だったろう。

「家の裏に紫色っぽい萩があります。今年咲いたかな」

しばらく秋の花などの話をして、若者は帰っていった。もう少し過ぎると、確実に冬が来る。目に見えないところで、自然はもう冬の準備をすすめているに違いない。

初夏

押久保千鶴子

春まだ浅い日の朝、テレビでは気象予報士が、

「今日の最高気温は、高くなるでしょう」

と、話していた。出勤前の息子はすかさず、

「ビートテックの下着を着なくてもいいか」

と言つては、背広のままコートも持たずに出て行つた。

私は、ストープに背を丸め、

「暖かくなるといつても、まだ三月の初めだよ。暖かくなつ

てみないとわからないのに……」

と、ひとりごとを言っている、傍らの夫もそうだと言う

ように頷いていた。

実家の母が健在だった頃のことである。

仏壇の掃除にと春の花を持って出かけたところ、縁側の戸も開かず、カーテンも閉まったままであった。五月の太陽が降り注いでいるというのに……。と、少々不安を覚えながら茶の間に入ると、母は炬燵でうたた寝をしていた。私はすぐ

に、「おばあちゃん、どこか具合でも悪いの」

と、声をかけると、

「どこも悪くないよ。少し眠かっただけよ」

その返事に安心はしたものの、その姿に再び驚いた。セー

ターの上にカーディガンを重ね着して炬燵に足を入れていた。中はほんのりと暖かいので、その理由を問うと、今朝起きたとき少し肌寒く感じたのでスイッチを入れたというのである。あまり気にしている様子もみられないので、私の方が拍子抜けした。が、

「おばあちゃん、外はもう春で暖かいのよ」

と、春を強調したのに、

「おや、そうかい。私は、あんまり暖かい感じがしないんだ

けれどね」

と、眠い目を擦りながら言うのである。

庭の野バラの甘い香りにも気がつかないようなので、廊下の戸を開けた。

「ほら、いい匂いでしょ」

「ほんと、いい匂いだね」

むせかえるような香りに、一時笑みを浮かべた母の服装は、

初夏には、そぐわなかつた。半袖姿の私に驚いたのか、

「おまえ、そんな格好で寒くないのかい」

「ちようどいいよ。風が気持ちいいもの」

「おばあちゃんこそ暑くはないの？」

「うん、私もちようどいいよ」

朝も夜も寒さを感じないで過ごせるというのに、九十歳を

目の前にした体は、吹く風の心地良さに気づかずにいるのかもしれない。

「何枚も重ね着をしていると、汗をかいて気持ち悪いから着替えようね」

と、それとなく促し薄手のブラウスに着替えさせた。ござっぱりとしたので、

「明日ヘルパーさんが来たら、はなさんすっかり春らしくなりましたね。と、驚くよ」

と、つけ足してみたものの、返事はなかった。バラの花の色がきれいだと盛んにほめていたが、突然

「やっぱり少し寒いな」

やおら立ち上がると再び炬燵に足を入れた。脱いだセーターの洗濯に取りかかろうとすると、まだ洗わなくていいからと言い、

「おまえも私の歳になったらわかるよ」と、呟いた。

私が子どもの頃の母は、小太りでとても汗かきであった。和服の仕立てを家でやっていたが、暑いさなかに裁ち台の前に正座する姿は、見ているだけでも暑そうであった。

時折、うちわであおいで一休みしていたが、たまらなく暑かったに違いない。額から吹き出す汗が目に入らぬように、時をおかずタオルで拭き、背中がびしょりになると下着をまめに替える。正座の座布団も膝裏にかく汗で濡れる。それを縁側に干しながら、私と弟に、

「あら……この座布団におもらししたのは誰かな？」と、澄ました顔で言う始末。膝裏には汗疹の赤い発疹が無

数にできていた。「あせしらず」の白い粉をはたくと、再び座り直していたのである。

他人様の大切な預かり物であるからと、私達子どもを傍へ寄せつけなかった。特に夏物は薄手で白地のものが多いので、一滴の汗が落ちてても、汗染みとなつては申しわけないと、その場を離れるときは大判の風呂敷で被うことを忘れなかった。

真夏になると、さすがに昼間の針仕事をさけていた。家族が寝静まつてから、開け放した縁側から入る風と軒先の風鈴の音を相棒に夜更けまで手を動かしていた。

夜中に目をさますと、ひんやりと静まりかえった夜の帳の中に、かすかに漏れる居間の明かりと庭先から聞こえる虫の音に、子どもながら異次元の世界に入りこんだような錯覚を覚えたものである。

自然のままに、逆らうことなく四季を過ごしてきた母の世代を振り返ると、数数の知恵を働かせてきたように思う。しかし、季節は巡っても体が適応するまでの時間は、待つてはくれなかった。

近頃、私も昼間と朝晩の温度差に翻弄されがちである。昨日も夕方の風に肌寒さを感じて、あわてて羽織物を探しては袖を通す自分に気がつき、思わず苦笑いするのであった。

序 奏

宮部 紀子

知り合いのお店から着物の展示会の案内が届いた。京都西陣の老舗のものと聞き、そっと顔を出してみた。

お店の人は親しいので、

「お茶も卒業、人生も卒業よ」と、拗ねたようなことを言いながら部屋に入って、足が止まった。見たこともない着物に圧倒された。

〈京都月次〉と題した京都の四季、日常を模様にした着物が衣桁に掛けられている。

染物ではない織物である。色糸数の多さは、着物の裏の垂れ下がる糸の量を見ればわかる。仕立てるときはその糸を切って、着物と一緒に渡すそうだ。相当の量になるだろう。

老舗のY氏が横で静かに説明をしてくださる。そして、続ける。織り手の女性が高齢で、最近、股関節を悪くした。立ってする仕事なので続けられるかどうか。後継者はなく、この技もやがては消えゆくと。

こうして日本の伝統工芸は消えてゆくのかと哀しかった。次いで数点の反物をさらりと広げられた。

「御召です。友禅がなかったときは、御召が主流でした」

私知知っている御召とは全然違う。御召は着物としてあまり良いものとは認識していなかった。ところが、しなやかな手触りと光沢、織りの面白さ、御召に対する認識がひっくり

返った。

西陣御召と言ひ、先染めの撚糸で織り、細かな（しぼ）を寄せた織物、と説明を受けた。先の〈京都月次〉も「総縫取御召」という西陣御召の一つである。

糸づくりから細かく分業された西陣の熟練の職人が、手間ひまを惜しまない昔ながらの工程を守りとおして作られるという。これを束ねる三百年の歴史を持つ老舗で働く人の言葉には力があつた。

「私たちは職人さんたちの暮らしを支えなければなりません」

その静かな一言は心に響いた。工芸品という「もの」が消えてゆくことに関心を向けていたが、それを作る「人」にまで思いが至っていなかった。この一言で、お話から着物に気持ちが向いた。

街着程度の手頃な紋御召を勧められ、一大決心のうえ、作ることにした。出会いである。何十年振りだろうか。

この一年は病気をし、八十路の近いことに気持ち塞ぐばかり。「人生を卒業」と口にするそんな日々を何とかしたかった。この一枚が、穴倉にいるような生活に一筋の光を差し込んでくれた。穴倉をふさいでいた扉が開かれたような気がした。

お正月に友人を招く日のほか、簡単なお茶席など、年に二、三度は着物を着ている。母の着物を手直ししたものや、手持ちの少し派手かしら？ と、気にしながらのものだったから、今の自分に合わせた着物は本当に嬉しい。

仕立てあがって来た着物は、Y氏の見立てだけに素敵だった。お正月には間に合わなかったが、春には着て出かける目論見をしていた。しかし、二度ともはずれて、まだ身につけてはいない。次は秋の同級会にと、窺っている。

何度着られるかは考えない。いつでも着て行けることの安心感を大切に、時折広げて、好きな帯と合わせて眺めるのも楽しい。

塩野七生はエッセイで、宝飾品について次のように語っている。

——眺めて幸福になり、身につけて幸せになる。それをいつ、どこで、どの服とあわせて使うかと考えるだけで購入費の半分くらいは元を取ったと思う。——と。

一級品の宝飾品と比べるのはおこがましいが、この着物一枚は、私にとっては同等の分相応の楽しみである。

「八十路へのじよそうだわ」と、思わず口からこぼれた。

「助走」ではない。八十路は駆け抜けるものではないから、味わって生きる日々のための準備として「序奏」にしたい。あるいは駆け抜けてしまふかもしれないけれど……。

序奏という思い付きはよかった。「やそじ」という優しい響きに合った生活の仕方を模索しよう。肩肘張った生き方ではない。ゆったりした日々でありたい。

「未知との出会いよ！」と、先輩は言う。

二年ほどになるが、読書会という法華経を読む会に参加している。これも思いがけない出会いから始まった。

友人の知人で、日蓮宗の僧侶にお会いした。

私は仏像が好きで奈良詣でをしているが、お経については何も知らない。後日、「お経のことを知りたい」と話したら、読書会を始めてくださった。

月二回、一回二時間余り、読経の後、説明を伺う。それが終わると、お茶をいただきながら、本の話、時世の話と話題が広がる。法華経は平安貴族の教養の書であり、宮沢賢治の思想の土台にもあると教わった。実に豊かで愉しい時間なのである。

先日、法華経全巻二十八品（ほん）を読み終わった。読み進むうちに映像が浮かぶのはおもしろかった。しかし、自分の言葉にして何も語ることはできない。今は、日常の中に、ここでの時間が水脈のように流れ続けている。

八十路の主題は「いのち」だろうか。序奏について、どのように変奏し旋律は紡がれ、終章に向かうのか。変奏を静かに受け入れ、味わうことができる日々であってほしい。

令和二年お正月、友人をお招きする日、八十路の始まりである。この御召を着てお迎えしよう。

言葉あそび

高橋 暁美

朝の楽しみは、テレビの「朝ドラ」を観ることである。今放映中の「なつぞら」は主題歌もいい。爽やかで、北海道の開拓地に育ち、都会に出てアニメーターを志す優しい女の子を応援する歌だ。

曲調は明るく、歌詞には癒されるのだが、歌詞の中で、一つ誤解していた言葉があった。

〈氷を散らす風すら味方にもできるんだな〉

という「氷」を「恋」と聞きまちがって口ずさんでいたのだ。樹氷やダイヤモンドダストを散らす風のことだったかと恥ずかしかった。

あわて者なので聞きまちがい、言いまちがいが多いのだが、おかげで間違いに気づいて正すときは苦笑いするが気持ちいい。

その度に懐かしく思い出す人がいる。一緒に随筆の勉強をしていた晶子さんである。

晶子さんと初めて会ったのは、六年前、森先生の随筆教室「野の花」だった。私が入会した当時、彼女は療養中で二年ほどたつて復帰してきた。

お仲間聞いていたとおり、知的な文章を書く、上品で聡明な美人だった。

彼女の才知にたけた文章と、歯切れのいい物言いは好まし

かったが、どこことなく愁いを含んでいるようで少々近寄り難かった。

ある若い女性タレントが「かわいい」という雑談になったとき彼女はきっぱりと言った。

「私、あの人嫌い。皆、演技が上手くなりたくて一生懸命なのに、あの人は下積みも経験しないであんなに売れちゃって。努力しない人間はだめよ」

常に「私の辞書に『努力』という文字は無いの」と甘えて生きている私は身がすくむ思いだった。

彼女に親近感もてたのは勉強会の後のおしゃべりの時間である。テレビの話になった時、晶子さんが「ケータイ大喜利」「IPPONグランプリ」「替え歌」などの番組をよく見ていることを知ったからだ。替え歌でおもしろかったのが山下達郎の「クリスマススイブ」の

〈雨は夜更け過ぎに雪へと変わるだろ〉を

〈兄は夜更け過ぎに雪江に変わるだろ〉に替え、きれいに女装したお兄さんが、弟の歌声と共に映った回は二人とも思い出し笑いをした。

中でも糸井重里らがプロデュースした『言いまつがい』は彼女も私も毎週楽しみにしていたので、話が合った。

彼女はその後、元の職場の素敵な先輩が「さっくばらん」

を「ぎつくらばん」と言いまわがっていたことを機知に富む筆致で随筆に書いている。言葉あそびを楽しむ共通点が嬉しかった。

カラオケが好きなこともわかった。

ある日、湯呑を片付けながら松林さんと小声で話しているところへ、晶子さんが加わった。

「ねえ、さつきから何話してんの」

「二人ともカラオケ大好きなんだけど、野の花の皆さんには笑われちゃうかなって」

「あら私も好きよ。最近ブームが去って一緒に行く人がいなくて淋しいの」

三人は意気投合して約束ができあがった。

当日、できるいい、娘にしたいような二人とのカラオケだからJ-POPを歌うことに決めていそいと来店した。晶子さんはシャンソンかジャズかなと思っていたら、演歌、AKB48などを選曲して言った。

「一昨日、近所のカラオケ店に行つて練習してきたの」

何事にも努力する意気と私への優しい気遣いに胸が熱くなった。きれいな声でハモってくれた『真夜中のギター』は今も耳に残っている。

怠け者でいい加減な私に、彼女は興味を持ってくれたのか、二人で会うことが増えた。

お互いのことをよく知らなかったから、話がつきなかった。ストイックなところをもちながらユーモアを解し、一人息子さんをこよなく愛している彼女にどんどん魅了されていった。美しい日本語を話しながら、最近の若者言葉をとり入れたり、時にはダジャレを言つて笑わせたりしてくれた。

野の花の日光遊山の時、前日の雪が残る中、彼女は足を骨折してギブスをして参加した。「小杉放菴美術館」では松林さんに車イスを押しもらつて嬉しそうに笑っていた。何にでも意欲的にとりくむ彼女が大きな病気をかかえていた。

「骨にまで転移して、余命も告げられているの」

と、さらりと言いながら、翻訳の仕事をこなし、随筆を書いて推敲も怠らず、口内炎に苦しみながらもランチを楽しみ、以前住んだことのあるフランスにも旅行してきた。フランスで今市にあるレストランと同名の「バンマリー」という店を見つけたと写真を撮つてきて、店主を感激させてくれた。

治りたい一心で、種々の民間療法を試み、県北の鍼治療に通つたり、泊りがけで大阪まで行つたりしていた。私たちはただ祈ることしかできなかった。

緩和ケア病棟に入ったと聞き、松林さんと駆け付けた。彼女は点滴の器具をガラガラ引いて談話室に現れた。

「みんなが、ここに入ったら腫れ物にさわるみたいにするのよ。やんなっちゃうわ。誰だつていつかは死ぬのにね。私すぐ一般病棟に戻るからまた来てね」

最後に熱のある彼女の手を握つて話したのは亡くなる二日前だった。

最近あまりやらなくなって寂しいが夜半、テレビで「イッポン」「着信御礼」などの声を聞くと、切に彼女に会いたい。「晶子さん、またいつの日か空の上で言葉あそびしましょうね」

光と影

五反田キヨ

無理がきかない。体に、心に、そう感じられる。

八十歳の真ん中にいる私、これまでは、高齢者の合言葉「加齢現象」にはかかわりなく、安穩に蚊帳の外にいられた。そして「まだまだ、その気になれば何でもやれる」と、気負っていた。が、何でもやれるチャンスは日の目を見ずに歳月が流れた。

気負いは自分への過信がもたらすもの。愉しい空想だろうか。見果てぬ夢の哀しい妄想だろうか。

妙な夢を見た。啓蟄と誤ったらしい。私の体内の器官に潜んでいたそれぞれの機能の姿でソロソロりと這い出してきた。目を覚ますと現実の私があった。

目はシヨボシヨボ、小さい文字が見えない。目を凝して見ると、まぶたの間に目やにと涙が広がりがかすんでしまう。体はどうか。腰の痛みと手足のしびれで難儀中である。特に立ち上がりや起き上がる際に下肢の感覚が失なわれて動けなくなってしまう。痺れではない。全く何の反応もない。かろうじて左足で体を支えてじつとしていて。やや間をおくと両足が使える。脊柱管狭窄による影響という。よろけたり、つまずいたり、常にのろのろ。

何事にも愚鈍になったのは身体だけではない。心が動かなくなってしまうのだ。興味も欠け、何かにつけ気のりしない。感じる配線が切れたらしい。どこか遠くに心があるように、生き生きとした関心が無い。

いつも時間をかけて買物するのだが、食品やその他、手近なもので済ましてしまう。

あの出好き、もの好きで行動を楽しんでいた私は、今どこに消えたのか、不思議に思う。

国内は勿論、国を離れてもバック旅行より気ままな一人旅が好きだった。多数な人達と共にする旅はフリータイムを楽しむにしていた。

訪れた古寺や古都の向こうに、多彩な光や影に触れられたら舞い上がるほどうれしくてたまらない。

ほんの小さな自分だけの感動、小さな幸せを得た旅は、私の心から消えることはない。

忘れられない旅といえは、中国は遼寧省、瀋陽の東北にある東陵を訪れた時のこと。山ふところにひっそりと建てられた清の太祖の陵墓だけと人影も無かった。晩春の光がうらうらと注ぎ、どこかで鳴いている声が流れてくる、蟬だろうか。夫と二人、城壁を歩いた。少女の姿が見えた。が、シルクロードの砂に埋もれた少女の姿だ。長い長い時の流れを一身に集

めた少女と今、目の前のヌルハチが重さなり、太古の光の中にたたずんでいる。私も夫もいつかこの光の中に――。

西安のような立派な城壁でないが歴史の光と影は東陵も同じ。広漠たる大地に生を受け、そして土に還る命を、あの時ほど愛しく思ったことはない。

今年の夏は酷暑で終った。じくじくした日々から、一時、解放されたのは那須高原の藤城美術館である。

館内に入って、私はすぐに作品に心を奪われた。影絵のもつ神秘的な象徴美が作者の定点になっているという。たわわに広がっている大木の枝に、無数の葉が繁茂している。一枚一枚、思い思いに向き、重なり、群がって微風にゆれている。何十万枚の葉っぱが風をよろこび光と戯れている。一枚も同じでない切り絵、葉の間から葉洩れ陽が風に吹かれるたびに三角になったり四角になってよろこびあっていると作者の解説を読むと、すべての生きとし生けるものへの愛情と尊重の人生観が伝わってくる。

さらに、東日本大震災のあと、被災地に直接飛び込んで描いた作品には象徴美より祈りの情念の激しさを感じた。

「復興の兆し、七ヶ浜町被災地のがれき」・「閑上被災地の復興の光」・「海から打ち上げられた赤色の船体」声なき遺産として人々の胸に焼きつくであろう。

「この地球には動物がたくさんいて、草も花も木もいっしょに生きている。みんなつながっている。光と影は人生そのものだ」と言う藤城さんあって、被災地の人々の胸に響き、はげますにちがいない。美しく愛らしい動物たちに感動して、宇宙の仲間に入ろうと思っている。

「宇宙は広いな、大きいな」替え歌を口にしながら、娘や夫と車に乗った。――いつのまにか私の心は動いている。

洞窟

国母 仁

忘れた頃にケイタイにかかってきた。K 歯科医院からだ。「お待たせしました。ご都合はいつがよろしいでしょうか」半年ぶり、イヤ一年振りになるかも、とにかく長かった。インプラントを入れるため抜いた歯の後は大きな穴が空いていた。

右上奥から二番目。

舌でなぞるとまるで洞窟の入り口のようにぼっかりと開いていた。洞窟は何かと不便だ。先ず食べ物が挟まる。それに歯ブラシが上手く洞窟の中までとどかない。どんなに口を大きく開けても歯ブラシで隅々まで磨くことが出来ない。

それより一番困るのは物を食べている時、洞窟の入り口の尖った崖で舌を切ったりすることだ。

舌を切ってしまうことを先生に打ち明けようとしたが、口が乾き、言葉がのどに引っかかりでてこなかった。

多分、打ち明けたとしても、

「慌てて食べないでゆっくり噛んで食べてください」

と、軽くかわされるに違いないと先読みをしてみた。

確かに、店が忙しく慌てて食べたりすると尖った崖で舌を切ったりすることが何度かあった。口の中に鋭利な刃を抱えているようなものだから、注意しなければならぬのは確かだ。

以前、先生にどうしてすぐにインプラントを入れてくれないのか訊ねたことがある。

落ち着くのを待っているのだと何ともソフトクリームのよいうなソフトな答えが返ってきた。

「はい、口を大きく開けてください。ネジをはずしますから」

ネジは半年前、骨に埋め込んでおいたものだ。ネジを埋め込むときもかなり難工事だった。上顎にドリルで穴をあけネジを埋め込むのだ。麻酔が効いているうちはいいが、切れると激しい痛みに襲われ、数日、熟睡することが出来なかった。診察台に仰向けになり口を大きく開けていたがまだ開けられないのか、「もっと大きく開けてください」

先生はかなり無茶ぶりを要求してきた。

大きく開けた口の中に、ブルーの手袋の両手が捻じ込んできた。

ガリガリネジが外れて行く音が脳天に響いた。口の中はまるで工事現場と化した。

「うーん、なかなか外れないな」

先生の独り言が私の不安を煽った。

「うーん、さすが溜まっているから外れないのかな」

私は、思いきり大きく開けた口を晒し続けた。

「先生早くはずしてくださいよ。もう、限界です。顎が外れ

てしまいますよ」

口の中は完全に悲鳴をあげていた。

いったん先生は手を止めた。

「うがいをしてください」

やっと、屈辱から解放された。まるで口の中を乗っ取られたゲリラから解放された気分になった。

すぐに工事が始まった。

先生のブルーの両手の指が奥のネジをまた外しにかかる。

私は早く終わることを懇願するしかなかった。口の中を医者だからといってかき回すことなど許されるべきではないのでは、などと少し苛立ってきたところに、

「あっ、やっと外れました」

先生はため息交じりの声をゆっくり吐いた。

今度は、歯科衛生士の飾りのない声が、

「セメントで固めますから、口を開けてください」と、耳元に届いた。

奥の歯にヌルヌルしたものが塗られ、ざらついた音が脳天に達してきた。

「このまま、五分開けておいてください。閉じないでください」

暫らくして、うがいをしたらセメントの砂利が出てきた。

一時間後、インプラントがはめ込まれた。やっと、洞窟が埋ったのだ。難工事だった。

難工事と言えば忘れられない思い出がある。

二十五歳頃、奥歯の虫歯が痛みだし顔が腫れてしまった。

友人に紹介された歯科医院で奥歯二本を抜歯された。

先生はよく説明することなく、一度に、二本も抜歯したの

だ。抜かれてから急に気分が悪くなり、家にやっとたどり着いたと思ったら熱が出、体がぞくぞくしてきて震いが止まらなくなった。数日、寝込んでしまった。

後から判ったことだが紹介された歯科医院の先生は軍医上がりで治療はせず、殆んど抜歯してしまおうとか。

おなじ痛い思いをするならインプラントを入れてもらった方が良かったと思うが、あの頃にはまだインプラントはなかったかも。

インプラントは、まだ保険適用外の診療になるので値段が高額なところがネックだ。窓は固く閉ざされたままだ。一刻も早く窓がこじ開けられることを願うしかない。

医院の窓の外には大きなひまわりが青空に伸びていた。

今日

鈴木 芳子

田畑から山頂へ
一面に緑があふれている

我が家の庭の
梢の葉も
風がほほえんで
止まるたびに
かすかに揺れる

地球は温暖化で
滅びるらしいけど……

今日も若い母親は
幼児の手を引いて
スーパー マーケットへ向かう

わたしは 日々
生きる――
と いうことを
している

おいで

「おいで」

と言われたら
嬰兒のように
菑こんで行く

わたしは
無様な痩せ人參だが
恩寵のような
段々畠が続き

彼方の空は
澄んでいる

折り鶴

神山 暁美

千代紙を三角に折り
もういちど半分に
ひらいて はねを
たたんで しっぽ

おきな
幼児が鶴を折っている

小さな手をたえ間なく動かして

茶の間のテレビが映し出す

国連本部の折り鶴には目もくれず

「核兵器禁止条約」制定の国際会議
テーブルの空席に白い鶴が一羽

思いつきひろげた翼の

触れば痛いほどのその先に

ヒロシマの怒り ナガサキの祈り

問いかけるように長い首をかしげ

重ねて 折り曲げ うら返す

となりに節くれだつた指も加わる

縁側からの空には

青を切つて飛行機雲がひとすじ

※核兵器禁止条約制定交渉会議
唯一の被爆国、日本は不参加

文箱

松本ミチ子

心の病で
日頃伏せがちな弟が蒲団から顔をだし
姉さんが来ているよ　と言う

雨戸を開けると

傘もささずに

姉が

びしょ濡れになって立っている

さあ

こつちに来て家におはいい

姉が花嫁の日

辛かったら戻っておいでと母

思えば農家に嫁いだ姉は

慣れない仕事で苦勞の連続だった

でも一度も戻って来ることは無かった

それから一年

嫁ぎ先から突然戻って来た

小さな壺に納まり

骨になって戻って来た

返された文箱を開けると
輪ゴムで束ねた宛名の無い封筒が五通

徹ちゃん行けなくて御免ね

治るよ きつと治るからね

姉より

姉の一年間の素顔は

どんなものであったのか

黙って眠っている宛名の無い

弟宛ての手紙

同じ文面の謎は

今も解けないままだが

どの封筒にも涙の跡が滲んでいる

縁側

高田 太郎

ぼくは陽だまりの縁側で
ひとを想った

ときには驟雨吹きこむ縁側で

ひとの手紙を

破ったりもした

春日遅々

暮れなずむ空の名残り

極めつきは

想いびとの薔薇の

もつとも香り高き一瞬に

気づかなかった

ぼくの人生の失態

と、書いては

ぼくの詩の失態にもなるのだが

かつての

ひたぶるな学習の日々

気まぐれな青春番外地の

浮遊物と見なせば

事は済まされるであろう

吹きざらしの
縁側だけが知る
素足の恋の感覚
それは
今もなお
老いのかすみ目に
愛しく蘇る
ぼくの自伝

(平成三十一年三月 作)

冬のス・パイラル

綾部 健二

夢だけは澄みきったところへ

質素な寝室の壁に

一枚のイコン

おそらくは風を切ることもないだろう

ベッドサイドのテーブルには

刃のこぼれた古いナイフ

ここにぼくの十二月がある

青白い思想を断って

異国に旅立つ若者のように

北北東の風に乗ろう

あのうつろな自由についての

メッセージは

五百万語

創造は謎に包まれている

旗よ

むなしい約束に
ひるがえることは無意味だ

時間の涯にむかって
待つことしか残されていないなら
再び動き出すほかはない

空の青さにも裏と表が存在している

ぼくは匂いを放たない

ぼくは結実しない

ぼくは変身する

頭のすぐ上に不死鳥の？

しわがれた声

冬のスパイラル……

(注)「アイコン」…聖画像、板絵のこと

一本の木

村上 周司

何を語るか

一本の木

強い心の

幻想を抱いている

根は

炎のように

土の感情を受け入れている

一本の木は

ある日

風をうけて

迷路の扉を

あけようとしている

一本の木は

宇宙からの電波と

地中からのエネルギーを

木の迷路の中に

吸いこんでいる

一本の木は
時のながれの中で
空気と光と風の
粒々を吸いこんで
幻想模様をつくっている

未知の音が
どこからか
かすかに聞こえているのか
一本の木は
それを感じとっているかのような気がする

高原の夜

螺良 君枝

重いリユックが黄昏を招く

山脈の沈んだ貌が

次第に俯いて来て

湖の若い葦は 風を予感する

丸太の重なりのような 山小屋で

釣ランプに灯をともすと

食卓に息づく緑の木木の匂い

心は充実する

快い疲れに支えられながら

心は和む

途切れ勝ちのうたに酔い痴れて

プリズムの頂点で

光の洪笑を撫でた 手の戦き

雲霧に咽んだ 額の冷たさ

厳冷な氷雪や嵐の

試練を聞いた 耳の火照り

夜気は瞬く間に冷えていき

星は風に掃かれる

かいま見た目映いものを
振り捨てると

闇はいっさんに押し寄せて来て
すべてのものは
砕かれてにじんで行く

あなた

小川 信一

あなたは日々

記憶を消し去ってゆく

長い間続けていた

造花作りの技術も

あれほど上手だった

箸の使い方も

あなたの息子や娘のことも

そして自分の名前さえも

消し去ってしまった

それらはもう

あなたにとって

必要のない記憶なのだろう

朝

あなたは笑顔で起きてくると

散歩に行きたくて

玄関に向かう

早春

河津桜が咲き

たんぽぽが次々と咲き競う道だ

今はアカツメグサと

宵待草の季節

あなたは消し去った記憶の

空白を埋めるかのように

花たちを摘んで歩く

勝ち負け

戸井みちお

勝ち負けのない世界はないのか

どこを向いても勝負を競う世界ばかり

勝った勝ったの歓声を上げ

勝者をたたえてビールかけ

ビールをあびてはね上り

天下をものしたはしゃぎよう

勝者ありて敗者あり

否 敗者ありて勝者あり

敗ける者がいてくれたから

あなたは勝者になれました

よろこびは敗者のおかげ贈りもの

敗者こそ勝者を作った立役者

勝ち負けのない世界はないのか

勝てば官軍負ければ賊の名を負いて

昔も今も同じさま

敗者に鞭打ち勝者をたたえ

勝者の行進どこえ行く

勝利の酔に酔わされて

酔眼どこを向いていく

勝ち負けのない静かな世界はないのか
静かに語らう世界はないのか

あの人たちは

勝った負けたのない世界

心やさしくおだやかな

世界もとめて逝ったのか

勝った負けたの明け暮に

愛想つかして逝ったのか

暗 喩

青木 幹枝

私たちが、現実と思っているこの世界に、
わからないだけで

夥しい数の

いや、数えられない

膜があつて

その膜の向こう側にも

広い世界があることを

時々気付く人がいる

時々気付く人は

風船のように膨らんでいる膜を

膜の向こうを見ようと

破れるほど力一杯押している

破れる寸前まで押し入ってみたいと思っている

その風船の中の空気を想像し

言葉を使うのだ

風船の反対側でも

押していて

同じその風船の空気をメタファする

そういうことを
している人と
私は時々頭をぶつけるのだ

桜桃

相羽 照代

桜桃^{さくらんぼ}背景に夫の写し絵のカラー写真のいと懐かしも

一粒一粒丹精込めし紅秀峰^{べにしゅうほう}お供へのごと光り輝く

五十年前の写真の暈けもせず爾^{じこん}今の如きを瞳る今なり

山形の桜桃畑なる秀果園夫とドライブ半世紀前

米国に桜桃見学半世紀前豊かなサクランボ作ると園長

山寺に夫と参詣長男の医大合格昭和四十六年

教授になり腫瘍・血液内科誕生と長く短かきわが世の卒寿

十年余を施設に暮す夫にして今日は我家に帰ると言ふも

玉碎の兄が私の生涯を見守りくれしを誰が知るぞや

生れし世の切なかりしを思ひしが老いて言霊形見に書けり

流れ行くものへ

安蘇野芳明

現世うつしよに流れぬものはなからむと思ふ心の空しかりけり

流れ行くものは消えゆく定めなれされど残らむものもあるべし

そよぎ来る風もろともに流れ行く雲の白さの姿儂し

ふるさとの川のせせらぎ流れ行く空遥かなる海の彼方へ

流れ来て流れ行きけるとこしへの今を貫く時の流れは

繰り返す歴史の流れ繰り返すごとにたださむ理念あらなむ

うるはしきころの流れ満ちきたるときはうたはむ心の歌を

いとほしきいのちの流れきはまれるときはうたはむ命の歌を

流れ行くものは消えゆくされどなほ残る思ひは如何になすべき

流れ行くなへに残らむ思ひこそ永遠とほにあるべきものにありけれ

ほろほろと白

大島 孝子

若き日の鎧のごときジャケットや大きな厚きこの肩パッド
なで肩の心細くてセーターに肩パッドつけ暮らしし日あり
夫の亡き三十年を支へくれしものひとつかこの肩パッド
肩肘張り生ききし日は過去となり厚き肩パッド次つぎ外す
素のままで生きるすずしき吹く風のまつはることもなくてさらさら
足手纏ひとなるもならるることもなく風の中ゆくごとく在りたし
山道を少しのぼれば視界開け入りゆきたき花野ひろがる
旅の途次か翅を休めてふぢばかまの花にいこふはアサギマダラや
散る花を掃きつつ季の移り知るさるすべり終り萩の花咲く
静かとも涼しとも見ゆ吹く風に萩の散りつぐほろほろと白

皇居勤勞奉仕

神谷 由里

お濠の上を渡りくる風さはやかに勤勞奉仕の朝七時半

奉仕団のわれらの歩く道の辺にむらさきの萩光る穂すすき

菖蒲田の傍へに清き流れありて雲間より差す日に煌めけり

赤坂御用地の大池のまはりの草とりてひとときをわれら木かげに憩ふ

東宮御所に今し差しくる日のなかを日嗣ひつぎの皇子みこがわれらの方に

いづこかの山の畑の趣おもむきに後の宮みやの桑の畑は

お手植てうゑの稲のひこばえあをあをと伸びて真直まぢくに実を持つ株も

この畦しづより早苗植はやなまししとその畦しづにつつしみて立つただつつしみて

御田の先の高き草の土手めひしばにいぬたでつゆ草くさきつねのまごも

勤勞奉仕のわれらの前に今まさに両陞いまま下坐くだます御声みこゑやさしく

あめつち

唐澤るみ子

あめつちのいづこのあたりわたくしが 心をこめて生きしあたりは
あめつちのほそき鎖くさりにつながれて 揺れやまぬままの一生ひとよなりけり
わたくしが負おはされし荷は重かりき 黙して負おひき理由ゆゑをしらねば
あめつちはドラマを燃やし人間を ドラマにくべて焼き尽くす とや
ああなれどあなたに逢ふた今生の このあめつちをいかに思はむ
身の奥へやさしき思ひが落ちし時 ああ あめつちは深しとぞ思ひき
さまざまな鳥を抱きとる春の空 そのやうであらうか このあめつちも
たれもみなこの天地を立ち去りぬ 立ち去るといふ 美しきことせり
泣きぬれてひとりひとりを送りきぬ このあめつちは 駅か わかれの
すがた無き このあめつちへ礼みやをなし 立ち去るといふ 美しきことはせむ

ふるさと

神野 規子

降り立てば無人駅なりその地よりわが鈍行の旅ははじまり

いつの世も人は究める心もつ縄文土器の手すさびを見よ

白木蓮すがしき色を空にかかげ子は初出勤の白きワイシャツ

ふるさとの地底にねむる水辺あり黒羽あきつ夢に飛び交ふ

わが前に立ちて過去へととほざかる人は記憶の中に佇む

一面に黄にかすみゆく麦秋の野に帰りゆくわれの心は

羞恥心なくせし頭脳か何もかも晒して平成の世はすぎてゆく

みどり濃き草生に朱の灯をともし誰の帰りを待つや鬼灯

秋晴れのもみぢのあひを縫いて落つ水美しき霧降りの滴

求め来し夢の名残かわたすげは戦場ヶ原に白々とあり

始まりのないもの

佐藤 孝子

秋の日のペンキの臭ひは五十年むかしの祖父をぐいと連れくる
この角は鍛冶屋桶屋はその隣夫の記憶に死んでゐない町
あつけなく更地となりし鍛冶屋跡すこやかに鉄を打つ音はせず
よるがほの白を揺らすは未だ死んでゐないと思ひたき人ばかり
プログラム勝手に更新してゐたり金木屋に誘はるる間に
始まりのないものを待つ白昼にわれは影さへ消えたる古い木
壁一面死にたる蝶を飾りゐし食堂ありき怖ろしかりき
芳名の芳と御住所の御を消して死者と無縁を装ふわれは
焼香に立ちたる女の靴下のほつれに這ひ入る死などあらぬか
頑に棲むならねども電話なく手紙とどかず暮るる日のあり

去りゆきしもの

島内 美代

木犀の花をこぼして空き家へと猫はゆつくり石塀渡る

さびしさはしばらく空にあづけおき空き家離れぬ猫の名を呼ぶ

いく人の生死しやうじのありし隣り家の栄枯を偲ぶ 月とわれとが

安らかに夕日を送り今日もまた深々と吸ふ木犀の香を

円かなる月に虫の音わきあがる官舎の賑はひことさらに恋ふ

折々に警戒心を呼び戻す空き家あき地の真中まなかの家に

両隣の有縁さやさや消されゆき月が促す短歌うたに生きよと

昨夜の月の置きゆきしものか枯れ初めしあき地の草に朝露光る

わが家の四圍のあき地に秋が逝く棕櫚を登りし蔦の葉が散り

街灯の光の中をゆく落葉風に連れられ戻りては来ず

藍の花

鈴木 芳子

なにもも寄せつけがたき橡の木の冬芽は漆黒の光を反す

たかだかと辛夷の花の咲き充ちて霰降るなか白く光れり

咲きさかる桜の花にかかりたる春降る雪のあわあわとして

フェルメールの青を思わせる空の色 棚びく雲のそをとぎしゆく

藍の花咲かせし昏き甕の中ジャパン・ブルーはここより生るる

寡黙なる職人の手にかけられる甕より上げし藍染の布

「甕かめのぞき覗」とう名のありし淡い青うすき布地の風に揺れおり

ゆりの木の小径を歩みゆくりなくミストを浴びる夏の公園

花てまり・カンナ・サルビア赤赤と陽の色に咲く夏の終りを

草刈れる野の道をゆく夕つつ方 枯れ草は晩夏の匂い放てり

託するは何

園部 恵子

稀にしか引かぬ字統に「平」「成」の成り立ちを解き短日をゐる

是れの世の負ふあやふさをそのままに新元号に託するは何

解き得ざる永久とほの服喪をそれとして朝朝宮居の日供につくに通ふ

頭を祓ふきほひたのもしまほろばの記紀よりぞ発みてぐらつ幣の風

日脚伸びいのちは縮む 竹林に今宵花咲くひともとあらむ

たましひの呼応正しく去年逝きし君の夕顔零れ種生ふ

手向けつつ消ゆることなき蠟燭の灯心ならめあかあかやわれ

聞き澄ます夜雨さやけく思ひ出の中なる人を包むがに降る

溢る世に厭く道行や餌食みなく透きつつ番ふ薄羽蜉蝣

行き合ひの空にしばしばみづからの影を奪はれ晩年に入る

平和と反戦

高橋 淑乃

八月が来れば俄にマスコミの話題にのぼる平和と反戦

彼の日から七十四年の令和元年今年も終戦記念日迎ふ

敗戦の飢餓の中から立ち直り暖衣飽食の世とはなりけり

戦ひに負けし原因むなしくも暴かれてゆくドキュメンタリーに

兵士等が夜の行軍に唄ひ行く軍歌が今も耳朶じだに残れり

水脈みの果てに命散らししますらをの無念を想ふ八月来れば

切々と平和と反戦訴へる言葉の力・言葉の無力

盆提灯の火影ほに逝きし人の顔ちみ霊鎮ずめの称名を誦す

四方よもの海さまざまの事起れども今年も甲子園に青春燃ゆる

日本人の寿命は伸びて高齢者時代を生きる平和叫びて

三千一日目

滝口 節子

「がんばろう！石巻」の看板に初夏の風吹く三千一日目

日和山ひよりやまの眼下にあの日飲み込まれる町を見たのは助かりし人

石巻の更地に見上げる日和山間に合いし人、間に合わざりし人

裏山の緑、川風、青き空 大川小に児らの声なし

モダンなる校舎に楽しき思い出もありけん 慰霊碑に花の溢れて

被災者の語り部の言葉の真実を車中に聴きぬ涙こらえて

女川の犠牲者ほとんど避難せず家に居りしとう語り部の父も

ここよりも上に逃げてと千年後に伝える「女川いのちの石碑」

「逢いたくて でも会えなくて 逢いたくて」中学生のいのちの俳句

新しき女川駅前商店街に見下ろす海は静かに光る

夢

田村世津子

うつし世は儚き夢の花のなかいつか彼の世の蝶とあそばむ

うつらうつら夢分け船の波に乗る生かされしいのちひとつ揺らして

平成に成せざる夢と成せし夢たぐりて令和の夢へとつなぐ

喜寿きじゆとなりやがて八十はとへと夢のせて翔べ白鳥座はくちやうへたどりつくまで

日暮まで遊びし缶蹴りかくれんぼ夢まぼろしのやうなり昭和

夢二描くをみなのやうな華奢な姉ことしも喘ぐ熱中症に

幸来橋渡れば君に会へるとふ夢物語はもう水の底

高僧の筆勢きはまる夏扇なつせんの夢の一字をそつとたたみぬ

月見草ほんのりともる夜のおぼろ夢に住む妣忘るるなゆめ

棄てられしものの逆寄せあるならむふくらむ夢の島の曇天

愚知を吐き出す

永島 道夫

食べ物に選り好みなし懐の温かき日は鰻を食べる

算盤の上手な人と下手なひと上手な人にわれは好かれず

眼の中に広がる海に気づきたるときに急いでボートを探す

能力の限界なりと思ひ込みいつも手前で立ち止まるわれ

土をかけ畑はたけにかこひおく牛蒡はやく食べてちと小さい葉を出す

八十歳はちじふを越えたる余慶おぼろげにひとの心の動きの見ゆる

良い悪いわが言ふまへに動きをりうまごの運転免許の取得

どの薬を止せば障さりの治をさまらむ素人考へ迷路はひに入る

日日乗らぬ車にあれど手放せず車検を前に気持の揺れる

泡風呂に入りたるわれも泡となりぶくぶくと愚知を吐き出す

空ゆく海月

野口もと子

竹藪の日ぐせの風に散りてなほ紅を深むる寒の椿は

強き雨うけし欠片かけらの鉢に咲く小さき白薔薇三輪の生

合歡木にねむの花咲く正ましくにあらぬこの頃禍ごと多し

野地蔵が睥みひらく頃ほひに咲くやこの花むらさき花菜

いつかゆく未踏の駅が見えかくれ行きつ戻りつ陽炎のみち

陸くがを離れ沖に漂ふ舟かとも記憶うすれし脳の旅は

風なのよ私風なの誘へるビニール袋は空ゆく海月

骨のパーツに立ち上りたる　むかわ竜ここは何処ぞ吠なくかもしれぬ

神秘なる翼五葉をかがやかせジュラ期に果てにし哀れ始祖鳥

華麗なる翼ぞ曲くもの雄の孔雀日がな点せり愛のシグナル

追憶の夏

橋本 茂子

雲の峰くづれ夕立ちの近づくやプール帰りの子等駈け出しぬ
降雨前線アメーバのごと伸びゆきて日本列島の天気図おほふ
豊かなる水が凶器に豹変す線状降水帯の雨滂沱たり

花虻のにぶき羽音に誘はれ朝露ふむ夏草分ける

キクイモの黄の花鮮かに咲き群れて食用植物と知りし彼の夏
アスファルトどろり溶けゆきたちろぎぬ昭和の夏の思い危し

炎天下の車中溶け出す口紅にメルトダウンのをのき覚ゆ

胸元にばらり解けしネックレス淡水真珠の床に散りぼふ

飛び立てぬ夏の蛍か真夜届くメールの青き点滅あやし

耳元に揺れる瑪瑙のイヤリングはずせば今日の喧噪を脱す

断捨離

福澤
悦子

断捨離の痛みに抗し亡き人の歌集を過去のものとして捨つ

せめて数首の歌書き写し棄つるべし捨て難く友の歌集読みつぐ

この人もこの人も亡し抜書きして惜しみつつ故人の歌集廃棄す

いづれ我が贈りし歌集も捨てられんはや過去の人の歌集とはして

友らは我を過去の人とし思ふらん総会にも歌会にも出でざる我を

物なべて輝きを失くす刻あるはおのれ老いたる証ならんか

拡幅工事にこぼたるる家もろとも捨て捨てて新たなる家に移らん

健やかに今日あることの有難さ陽出づる刻を見んと戸を出づ

胸ふかく息吸ひ込みて平群なす山ひとところ朱さすを見る

いまし出でん陽はいまし出でんと山の端を見つむるころ信仰に似て

遺伝子組み換え

星野 清

西風に煽られて入る店先に見よとばかりに春播きの種

春を待つ心兆して久々に小松菜の種一袋買ふ

田舎には無い野菜とて小松菜を少年の日に記憶したりき

小松川村に生まれし江戸野菜小松菜の種がイタリア産とは

すでに神の領域にまで立ち入るか遺伝子組み換えは易き技といふ

AIにてより簡便に操作されますます進む遺伝子組み換えへ

効率よく次々に遺伝子を組み換へて人の企てし種しゅが生まれゆく

人により作られし種がすり抜けて自然交雑するを危ぶむ

人による管理にひそむ危ふさはかの原発の事故にも通ふ

干ばつに強き小麦の新品種うれしめどこれも遺伝子組み換えへ

風よむ力

増淵 弥生

未来図の完成未だ追風の老いのくらしに風穴明けむ

戦ぐ風身丈に見合ふ幸を摘むプランターからバジルとパセリ

現代のキーワードなる若がへり風よむ力持ちたるトップを

黄砂とふ異国の土も運び来て春よぶ風のひねもす荒るる

AIに台風予報を危機管理フォックスフェイスが苦笑ひする

雲合ひに風の語りにこころ寄せ竹は撓ひて折るることなし

蟻の列いづこへ続く山すその風評被害うすれゆく町

むし干しに父母のかをりの邂逅を空に秋刀魚の群れが流るる

おかつばをさかだち揺らし鉄棒に見らの廻せる風の行方は

心地よき風に音して干反る沙羅ひそかなる冷え社会を覆ふ

舟を編む 『大渡海』

安野登美子

ましろなる沙羅双樹のあはひよりついと出できぬ馬締光也が

玄武書房 馬締光也はのたまひぬ舟を編むわれ大渡海編む

太古より未来へつづく言の葉とはた魂も乗す舟を編む

校正刷りに朱のふえゆくゆふつかたしやくなげいろに海染まりゆく

血潮・血汐忽然と消ゆトラブルに逆流の魚の群れをのきぬ

激情の馬締は吠ゆる声高に「泰山鳴動鼠一匹」

天の海に雲の波たち宙をゆく大渡海時空を船出するなり

船を編みし三浦しをんのよこがほが浮かびては消ゆはつなつの海

いぶかしむ馬締光也の風貌は松田龍平ふと顕たしむる

大渡海くわんせいなる日シャンパンをわれはそそぎぬ天上天下に

万葉びと

山崎緋紗江

らうらうと梅花の歌の序を読みあぐ帥そちの旅人たびとのこゑ若やぎて

「遠とほの朝廷みかど」と呼ばれ賑はふ大宰府の宴に憶良も梅の花詠む

沫雪あわゆきのほどろほどろに降りしけば旅人は念おもふ奈良の都を

香具山に登りて詠みし国見歌いまも美はしきや日本の国は

甘奈備かむなびは神のまします山や森くらしのかたへに神おはしけり

霍公鳥ほととぎすひときは高く野に鳴けば仕事始めむ農は国もとの本

防人さきもりの頭かしらかき撫なでで幸さいくあれと言ひて見送るその父と母

道ならぬ恋も移ろふ恋もあり万葉びとのをみなは熱き

万緑のなかに真白やまほき四照花ふし咲き満ち山は祈りに満ちぬ

夏山に令和のことは木霊して万葉びとの祈りを思ふ

展 望

横山 岩男

己が生展望なすに良しとせむ新た著作はあと二三冊

夏物の見の涼しきにスリッパを新しくしぬ気分新たに

わが庭に生まるる蟬の稀にして夏の終りの法師蟬鳴く

秋の空晴れて涼しきけふの空熱中症の過ぎて幾日

違ふなく時の至りて彼岸花赤く群れ咲く駅前広場に

スーパーの機械化されてコンピュータの指示に従ひレジに支払ふ

母の死に早く会ひしが人の死に悲しみ淡く哀しみうすし

勤め辞め得たる心の小安に二度の勤めはなさず来りぬ

先のなき第二の生と思ひしが勤めを辞めて三十年か

残る世はあと幾年か職持たず経にし三十年は短くもあるか

連翹の津軽道

阿部

功

水ありと思ほゆほどの冬の川

きらきらと川面に冬の月明かり

雪嶺の模糊を許さぬたたずまひ

春疾^{はやて}風涯は見えざる怒涛かな（竜飛崎）

海くらき春ははやての音ばかり

まほろばの縄文遺跡に息ひそめ

連翹^{みぢ}のまた連翹の津軽道

風走り若き植田の水光る

水清き瀬音の中の大暑かな

たかだかとねぶの花咲く満願寺

冷酒

人見靖子

おたまじやくし小さな息の浮いてきし

上流も下流も河鹿鳴いてをり

ハルピンの野の真つ平大夕焼

蛞蝓のひやりと触れてしまひけり

身構へぬときは草色雨蛙

付いて来し鷗が先へ青岬

サバンナへ真つ直ぐな道バナナ熟れ

達磨さんがころんだ空蟬動く

ついて来さうなびちびちの蛇の衣

まだ生きてゐさうな魚冷酒

春夏季

石井
光

うららかや歩幅を伸ばし背を伸ばし

竹林のざわめきてをり春驟雨

望楼は浮島のごと花の空

田水張る映すや雲の光りけり

退院の家路真つ直ぐ姫女苑

迷ひ蟻冷たき夜のリノリウム

逃げ水へ人影消へて宿近し

初夏やプラットホームの風の道

岩魚釣る少年の日の雲遠く

蜘蛛の子は風に乗りしか雨上がる

始 発

吉田 良二

老妻の口元ゆるむ初みくじ

おてんばの澄まし顔する雛祭

時移るかはらぬ雛の若さかな

木蓮の白さ際立つ古屋敷

嬰兒や風鈴の音柔らかし

見えぬまで手を振る母よ蝉しぐれ

かるがろと雲を背負ひて赤蜻蛉

真つ白な線引き締まる運動会

初めてのスマホ買う妻冬紅葉

蒲団干す妻の背中の丸さかな

平成のうちに……

大須賀邦夫

傾きし墓散散と初日影

松の内ひと日残れる訃報かな

先ずわが身支えの杖の去年今年

夜明には白く咲いてた椿かな

咲き残る山吹一輪古希疾うに

平成のうちに散りゆく桜かな

汽笛降る瓦礫の町の暮の春

敬老の日ぞランチタイムのハンバーグ

避難指示解けずコスモス乱れ咲き

曼珠沙華ちかごろ少し花やぎて

水の星

松本とまと

二極化の超熱い夏寒い冬

湯の星になってしまふよ水の星

ゲリラ豪雨地球の自爆かも知れぬ

文明が地球泣かせている矛盾

プラのゴミプラに重宝しています

人間のエゴを嘆いている地球

堂々巡り食い止められぬ地球号

ああ地球むかしむかしへ帰りたい

ニンゲンが犯人でした温暖化

大自然の摂理人間もう一度

人間模様

大河原信昭

不機嫌なカミソリ髭を剃り残す

耐え切れなかった口惜しい鞭の数

気配りの舌が誤解を招くとは

友人を増やし悩みを抱え込む

夜叉の面被りハートは澄んでいる

反論を控えて晴れぬ胸の霧

靴の先躊躇っている黄信号

鬱の日の絵の具にパッと空の青

言い負けて爽やかな風持ち帰る

成し遂げた帰路に三日月冴え渡り

花一匁

野口 直子

走ったら涙が乾くかも知れず

別腹が開かないうちに歯を磨く

お返しの方が立派で恥ずかしい

着ぐるみの糸がほどけて来たみたい

わたしにはNOと言えてる日本人

人間じゃない鉛筆が丸くなる

いろいろと出来るよ窓を開けてみる

荷物など持たぬ最後のお引越し

ジャンプするためにはしゃがんでいるところ

花一匁きつとあなたを取り戻す

秋夜長

水上 義明

陽が落ちて始まる虫のコンサート

玄関に枯葉いち枚コンニチワ

越冬に備え早足蟻の列

道の駅秋の味覚が揃い踏み

新米の味噛みしめる塩むすび

秋の陽にバトンを渡すゴーヤ棚

カレンダー独り善がりの秋にさせ

彼岸花八頭身の誇らしげ

真っ白に化粧ほどこすそば畑

長編を読み切り余す秋夜長

命の在り処

柳岡 睦子

名画からもらう命のひとしづく

地球儀も洗濯物も揺れている

見えぬものばかり私の宝物

やさしさの奥の深くて暗い森

対という絆 労る夫婦 箸

愛の巣の地球に戦など無用

心って顔のまん中だと思おう

修飾語纏い淋しくなってくる

バーゲンのどこにも売ってない命

新作の童話に平和語らせる

バンクシー

早見 千代

安美錦最後の塩を握りしめ

川柳が詠めそうですねバンクシー

夫婦にもトリセツが要る茜雲

スポーツ系についてみたいふくらはぎ

賭けマージャン平日なのに市長さん

換気扇祭囃子に踊ってる

風呂の栓抜いてすっきり年の暮

イクメンをイクメンにするだっこ帯

太陽を使い放題布団干し

平和だなごはんの炊ける匂いする

テイラノサウルス

三上 博史

テイラノサウルス飼い馴らせれば解体屋

スカートの危うさ思春期の脆さ

落ち葉焚き太古の空へ行く煙

それだけの時間だけれど豆を煮る

ノーブラで寒くはないか筑波山

歌会始ラーメンならば伸びちまう

白菜畑笠を被らぬ笠地蔵

納税に理屈などない寒の空

パイプオルガン神の啓示が降りてくる

白蓮の蓄空への御灯明

特集

令和―捨てられるもの捨てられないもの

賜り物

神谷 由里

子供達が幼い頃、どこかへ出かけた帰りにふと立ち寄った父が、散らかっているわが家を見て「今は、物が豊富だからなあ」と言ったのを時々思い出します。

父が育った頃を想像するまでもなく、私が子供の頃も洗いです。今はややもすると冷蔵庫の中で賞味期限切れになっ
てしまったりしますが、子供の頃は食べ物が余るという事はほとんどなく、兄は珍らしく誰かに貰ったパンを後で弟にやろうと思って大事にしまっておいたら、かびが生えてしまっ
たと話していたことがあります。切ない話でした。

齢を重ねて、ありがたいことにたくさんさんの出会いがあり、あたたかい縁があり、数々の思い出、それにつながる様々なもの、心のこもったプレゼントなどが、身のまわりにたくさんあります。思い出は宝物です。思い出につながる物も、みな、過ぎていった愛しい時の形見のようです。物は物質であると共に心の表れでもあるのだと思います。もっと言えば、心の深いところ、たましいに近いところにある物も想像できます。なかなか捨てられないのはそのためだと思います。

ですが、いつかこの世を去る時は、何も持っていけない。身一つという言葉がありますが、長い年月親しんで、お世話になったこの体さえ持っていけない、ということは別れの度に身に沁みています。物としての私の物は、どうしてもという物があったら縁の方々を受けついでくれたら、それはあたたかく、ありがたく思います。

読んだ本の中に、たましいだけがあの世に行くと書いてありました。そのたましいは、この世、今生での様々な思いや行いを持って行くみたいです。(そして、そのたましいが新しい体を得ると、来世に命として誕生するのだそうです)

今回のテーマの中の、捨てられないものを、この現象界の三次元の物ではなく、あの世に持っていけるものとして考えてみたいと思います。

人は誰も、何かを学ぶためにこの世に生まれている。そして、その学ぶものは人によって違っている、とも書いてありました。一日一日が神様から与えられた学びなら、その学んだことこそ、あの世に持って行けるものでしょう。

その時、その時の誰かの笑顔。おいしいご飯。さわやかな風。そう思ってみまわせば、身のまわりは宝の山です。このひと時、ひと時の愛しい時間。物も縁も、みんないただきものです。自然から。世の中から。先に生きた方々から。親しい人達から。そして、神様からの賜り物です。

和やかに、楽しく、大変な時はなんとかがんばって、今日の日を感じて暮らしましょう。それが私にとっての大切なものだと思います。

穴の開いた靴下

松林 厚子

子どもの頃、東京の下町に住んでいた私は、毎日のように隣の家に出かけては、食事やおやつをご馳走になっていた。その日も、ちゃぶ台の前でお座りしておやつを食べていると、私の足元を見たお婆さんの友達が、目を見開いて大きな声を出した。

「いやだよ。この子、つぎのあたった靴下ははいてるわ」

小学校の低学年だった私は、恥かしくて泣きだしそうになった。家に逃げ帰り、母を見つげると、顔を真っ赤にして言いつけた。

「花塚さんのお婆さんに、靴下につきがあたっているって、笑われたよ」

母は平然としていた。

「あのね、あつこちゃん。穴が開いたままの靴下をはいているのはみっともないけど、繕ってある靴下は、何にも恥ずかしいことないの」

母はしょっちゅう裁縫箱を脇において、父の靴下を繕っていた。母の手元を見ながら、

「お母さん、いつもお父さんの靴下、直しているね」

と言ったら、手を動かしながら、

「お父さんの足は重いから、すぐ穴が開いちやうんだよ」

父は若い頃の事故で、両足に義足を着けていた。ジュラルミンの足は子どもだった私が両手でやっと抱えられるくらいずっしりと重かった。

父の靴下だけでなく、ヨレヨレになったシャツや、パンツ、膝に穴が開いたズボンなど、母は家族みんなの衣類を繕っていた。

思春期になると、私は肘に穴が開きそうなブラウスを「そろそろ捨てようかな」と考えるようになった。だが、それはいつの間にか生地が補強されていた。そうなるかと捨てるわけにはいかない。「あーあ」とがっかりしながらも、私は母が繕ってくれたブラウスを着続けた。

母は今年九十歳になる。今でも裁縫箱を取り出しては、似た色の生地を見繕って穴をふさいでいる。

先日、夫が穴の開いた靴下を私に見せた。ハッシューパーというメーカーの靴下で、小さな犬の刺繍が入っている。

「これ、気に入っているんだけど」

「直したら、はくのね」

私の繕い物は、母のように縫い目がそろっていない。生地を選び方も適当だ。膝を繕ったジーパンをはいていると、子どもたちもすぐに気がついて、「お母さん、まだそれ、はいているんだ」と呆れられる始末。

繕った衣類には、魂がこもるような気がする。タンスにはつぎのあたった靴下やズボンが、捨てられないままいくつもしまわれている。

時の流れ その非情さ

大出 京子たかこ

悠久の大義 我らが訪れを待たむ】 かなめ
の日付が（二月二十五日夜）とある。

【必死捨身體當】

倉橋新一

【吾等唯後に続くものを信じて進撃玉碎せんのみ】 穂積重道
置かれた立場に立つての気概を綴った中に、

【捨石】

千葉延男

【元気で行かうヨ 人生は】

石川大馬

【飛び立ちし野に一輪のあやめかな】

佐藤 清

のような、心の襷に潜めた、と感じ取れる一言もある。

二〇一九年四月、四冊目の作品集を自費出版した。考えてもみなかった出版である。それらに目を通してみた。意識してきたことだが、あの戦争の末期、一九四四年から一九四五年にかけての特別な出会いが、どれほど私の感情、ものの考え方に影響を及ぼしているかを改めて知った。出会いとは、学徒兵・特攻兵との出会いである。

手許に、「偲昔雑詩」と表書きのある、事務組で簡単に綴じたA4判ほどの和紙のノートがある。私たち一家は（シセキザツシ）と読んできた。戦時中、休日安息所であった我が家を訪れていた特攻兵六十余名の若者が書き残していった言葉が、そこにある。原本は、父が祝詞を書くために用意してあった美濃紙を二つ折りにしたものである。大切なそれを、戦後、父の許可を得てコピーし、綴じ直した。

陸軍大尉 八木光夫

【自己反省】

に始まるそれは、

【醜のみたてと出立つわれ】 神鷲特攻隊長 橋本 進
で終わっている。

その前のページの

【別離は悲し されど徒に涙するものに 非ず

消すには余りにも切な過ぎる。学徒兵間で密かに交わされていた「この戦争は負ける」の言葉と共に私の心に傷のように残ってしまった。こんなこと口にして大丈夫なのだろうか、と気になっていた私は国民学校六年生。戦果を軍艦マーチと共に報じるラジオに、高揚する気分を味わっていた少女だった。

——私は知らなかった。時流に胸の奥で抗いながらも、その流れに乗るしかなかった若者達を。

随筆「十四杯の甘酒」を私に書かせたのは、若くして逝ったあの若者達である。

七十四年を経ても、「偲昔雑詩」は私の掌に重い。

あの若者達が少しずれて生を享けていたら……。

時の流れの非情さを思わずにはいられない。

令和元年へん・シーン！

橋本紀久子

令和元年、私は黒髪に見切りを付けた。

大きな断捨離第一号である。

髪を染め始めたのは何歳の時だったろうか、考えを巡らしてみる。高校を卒業して初めてパーマをかけた時、店にいた客が、ばっさばっさと切り落とされて床にこんもり積もった髪を見て「いいお髪ですねえ」と羨ましそうに言った。

思い返せばその頃私の太い三つ編みの髪は、胸を隠すようにその上で跳ねていたっけ。

三五度という八月の居間、冷房の中で朝刊を読んでいると偶々白髪染めを始めた年齢の平均が載っていた。それによると男性四〇・八歳、女性が四三・五歳となっていた。じゃあ私もその頃だろう。

一と月一センチグレイへアーに変わっていく。偶に顔が母親そっくりで、ぎよつとすることもある。でも、もう迷わない来年の誕生日には白髪の私がデビューする。

心機一転何かが変わるようで楽しみでもある。例えば服はピンクやターコイズブルーなど白髪に映えるだろう。着て楽しければ外出も増えるだろう。人に会えば刺激も受ける。なんて前向きな思考が広がっていくだろう。

一方、捨てたいのに捨てられぬものの悩みは深い、胸に居

残るしこり。物の断捨離もさることながら心中の断捨離はさらに難しい。人に話すことで解放されるかも知れないし、逆に深い傷になるかも。そう考えるとそれも出来ない。

第一私は臆病者だ。しこりを誰にも知られたくないプライドもある。そう、プライドが邪魔なのかも、わかっちゃいるけど、そこがね。

でも良いこともある。人を傷つけまいとする気持ちが湧く。優しく接したいと心掛ける。百歳まで生かされるとまだ二十年もある。もう充分とも思うが新元号になったことだし「私」を丸ごと捨てて「へんしくん」もありかなと思う。

無駄を省いて贅沢を

松本とまと

豊か過ぎる時代を生きている。モノが溢れているのに、更なる消費を促される。それによって、どれほど物を無駄にしていることか。

人間は安きに流れるから、便利さと樂する事を覚えてしまつて、もう後には戻りたくないと思う。特に重宝してきたのが、プラである。手ぶらで買い物、プラに覆われた商品を買ひ、プラのレジ袋に入れて貰つて持ち帰る。

このプラのゴミが地球環境を脅かしているという。海洋汚染や、魚や動物の生態系を狂わせ、あげくにはマイクロプラスチックになって人間にも悪影響を及ぼす。

遅ればせながら、私も昨年からレジ袋は辞退するよう心がけている。スーパーへはマイバッグ持参、家族にも極力持たせている。それから、ゴミの分別を徹底している。資源ごみ、リサイクル、そして燃やすゴミである。

リサイクルとはいへ、プラのゴミの多さに気が咎めてならない。

先日バザーへ寄付しようと、押し入れを覗いたが、眠っているモノが一杯あった。モノがあり過ぎて、いざ必要な時に見つけられず買ってしまった。大いに反省しなければならぬ。モノに心があつたら、泣いていることだろう。

これから改めて、整理整頓しよう。そのために、モノは増やさない。まず、入れ物を増やさない。私の座右の銘は、「無駄を省いて贅沢を！」だった。気に入つて守っていたはずなのに、豊かさに溺れて忘れかけていた。

改めて令和に、私は無駄を捨てようと思う。そして、贅沢を樂しもう。モノの贅沢ではない、心の贅沢を樂してみたい。

おばさんのくれたズボン

紙屋 里子

眠ろうとして布団に入ると実家の隣のおばさんが立っていた。京都府の北の端から群馬までどうやって来たのだろうかと思っていると、いなくなつた。不思議なこともあるものだが、夢でも見たのかと思つて眠つてしまった。次の晩も現れ直ぐに消えた。三日目の晩も来た。『おいで、おいで』をする。おばさんは亡くなつたんだ、私を可愛がつてくれたから一緒に連れて行きたいんだと思つた。

「行かない。玲子にもうすぐ赤ちゃんが出来るんや。世話にいくんや。信にまだ嫁が来てへん。嫁の顔、見たいんや」と言つたら黙つて消えた。次の朝、主人が言つた。

「昨夜、なんだかごちゃごちゃ言つてたな」

その朝実家の兄から電話が掛かつてきた。

「隣のおばはんが、三日前に亡くなつた。大阪から遺体を運んで、ゆうべお通夜で、今日葬式だ。香典しておくぞ」

大阪の娘の所で亡くなり、丹後に帰つて息子に葬式をしてもらう。三日間霊がさまよつていたのだ。それで私の所に来たのか、葬式をして貰つて成仏出来たのだ。

私は三人兄妹の真ん中に生まれた。

母は、三人姉妹の一番上なので、父を婿養子に迎えている。それも影響していると思うが、男の子を大事にし、その反動

のように私には、何かにつけひどい扱いをした。父が注意をしているのが聞こえた事があつた。

何か面白くない事があると、私に当たり鬱憤ばらしをした。兄と妹には優しくするのに。子供の時は、何があつても家になくしてはならないので仕方がないが母が脅威だつた。

ある日、私が綺麗に掃除をし終わつたら、母が畑から帰つて来て、ドーンと荷物を置いて汚してしまつた。

「絹ちゃんが、今、綺麗に掃除したところやろ」

「また、掃除したらええんだ」色々なことで母が私に当たると見かねた父がいつてくれたが、母は変わらなかつた。

教職に就いたのは京都の南部だつた。三年勤めて家に帰り、結婚した。主人が京都近辺に住みたいと言いまた南部に転勤し、青谷に住んだ。二キロほど京都よりの長池におばさんの息子が住んでいてよく来ていた。そのついでに、私の家にも来てくれた。子供達は親戚の伯母さんだと思つているようだつた。丹後に帰る時はおばさんにはお土産必ず持つていった。私が行くのを待つていてくれたから。お土産のお札だといつて、裾の広がつた素敵なズボンを縫つてくれた。今も大事に持っている。おばさんは百歳まで生きた。もう三十年以上経っているのに、そのズボンは洒落た感じがする。『おいで、おいで』には応じられなかつたけど、ズボンは大切に履こうと思う。

短歌における

「言霊」に関連して

安蘇野芳明

一般に「言霊」といえば、敷島の道の和歌の言葉に鳴り響く歌の調べを意味する。和歌の世界に鳴り響くのであるから、それは本来大和言葉に属するものと考えられる。それ故言霊は、大和言葉の調べによって生まれ出るものと思われる。

短歌（歌）は和歌の一つとして、万葉の時代から大和言葉で詠まれてきた。少なくとも近世までは、そのように見るこゝとができると思う。その結果、歌は大和言葉によってその存在の場が形成されてきたといっても過言ではない。そして、そのことによって、歌は必然的に大和言葉によって調べとしての言霊が確保され続けてきたのである。

歌の言霊は大和言葉によって醸成される。漢語やそれ以外の外来語では、極少数の例外を除いて、言霊を確保するのは極めて困難なことなのだ。

最近の連作私歌の、七夕を詠ったものの一部を紹介し、歌（短歌）の創作上、私の「捨てられるもの、捨てられないもの」について、簡潔に述べてみたい。

良き人に恵まれむとぞ願ひたる短冊赤き色に揺れ交ふ

速やかに病癒えむと願ひたる短冊白き色に揺れ交ふ

美しき人にならむと願ひたる短冊黄なる色に揺れ交ふ

更になほ聴くならむと願ひたる短冊青き色に揺れ交ふ

何の変哲もない連作であるが、これら四首の歌の中には、漢語は「短冊」というただ一語しか含まれていず、その他はすべて大和言葉に依っている。主題としての意味内容からすれば、漢語を用いて詠える可能性は十分にあるのだが、このように大和言葉によって自然に詠うことができたのは、私の中に、歌は本来和歌であり、それ故歌の場は大和言葉によってその存在が可能であり、その場がまた大和言葉によって最もふさわしく表現されるという、大和言葉による言霊への信仰があるためである。

「令和」という元号が、万葉集に因んでいることを思い遣るとき、改めて歌の世界の言霊を強く意識し、私の創作上の基本姿勢である「古典へ遡りつつ現代に回帰し、現代を見据えつつ未来を展望することを確認し、「捨てられるもの」と「捨てられないもの」とを区別することができるのである。

歌の世界において、私にとって「捨てられるもの」とは、大和言葉による言霊の幸な歌の場にふさわしくないとと思われるものであり、それに対してふさわしいものは、「捨てられないもの」となるのである。

歌は本来その存在の場を大和言葉に依拠する。それは、歌の理念なのである。

折り鶴

神山 曉美

千代紙で鶴を折っている。故郷の祖父の家、日当たりの良い広縁に叔父とふたりで。

「三角に折って、もう一度半分に」か細い叔父の声が、歌うように小さな指を誘う。叔父はいつも家に居て、病弱で幼い私のただ一人の遊び相手だった。新聞紙で大きな鯉のぼりや兜を折ってくれたこともある。石鹼の粉で作ったシャボン玉を飛ばした日もある。長い昭和の時代のどのあたりか、私が小学校に通う頃には、もう叔父の姿はなかったように思う。

いま「終活」と称して、いつまで経っても終わらない机の整理をしている。目的もなく集めた千代紙の抽斗を開けるたび、小休止……と独り言を呟いて鶴を折り始める。奴さんも手裏剣の作り方も憶えてはいないが、鶴だけは指が勝手に折ってゆく。いつも、そこで「終活」は中断し、そこからは一向に進まない。捨てようにも捨てられない千代紙と、それに重なる記憶の中のいちばん遠い想い出。

十年余りの介護を経て義母が、がん闘病の果てに義妹が、実母も夫も、それぞれの運命を生ききって逝ってしまった平成の世。ひとは皆、いつかはこの世から消されてゆくのだ。関わった人々に想い出だけを遺して……。それで良いと思う。自然遺産、文化遺産、目に見えるもの、手にできるものだけ

が遺産ではない。人の心に深く残る想い、これもひとつの遺産だと思ふ。

昭和のはじめ戦争があった。戦場においてそれを体験した父から、その様子を練り言のように聞かされて私は育った。同世代の人々の誰よりも戦争については敏感だと思ふ。日本では戦の無かった平成の三〇年だが、いまも世界のどこかで戦鬨は繰り返されている。戦争というものを知らない人たちによって。体験や記憶は遺伝しないのだ。過去の過ちは、目に見えないものは、言い伝えなければならぬ。書き残さなければならぬ。書く術を知っている私たちも、後の人々に伝えていかねば。

千羽鶴が平和・非核の象徴となったのは、原爆病と闘いながら亡くなった広島佐々木禎子さんに由来するという。「千羽の鶴を折ると病気が治る」と信じて、死ぬまで鶴を折り続けたというのだ。令和元年のこの日、また私の「終活」は鶴を五羽折ったところで終わる。祈りを込めて折るほどの想いはないが、鶴を折れるほど穏やかな日であるのが有難いと思う。京都で、美濃で、鳥山で、見つければ手に取った千代紙が色とりどりに重なって、想い出の中に私をいざなう。

戦後の、ようやく平穏な日々が戻ったのであろう故郷の広縁で、叔父が飛ばしてくれたシャボン玉は消えてしまったが、折り鶴は指が憶えている。鶴が平和・非核のシンボルとして、千羽折ることで想いが伝わるのなら、これからも千代紙を処分することなく、鶴を折り続けようと思う。「生きていてはいけないのだ」そう呟いた叔父の声の謎が解けないまま。

第4コーナーを廻って

大河原信昭

近年人工知能の進化は、急速に進んでいると聞く。その身近なもの一つに、スマホがある。ガラケーをやっと利用している自分には、手の届く代物ではない。

そして、どの車にも当然のようにナビが備わっているが、それが無い。では初めての所に行くには、ロードマップから位置を調べその方向に車を走らせ、不明の場合は交番を利用する。

スーパー等で客の何割かは、キャッシュレスで支払いをすませている。私の財布には一枚もカードは無い。全て現金払い主義である。カード処理の方が何%か安くつくはなしを聞いたことはあるが。

それに銀行等の預け下ろしは、手書きに捺印で行う。

以上を読んで下さる諸氏、なんとまあ時代に乗り遅れた者と冷笑が見えるようである。ITに頼っている現代社会、人間の左右の脳は退化を辿っていると、何かで読んだ。そのことが発端ではないが、時代に逆らう生き方があっても良いのではと思う。

手紙葉書そして、雑文等は全て手書きで行う。これに拘るのは、礼状招待状それに案内状等に一行も手書きがないものが殆んどで誠意が感じられないのだ。

話しを変えよう。自室の周辺は、古い誌書の類い、捨てることの出来ない雑品等々が所狭しと、舞めいている。優柔不断の自分は、整理しなければと思っただけだが実行出来ずにいる。年号が改まった本年は、思い切ろうと決心している。年々体力の衰えるのを遅らせる一方法として墨を磨り和紙に思いの丈を筆に託す。この一時は何にも変え難い時間である。

何代か前の総理が職を辞した折に言われた言葉に「付き合ひの義理は止める」とあった。その年に自分が達した今、それを実行しようと思っっている。どこまで可能か不明だが。

戦災で全てを焼かれ、着の身着の儘の状態の折、親戚の祝い事に招かれた母は、自分を連れ友人宅へ和服を借りに行つた。

後年何故自分を連れて行ったのか、食うことが精一杯の暮しの中で。義理とはこうゆうことですよ、と教えられた。

それを守って生きて来たつもりだが、振り返って軌跡を辿ると自信がない。

生き様を可も不可もなく振り返り

前節へ戻って再考してみる。結論を出すまでには時間がかかりそうである。

やぶれ太鼓

高杉 治憲

平成という時代は、かつてないほどの好景氣と共に華やかに明けてそれが長く続くかのように思われていた。ところが僅か四年後、日本全体に取り返しのない後遺症を残してバブル経済が崩壊した。それが元凶となつて二十年経過した時点でも厳しさを深め国や地方自治体の財政は最悪の状況に陥り企業経営から国民生活に至るまで未曾有のデフレ不況が深刻さを増していったのである。

平成元年の頃、県東部の那珂川町でゴルフ場と温泉ホテルを経営していた八溝観光株式会社の創業オーナーである神岡会長は、親子ほど歳の違う異母弟の新次を息子のように育て常務に取り立てていたが、縁あって女婿となつた私を後継者にするために新次の後継社長のを断念させた。その代償として新次の熱望を叶えさせる為に不動産会社の設立を認め、併せてその買入資金借入れの保証を引き受けていたのである。それ以降、新次は兄の信用と保証によって水を得た魚のように銀行から融資を引き出して片端から事業付不動産を買いまくった。当時は、前日一億円で購入した半端なビルでさえ翌日には二億で買い手が現れるという異常な時代だった。商才も先見力も必要としない、度胸一つで不動産を買い付ければそれだけで億万長者になれた狂奔の時代だった。それこ

そが金が金を生むマネーゲームであり日本人の感性と価値観を狂わせてしまうバブル経済の実態だったのである。当時、新次を知る人々は皆、異口同音に彼を絶賛して憚らなかつた。『神岡新次という人物は時代の寵児であり不動産事業の天才』と、銀行をはじめ、永年、我が社の顧問をしてきた弁護士や税理士までが褒め称えた。新次が買い入れた不動産は、僅かな期間に二倍、三倍と値上がりしたことで兄の会長はめくら判を押し続けていたが、値上がりは翻弄され売却もできないままバブル崩壊を迎えることになった。新次は更にラブホテルやビジネスホテル、水商売専門の貸しビルや潰れかかったパチンコ店まで買い入れていった。そして、気づいてみれば四倍、五倍の筈が三分の一、五分の一にまで大暴落しているのにバブルに毒された欲が正常に戻ることはなかつた。

その後、新次の会社は破産し、嘗て優良企業だった債務保証会社の八溝観光は銀行管理となりオーナーの神岡会長が引退して亡くなった後、私が民事再生を決断し再生を目指した。時代が令和に替わつた現在、新次は国道沿いに大きな倉庫を借り受けて、『リサイクルショップ未来や』を内妻名義で営業している。その看板には「遺品でも何でも引き受けます」と書かれ、物が溢れて置き切れず他の数カ所の借地に夥しい廃品の山ができていた。そこを訪れた私の足元に玩具の破れた太鼓が落ちていた。バブルの申し子には、これすら宝物に見えるのか。この廃棄物の山をいつ誰が片付けるといふのか、鳴呼。

平和憲法と原子力

高橋 淑乃

私は、捨てられるもの・捨てられないもの　と言われると
まず、断捨離とか終活が頭をよぎる。

先日も身めぐりを見回して不用品を捨てようと台所から始
めた。冠婚葬祭の引き物とか未使用の食器や鍋を出して、一
荷物をバザーの店に出した。

しかし、こんな事位では、何をどこに捨てたのか、全く何
んの変化もない。最少限度の生活用品だけを残してあとは皆
捨てようかとも思うが、そうは言っても我が身の余生がいつ
まであるかは「神のみぞ知る」である。捨ててしまつては不
自由をすると考えるとなかなか決断が付かないから困つてい
る。

しかし今回の特集のテーマは、そんな事を言っているので
はないと思う。

令和と改元して最初の八月を迎えた。八月が近付くと俄に
新聞もテレビも「戦後七十四年経って……」とまくし立てる。
八月は六日が広島、九日が長崎へ原爆が投下された日である。
そして十五日は終戦の日と、辛く悲しく日本人にとって一番
長い日が来るからである。いろいろな人が戦争の思い出を語
り出す。そして戦争は絶対に対しては駄目だと言い、命を落
した人の冥福を祈り祭祀をする。これらの行事は令和の時代

も、又その後もずっとずっと語り継がれ引き継がれなければ
ならない。この重大な体験は日本人の教訓として捨てられな
い事となったのである。

俳人の金子兜太さんは二〇一八年二月二十日九十八歳で亡
くなつた。海軍の主計中尉として太平洋のトラック島で終戦
を迎えたと言う。南海の孤島と化した地で、本土からの補給
が途絶え、兵士達は空腹に耐えかねて、死ぬと分かっている
が毒があるフグを食べたり、野草やトカゲを食べて下痢に
苦しみ死んで行つたと言う。

・水脈の果て炎天の墓碑を置き去る

と言う句は金子さんがトラック島から引き揚げる際、島に
建てられた戦死者の墓碑に船の甲板から訣別を告げた時の句
であると言う。何度読んでも哀切で私は涙が溢れてくる。

広島、長崎の『黒い雨』は井伏鱒二の小説である。

戦後七十四年の今年改憲を声高に唱える安倍政権には不安
がつのるばかりである。捨てられない物は平和憲法である。
明治天皇の御製に

・四方の海みなはらからと思ひしになど波風の立つは悲しき
がある。世界唯一の平和憲法は捨てられない。

そして捨てるものは原発である。東日本大震災で起きた福
島県原発事故は八年経つても、まだ処理出来ず汚れは溜る
一方である。農産物は放射能の風評被害で出荷も滞つ
た。やっと放射能の数値が下がり健康に異常がない事になつ
て来たのだ。世の中に絶対安全などと言うものは無いのであ
るから、地震災害の多い日本の原子力発電が抱える不安は多
大である。廃棄への舵を取るべきである。

時は流れる

舘野ひろ子

県営総合運動公園の周辺が一変していた。

この地の象徴でもあったマロニエの並木が、一本残らず伐採されてしまっている。

大木に見合った花々、艶やかな栗を思わせる栃の実、真夏の強烈な日差しをさえぎり、集う人をほっとさせる特大の葉、時の流れとは言え、マロニエへの愛着、郷愁は消し難い。

その時マロニエの赤い花咲く街並みの記憶が甦った。

「気分転換に海の方へ行くか」

千葉に住む妹との電話の中で、お互いの愚痴話から話が飛んで、公園の街バンクーバーの旅は実現した。

妹はインスリンを一日四回注射することで、体の調子を保っている糖尿病患者。体の調子が万全でないのは、私とて同じである。旅先のどんなおいしい料理も、目だけで我慢し、ときには拒否反応さえ出してくるという胃袋のない私なのだ。

糖尿病と胃の無い二人の旅、それは全期間食事のつかない旅を良しとして、命綱のインスリンをお供にする妹と、レトルトのお粥のパックをカバンにしるばせる私との、様にならない旅であった。

日本人客を乗せたバスの窓には、赤い花のマロニエ、そし

て木々の間にまっ黄色なエニシダが広がっていた。白い花のマロニエは、あまり多くないらしい。赤い花が一般的なのだろう。私が日ごろ目にしてはいる栃木のマロニエのイメージに程遠い。この辺りを見る花は、朱色と赤を混ぜて、深緑の葉に塗り付けたような、くっきりした鮮やかさがある。

「この街路樹の和名は何て言うんですか」

乗客の一人がガイドに声をかけた。すかさず私がしたり顔で言ったものだ。

「栃の木です。栃木の県木です。宇都宮市の街路樹は、栃の木がほとんどなんですよ」

かつて私にまだ見ぬフランスを思い描かせたマロニエ並木。青春時に夢に出てきた叙情的風景での並木。今では私の住む県木で珍しくない。しかし外国というだけで、詩情も高まる。

空はくれて丘の涯にて 輝くは星の瞳よ

なつかしのマロニエの木陰に

ふと遠い昔に耳にしたメロディーが口をついて出た。

あれから、二〇年余過ぎた。その一年後、息子が輪禍に遭遇し、意識障害となり老いた私を頼りしている。妹は連れ合いを失くした。

時は流れている。昔を引きずりながら八十路を生きたくはない。辛い過去は捨て、めまぐるしい世の中の変わり様に目を白黒させながらも興味を持って生きたい。

時々ブログを更新し、百人の訪問者がいたと一人ほくそえむ。おしゃべりできる仲間と食事も楽しみたい。ささやかに、しなやかに、したたかに、私は生きたい。

地元のすばらしさを

再認識しよう

水野 弥彦

最近、ある新聞のコラムに知り合いの大学教授が「近ごろの学生は、スマホやインターネットなどで各種情報を手でさるせい、地域の歴史や地理に極めて疎くなってきている。将来に不安が残る」と指摘していた。朝の通勤通学時、電車に乗り合わせてみると一目瞭然だ。座席に腰掛けている乗客のほとんどは一樣に手にしたスマホに目をやっている。その中に年輩者や参考書に目を向ける学生らがわずかに本などを手にしているといった異様な光景が広がる。ひと昔前までなら、とても想像できない程だ。高度に発達した情報化社会のなせる結果なのかも知れないが、果たして、これからの社会の先行きに少なからぬ不安と疑問を感じずにはおれない。

政治の社会でも然り。自国第一主義を唱える他国の指導者の影響で、世界の協調態勢に軋みが生じ対立の構図も色濃くなってきた。不安材料が増幅するばかり。国内政治でも政治家や官僚の「忖度」が罷り通るだけでなく、政治家の不適切発言が横行し、政治不信を招く結果に。加えて地球温暖化による異常気象の加速。従来の常識を大きく越えた被害地域の拡大は、どのように捉えたらよいのだろうか。理解に苦しむところだが、ただ間違いないと言えることは、我々が住んでい

る地球環境が大きく変わってきていることだけは確か。

そんな中で十月から消費税の増税である。年々膨らむ社会保障費。少子・高齢化社会を迎える上に厳しい人口減少社会に入った。国の借金一千兆円。将来の行く末に不安を募らせるばかり。令和の時代に入った今こそ、思い切った構造改革が必要な時であろう。

その手始めは国会議員や地方県市町議員などの大幅削減に手をつけることではあるまいか。国や地方自治体が率先して見本を見せないことには、あらゆる施策についての国民の理解は得られまい。

日本古来からの人情や人への親切心は、まだまだ揺るぎなく健在だ。栃木県の場合は全国的にみても災害の少ない県である。水と空気が清らかで自然環境に恵まれている。

私の場合、三十年程前に矢板市内に自宅を建て、長い間、新幹線通勤組の一人だった。静岡県出身で学生・社会人時代は東京暮らし。亡妻が大病して矢板に住み出したので、俗に言うIターン組なのだ。令和の時代、栃木県はもっと従来の発想を変え、移住を希望する人たちに積極的にアプローチすることを怠ってはならないような気がする。それだけの価値ある自治体だからだ。

相棒は好奇心

綾部 健二

地元新聞への投稿を皮切りに、自治体主催の芸術祭への応募等で青春期を過ごした。中期以降は、全国横断的な詩誌、冠に（日本）の呼称を有する各文芸団体のメンバーになっていった。自分自身の座標軸、言い換えればステータスを確認するものであったと言っても良い。だが今は、ほぼすべての詩誌・文芸団体からは距離を置いている。捨てられないものは創作の原動力「好奇心」のみ。私の生涯の相棒である。

昔ながらのシンプルな折りたたみ式ナイフ
その刃紋が午後のひかりをあつめている
ブレードの微妙な曲線も魅力的だ
まぎれもない半世紀ぶりの邂逅

紙を二つ折りにして
折り目に沿って刃先をすべらせる
少年時代に使ったものより切れ味はいい
やはり歳月を経た進化なのか

「少年よ、本当におれを使いこなせたのか」

固有の銘も季節（とき）の底に沈み
いつしか所在不明となったナイフ
いま心の奥をじっと見つめ直したときに
見えてくるものは何か

青紙割込と称される本刃付き
刃先を親指の腹に当ててみる
甦るかすかな痛みとの記憶
遠い日のやわらかな皮膚感覚

「切れる男」と呼ばれることはなかったな」

言われるまでもなく
宿縁を断ち切る男にもなれなかった
鈍くきらめく真鍮製のグリップに
もはや少年ではない相貌が映る

捨てて 始末して 処分して
断ち切って限りなく無に近づくと
自分だけの自分として生きていく
それが ぼくの願いだ

さて 孤剣《肥後守》を抱いて いずこへ

卒業アルバム

柴崎 幸子

山形から帰省した姉と実家を片付けることになった。和室の縁側に、ありとあらゆるものがあふれて山積みされている。姉の指揮のもと、義兄と私と三人で、いるものといらないものに分けてゆく。物を捨てられない両親は、家電製品の空き箱や素麺の木箱など大量にしまいこむ。

姉は即刻、処分を言い渡す。

「そうだ、そうだ、取っ払いても役に立たない」

私は素直に従い、軍手をはめて外に出し、ホコリを払って折りたたむ。指揮官がいるということは心強い。ときばきと仕事が進む。一人でのんびり片付けるのとは訳が違う。

義兄も得体の知れない品物を手際よくビニール袋に放り込んでいる。姉はすでに自宅の断捨離に着手していて、片付けのノウハウをキッチリ身に付けている。

私が少しでも手を止めていると、「トキメキがない物はどんどん捨てて」とはっぱをかかれる。

「べつにトキメキはないけど、まだ使えるかも」

と思いつながら、一人モタモタと手を動かす。床が広くなってきた。奥から革の表紙のアルバムがあらわれた。片付けに飽きてきた私は、ひと休みしようとそれを手に取った。

表には姉が卒業した高校の名前がある。

「お姉さんの高校のだよ、義兄さんも見たいよね」

中を広げようとすると、姉はピシャリと言ふ。

「見ない、見ない。もう見ないから捨てて」

「えっ。卒業アルバム捨てちゃうの、本当に？」

「見たいときは友だちに見せてもらうから捨てて」

卒業アルバムはときめくよね、義兄さんも見たかったよねと思いつながら横目で彼を見た。そうでもないらしく、淡々と仕事をこなしていた。そうして姉の卒業アルバムは本人の命令によって実家から離れていった。

私の卒業アルバムは、実家の本棚に仕舞われている。

高校の先輩で何かと相談する女性がいる。先日、話をしていると、当時の恩師と手紙のやり取りをしているという。

長年学校に勤めていた先生なので、私も名前は知っています。

見せてもらったハガキには「北海道で元気にしています。貴女もお元気です」と文字を引く線が左右に揺れているが、そこからはやさしさが伝わる。

「そうだ、北海道に行こうよ」

先輩に提案した。「そうだね。いいね」と話が進むうち、どうも私が考えている先生とは違う気がしてきた。

実家に行って卒業アルバムを開き、教職員のページで名前と写真を見比べる。

「違った」

すっかり勘違いをしていた。開いたアルバムを膝にのせて思う。私はまだ卒業アルバムを捨てるわけにはいかない。

遠いみちのり

古谷 耀子

花言葉は、「繊細」「はかない美」「強い意志」

令和となつてはや数か月が過ぎた。

元号の変つた今年こそ、わが身の佇まいを修正するラストチャンスと意気込んでみたものの、身についた長年の習性は令和となつても捨てられなかった。

九月のある日、わが家の「月下美人」が二輪開花した。

「ご覧になつて」と言わんばかりに、純白で華やかな大輪の花を咲かせて芳香を放っている。

夕刻になると蕾が開き始め、夜半に全開となつて翌朝には萎れる。萎れた花弁は終焉を恥じるかのごとく下を向き、決して辺りに舞い散ることはしない。名のおり美しく奥ゆかしい花だ。

じつと花を見つめていると、「あなたはいかが」と問われているようで「私は……」と口ごもる。華やかに咲くこともかなわず、萎れどきも彷徨している身を隠したい思いにとらわれる。

毎年、開花する数日前から今日か明日かと待ち焦がれ、咲き終わったら余韻に浸りながら来年への準備を始める。これまではその繰り返しに終わっていたが、今年が月下美人をさらに知ろうと書物を開いた。

鉢を家の中に入れて、蕾が開き始めてから全開するまで見続けた。全開時には香りを家中に漂わせて気高さを主張し、日常の平凡な空間をまたたく間に非日常の贅沢な場に作り変えてしまう。

私は「月下美人」の見事な咲きぶりを見てから妙に落ち着かない日々を過ごしていた。

花言葉の「強い意志」、これは私への今後の指針なのでは？ はたまた現時点への警告では？ などと思いつめぐらしてみものの結論は出ない。

先日、友人と談笑中に、私の自己主張の強さを見抜いた的確で痛切な助言とも取れる「あなたにコーラスは向いていない」との言葉を受けギクリとした。それはかねがね自覚していて、修正したいと強く思っていた。「その通りでございませう」と謝りたかった。今からでも遅くない、「強い意志」で変えるのは今だと感じた。

課題は「自粛」、そう決めると少し気持ちが悪くなった。「ジシユク」「ジシユク」となかば浮かれながら、友人にも「目標は自粛です」なんて携帯メールを送っていた。

数日後、ある会の幹事から、末尾が「よろしくお願ひします」で結ばれている連絡メールを受け取った。控えめに生きようとする私には、「こちらこそ」というところを「オマカセクダサイ」と返信していた。

母の着物

関根喜久枝

母が亡くなる十年前のある日、何の連絡もなく着物が送られてきた。以前に「もう腰が曲って着物が着られなくなった」と言っていたのが思い出された。私は最近ゴルフの練習にあけくれる日々で着物を着る機会はめったにない。とにかく箆筒の中を整理し中も見ずにたとう紙に包まれたまま納めた。

母は幼い時に両親が離婚したので、祖父に引き取られ育てられた。祖父は東京向島で手広く炭問屋をしていて、同じ敷地内に親類の家が三軒あり、隣家の叔母さんにとっても可愛がられたそうだ。叔母さんには息子が一人いただけだったので娘の様に慈しんでくれたという。私が高校生の時一度だけ、「お母さん、自分を生んでくれた実の母親に会いたいと思っただ事ない」と尋ねた。「ないわね。風の便りにもう再婚したって聞いたけど」そっけないその返事に意外な感じがした。母親がいなくても愛情持つて育ててくれる人がいれば子供は育つと本で読んだ記憶がありその時の母と重ね合わせた。祖父は一人娘の母を不憫がってか、二十歳を過ぎると毎月呉服店で着物を誂えさせた。母は「そろそろ世の中が戦時色に染まる頃になっても着物を注文するので気がひけた」と言っていた。

私が結婚する時、母が若い頃買い求めた着物を仕立て直して持たせてくれた。大胆な模様の訪問着やモダンな帯が多かった。中でも紫の緞の生地は紫陽花のしぼりを染め抜いた振り袖は斬新で驚いた。友人の踊りの発表会に着ていったが、夏の着物なので着る機会がなく一度手を通したただだった。

母は八十九歳で亡くなった。送られてきた着物を広げてみた。今の私の年齢にマッチしたグレーや紺の着物、それに夏の喪服一式があった。古い着物なのに染み一つなく手入れがゆき届き母の思いが手に取るように伝ってきた。何でも完璧にこなす母らしいと涙が滲んだ。母の葬儀にはその喪服を着た。

私も七十三歳になり箆筒にしまったままになっている着物を持って余し「どうしようか」と悩み始めている。今になってみると誂えた着物すべてを私に送ってきた母の気持が良く判るようになった。そういう年齢になったという事か。

災害の無い令和に

国井 和子

新しい何かを迎えることは、喜びと期待が伴なう。ちょうど新年を迎える時の気持ちにも似て、新しい元号の時代は、どんな歴史を残すのか、或は新しい何かをもたらしてくれるかもしれないという気持ちになる。

平成の三十年間は、実に災害が多かった。それも想定外といわれる従来には無かったような形態で襲ってきたものばかりである。

地震では、平成七年の阪神・淡路大震災、十六年の新潟中越地震や、二十三年の東日本大震災では、死者・行方不明者が二万二千人余にもなった。

突然の噴火もあった。平成三年には雲仙岳噴火、二十六年に御嶽山噴火。それらに加え、西日本豪雨など台風の被害が多い。土砂崩れや河川の氾濫など、いずれも多くの死者・行方不明者が出ている。

令和の時代は、これらの災害からすばと縁を切れることが最大の望みである。今、地球温暖化のようすから、今後どのようなことが起こるか想像がつかない。しかし、人間の叡智は、災害から人間や文化遺産を守る新しい何かを発見し、人類の発展を続けていくことになると思う。令和の時代にそれを期待したい。

戦争の最中の私

安西 悠子

昭和、平成、令和、と、時間は経過しているが、年号の推移とは関係なく、捨てられるもの、正しく言えば、捨てたいと思うものがある。

それは、私の、青春の思い出のうちの一つである。捨てたいと思うもの。大東亜戦争の最中、偵察機や、B 29 という爆撃機が南の海上から本土へ頻繁に飛来していた時の事。食糧は乏しく、慢性的な飢餓状態になっていた時の事である。

夏休みが終り、帰京しなければならぬ私に、祖母は晴着を売って、作ってくれた砂糖のたつぷり入った「おはぎ」を持たせてくれた。東京の寮舎に居る、九州や四国からのクラスメートと一緒に食べる様にと、重箱に、ぎっしりと詰めてくれた。彼女たちは、帰省できないでいたのだ。「重い」、私は、汗を拭いながら寮への坂道を登る。すると、白いパラソルをさした若い女性が、「大変ね。持ってあげましょう」と近づいて来た。私は、内心、助かったと思った。が、その後、持ち逃げされるのではないかと、不安が押し寄せてきて、「いゝえ、結構です」と、重箱の包みを抱え直し、奪われまいとした。人の好意も素直に受け入れられない悲しい心になっていったのだ。

街には特高警察がソフト帽をま深にかぶり歩いている。社会主義者で無く、純粹な読書欲から、「マルクス」の書物など読んでいるのが知られると、すぐに、留置場に入れられるのだ。ひもじさのあまり、人を極端に警戒する偏狭な心の、戦争中の想いは、捨ててしまいたい。

捨てられないもの。それも又、私の若き日の思い出である。父にとっては、はじめての児であった私は、振り返ってみれば、特別な扱いを受けていたようだった。父が存命中には気づかないでいたが、今は、無性に懐しい。

女学校に合格した折、「御褒美だ」といって、鎌倉に連れて行ってくれた。鶴岡八幡宮の大銀杏、七里ヶ浜の漣、江之島のさざえの壺焼き、太平洋の煌めきは、今も鮮明に思い出す。

それから、暫らく経った或る秋の日、父は、日光湯元まで、ハイキングに連れて行ってくれた。この折は、弟も加わった。戦争が徐徐に激しくなつてゆく時であったが、賑やかな小さな旅であった。往きは、ケープルカーで明智平までいき、帰途は、いろは坂を徒歩で下った。途中、不意に気付くと、弟の姿が無い。父も私も息が止まる思いであった。探しに戻ると、日光発宇都宮駅行の最終バスに乗りおくれる。呆然としている父と私の目の前に、一台の立派な外車が止まった。そのドアから降りたのは弟であった。中禅寺湖畔にあるドイツ大使館の別荘に来ていた職員が帰京する為、いろは坂を下っていたところ、幼い兄が歩いていたので乗せて来た、との事であった。父の心配をよそに、弟は、ドイツの車に乗せてもらった、と、御機嫌でいた。今は、帰ることのない、父と弟の思い出は、捨てることはできない。

青春のレター

螺良 君枝

捨てないで持っていた青春時代の手紙。昭和一桁生れの意志疎通の方法は、葉書（五円）手紙（十円）でした。学生の時届いた封書は、父親が検閲する。差出人の男性も然る者、素敵な女性の名前なので検閲を免れた。検閲で驚いた事がある。小学校での幼馴染が上京して、兄の経営する工場の封筒で、年度手紙をくれた。進駐軍の検閲済になっていた。

つれあいとの交際は、新聞の文芸欄投稿者の、ペンフレンドである。結婚に至る迄、七年の歳月が流れた。手紙の数も二百四十通余り。当時「愛の形見」等と誇ったが、今ではダンボールの中で眠ったままだ。

一九五七年、私は小学校の教師をしていた。町で一番大きい学校で、担任は六年四組。五十四名。五年、六年と持上りだった。秋の教室での昼休み、男女十二、三名と談笑する。

『結婚を半年後に控えた報告の手紙の一部』

女児「先生いつまで一人でいるの？」

私「ませてるわね。催促？」

女児「だって、三組の富田先生は、去年から銀行の人ときまっているんだもん」

私「じゃあ、なぜ結婚しないの？」

女児「おかあさん、反対なんだと」

私「そんな話、どうして言いだすのよ」

女児「私、家の人に聞いたんだもん。先生郵便局の小野さんに、はなしあるんだって」

私「小野さんて、知らないなあ」

児童「三組の先生は銀行員で、四組の先生は郵便局かあ。親類なあ……」みんな笑顔になり楽しそう。「先生いっぱい手紙出しているのかなあ」「小野さんて美男子かなあ」雑音でいっぱい。みんな好き勝手な事を言って、面白がっていた。

小学校の最上級生になり、大人の話や噂話に敏感なのです。独身の最後、二年間担任した故郷での六年生は、学力や団結力に勝れ、天真爛漫生涯忘れられない、楽しい学級でした。つれあいの手紙の文字は、原稿用紙から食み出しそうな太ペンで「私は酒も苺も嗜みません。百歳迄生きて君を守る。」等と豪語していた。私も返信で「私より先、絶対死なない……と、約束して下さい。」等と真面目に書き送った。

過日令和の五月の命日、菩提寺より塔婆を戴き、二十七回忌を無事に済ませることが出来た。

結核で早世したKさんからも、五年間にわたり、詩や詩論の手紙が沢山届いた。端正な文字は、新聞の活字の様にぎつしりと並び、細かい小さい文字が、並んでいる。芸術的で、立派な文章です。惜しい人を亡くしました。

古い手紙の数は青春の証。喜びや楽しさが、ぎつしりと詰まっている。読めば沸沸と想い溢れ、心跳る風景画の数が、今でも胸に広がり、心に沁みて迫ってくる。

試験

早見 千代

捨てるということとは、自分のものを自分の意志で始末するということだ。自分のものになるものとはいろいろあると思うが、私について言えば若い頃は転職を繰り返したので、せっかく身に付けた職業を無駄にしてしまった。

私は三十代の前半頃、ある人に頼まれてタイプライターで文集をつくることになった。「〇〇税理士事務所にタイプライターがあるからそこへ行つて」。私は仕事が終わってから、十日間位通つてタイプ打ちに精を出す。だが長い間タイプから遠ざかつていたのでなかなか捗らなかつた。が、ようやく形になつたちようどその頃、税理士が「うちの事務所で働きますせんか」と言つてくださった。雰囲気にも慣れてきていたのでその事務所働く事となつた。

何の資格もなく算盤が少しはじける程度の私だったが、一人の職員が仕事を終えた時間外に簿記を教えてくれた。家では過去に出題された問題集を解きまくつた。簿記の試験は年に二回あるのでさっそく試験を受けた。三級が受かつた。それからすぐ二級の勉強を始めた。同じように問題集を解いた。

しばらくすると職場のM嬢が、「私の家へおいでよ、一緒に勉強しよう」と言つてくれた。彼女は税理士試験三科目を取得していてあと二科目取得のため頑張つていた。所長の片

腕としてバリバリ仕事をする切れ者だ。それから毎週木曜日に彼女の家へ出掛けて行つて、解らないところを教えて貰つた。

人より十年遅れてこの仕事に就いたので大変だったが、職場の人達とも親しくなり仕事がおもしろくなつてきた。

ある晩M嬢が「今夜は遅いから家へ泊まっていきなよ」とすすめてくれた。お風呂に入つて布団に入ると乾燥機でフカフカのホッカホカの布団になつていた。私は彼女の温情を感じつつも疲れた脳は、私を深い眠りへとすぐに導いて行つた。彼女のお蔭で次の試験で簿記の二級も受かつた。数年後M嬢は念願の税理士となつた。

私は約二十年間この仕事に就いていたが、ちよつと勉強したいことがあつたので五十四歳でリタイアした。

平成の終り頃、私は住み替えをしたので箆箆等家具類、電化製品、寝具、服、本類、食器、多くの物を捨てた。そして家も解体して、地主に返納した。その家は増築、改築などかなりお金を費したが止むを得ないことだつた。

令和の時代に私自身の命は尽きると思うが、健康で動けるうちは今ある生活道具は何が欠けても不便だ。自分がどうにもならなくなつて動けなくなるときを考えると、回りの人々に迷惑が及ぶので、できるかぎり身辺は整理しておいた方が良いと思つている。「シンブル イズ ベスト」を心掛けて生活していきたいと思つている。

時代を映す言葉

佐藤 孝子

〈捨てられないもの〉

・ かいつぶり漢字で書いて鴝鵒 夫に意地悪言ふ暑き日は最近作であるが、多くの響感を持った「鴝鵒」である。これは絶対に〈かいつぶり〉とフリガナを要するという。そこで反論した。初句に〈かいつぶり〉とひらがな表記してあるのだから〈鴝鵒〉は当然〈かいつぶり〉と読むことは分かる筈である。このややこしい漢字で凌ぎ難い暑さを間接的に伝えたのだからフリガナはつけたくないのである。

わざと難しい漢字を使って読み手が惑うことを楽しんでいるのではないか、という感情論まで出てきた。

例えば次の歌、

・ 綿の花詠はむとして醸しおくゆふかぜといふひらがな四字

この「綿」は「綿」ではいけないのかという。「綿」は木わたであり「綿」は実の方をいう。この違いを楽しむのも短歌に関わる楽しみと思うのだが・・。

さらに〈ゆふかぜ〉の旧かなも譲れない拘りであり、〈捨てられないもの〉の最たるものである。「やはらかき」「恋ほしむ」「ものおもふ」「危ふし」と旧かなで表すとき、やわらかく、恋いつつ、もの思う、こころの危うさが静かな輪郭を

もって歌の中に息づく余韻の美しさ、これこそが短歌でしか味わえないものである。と旧かな派は意固地である。

文語、旧かなは捨てられない。

〈捨てられるもの〉

口語短歌が量産されている。カタカナ語の氾濫する昨今の日常語から短歌の世界まで、口語の侵略は止まるところを知らない勢いである。

昨年度の〈現代歌人協会賞〉を受賞した歌集『メタリック』から引いてみよう。著書は一九八三年生まれの男性である。

・ へきさごん十べんたごん 割り切れぬものがあふれる東京がいい

三句の「割り切れぬ」は文語、結句の「東京がいい」は口語である。口語を自在に駆使して現代を詠う著者であるが、短歌の宿命として切り捨てられない文語が、古傷のように顔を出す。因みにこの歌集は旧かな表記である。

口語の歌の流行に乗ってみた。

・ こんな夜は梅酒ひと口こんな夜のこんなは昨夜の続きのやうだ

恥ずかしながら失敗作である。〈・・こんな〉の重なり（しかも三つも）が機能していない。結句の〈・・やうだ〉の雑なこと。身に付かない言葉は〈捨てられるもの〉、否〈捨てられるべきもの〉なのであろう。

言葉は時代を映す、それを十分に咀嚼しながら時代を映す文語定型の短歌の可能性を模索してゆきたい。短歌は〈捨てられるもの〉と〈捨てられないもの〉の両面楽しい。

悪感

戸井みちお

新年号が「令和」と発表された時、私は一瞬耳を疑い目をしばたき、一体これは何なんだ、マジか？アイロニーか？そして安倍首相の典拠説明をきき正に嘘八百を愛する人の陰謀だと思ってしまった。

昭和に生れ昭和に生きた我々にとって「令」とは「命令」以外の何ものでもない。辞書（日本国語大辞典）を引いてみよう。①にいいつける、命じる／命令、号令、指令、辞令、伝令、令状、令旨と続き②におきて、法律、のり／法令、勅令、省令、政令、禁令、③長官、おさ、取締り／令長、県令、家令そして④に初めて首相の言う「よい」「立派」が出てくる。令月令士令日令人令色。そして⑤は他人の親族に対する敬称／令兄、令室、令嬢、令息、令夫人。

噫、と私は思う。昭和から平成そして昭和に和すが如く令和。昭和がどんな時代だったか、昭和を生きのびた人間にとつては悍しくも残酷な時代だったと言うべきか、今にして振り返ればわが青春はそこにあり、真の思想は真の不自由さから生ずると言うからあの不自由さが、私のバックボーンを作ってくれたと思えば、少しの愛おしさはおぼえるものがある。

大正デモクラシーと言われた時代の末期、関東大震災がお

こり、混乱の中治安維持法が制定、やがて改元昭和になり、大恐慌に見舞われると、治安維持の名のもとに維持法は強化言論の弾圧統制の中、満州事変へと突き進んでいった昭和。五族協和、東洋平和、の美名のもと大東亜戦争へと突入していった昭和。やがては国家総動員法のもと、国民徴用令につづいて学徒勤労動令。学校閉鎖、若者は工場へ戦場へ——令、令の号令下、「進め一億火の玉だ」噫、そして空からは火の雨鉄の雨降り注ぎ——戦争は終わった。

幾百万か数知れぬ屍の上に建てられた墓標新憲法。九条の柱に守られ、昭和の後半四十年腹すかし身を削り、国の為にと殺され死んでいった人たちへの償いのように、働き働ぎ働いて築いた「アズナンバーワン」地平天成の「平成」へとつないできた昭和。

昭和を喰いつぶしつつ曲りなりにも「内平外成」の三十年をすごした「平成」とみえたがその終りをみれば、阪神淡路の大震災、東北の天津波から原発のメルトダウン。熊本から北海道と、山津波やら洪水やら天災人災休みなし。内憂外患ここぞとばかり、危機を煽って危機作り、どさくさ紛れに次次と法令作り。安全保障関連法から秘密保護法、カジノ法。そしてとうとう「令和」うるわし清しよるこぼし、言葉の綾に飾られて典拠は国書と喧伝し。

しかしやはり「令」の本態は命令号令指令法令、色目をつけても巧言令色鮮弁仁か、令嬢令息令夫人。令は怖い。平成は終わった。次なる新しい時代を美しい日本をと声轟かせた号令に和して突き進む令和日本。そんな令和の日本が昭和の日本と重なって見えるのは私の眇か。それならばいいけれど。

つぐなつて、去る

唐澤るみ子

「どんな時代も、どんな時代も、時代というもんはね、人間を助けないよ。ただ染めるだけだ。人間を染めてね捨てるだけよ。」「みんな燃やしてね、捨て切つて逝くのよ。人間に出来ることはそれくらいよ。」「おけいさんはそう言われたのだつた。忘れ難い言葉だつた。

群馬県の北の涯、穂高の山裾の村、川場村で私はおけいさんという老婆と出会つたのだつた。まだ私は若かつた。おけいさんは身の廻りの物という物をカマドにくべながら、怖れを知らぬ少女のような物言いである日私へそう言われたのだつた。「令和―捨てられるもの捨てられないもの」という、テーマを見た時、まさまざとおけいさんが私によみ返つたのだつた。あれから四十余年。私自身があの頃のおけいさんの年齢になつてゐる。

その頃、群馬県の生んだ歌人、江口きちを調べて歩いてゐた私は、きちの生れた川場村でおけいさんと出会つたのである。腰が曲り夏には夏のぼろを冬には冬のぼろを身のどこかに纏つていたおけいさんは村の古い寺の女主人だつた。勉強が一番でも、村のはぐれ者の貧しい家に生れた江口きちとは幼なじみで、きちの、あの若き日の自死まで、二人は互いに敬愛しあふ親友として生きたのだつた。

山々が迫る小さな村で生まれ、その村の中だけで生きたおけいさんの、見識の高さ、少女の様でいて時に鋭い刀をかざすその物言いは、おけいさんがこの小さな村で、世の事も人間の事も、見るべきほどの事は見尽くして生きた、という自身への自尊を伝えて余りあるものがあつた。

おけいさんに従えば、明治も昭和も平成もそして令和も、「時代はね人を染めるだけよ。助けないよ。」となるのだろう。「だからね、人間はね、みんな捨て切つてね自分を終りにすることよ。」という、あの日の言葉が胸に迫る。

それは別のある冬の日の夕暮の事だつた。おけいさんは何時になく私を凝つと見詰めると、こう言われた事があつた。「あのねえ、人間最後はね、つぐないをしてねえ、生き終えることよ。」と、「人つてねえ、償いをしなきゃいかん人ほどしないで逝くよ。しなくてよい、涙が出るような、あんたは償つて貰う人だよと思う人ほどどうしてもどうしてもつぐないをしようにとするのよ。」と。つぐなうこと……。

川場村を最後に訪れた日の事だつた。寺におけいさんは居られず乳母車もなかつた。私は川場村の一本道をおけいさんに会う為歩き出した。遠くに人が二人見え一人はおけいさんだつた。おけいさんは体が弱つていく最後の日々も自分の畑で咲かせた花を乳母車に載せ自分もその乳母車に縋つて、村を巡つて歩いてゐた。あの花とおけいさんの人生の何か隠された、つぐないの、花だつたのだろうか。今も遠く、花を配つて歩く腰の曲つたおけいさんが見える。私は目をつむる。つぐなうこと。つぐなうつてから死ぬこと……。

レンズの明暗

小島 延介

家の中の畳の上でつまずいて転び、メガネのフレームが曲がってレンズに傷が付いた。十年近く使ったものだから、未練はなく新調した。

初めてメガネを買ったのは、大学に入ってから。広い階段教室の授業がほんやりにしか見えずに必要に迫られた。それから約六十年、いくつメガネを取り替えたのだろうか、片づけてある戸棚を調べたら、ケースに入ってたまま十一個が出てきた。

私は近視と乱視に老眼が加わっているから、新聞や雑誌などの印刷物とテレビやパソコンを見るときにはいちいち外している。それはそれで面倒ではないのだが、この頃は外して置いたところを忘れてしまい、「メガネ、メガネ」と家の中を探すような始末。それでもこの年齢まで世の中をはっきり見てこられたのだから、捨てるのは忍びない。

だが、壊れたまま仕舞っておいても邪魔になるばかり。元号が令和となった機会に捨てようと思っても、どこへ持っていったらいいのかわからない。

同じレンズでも、メガネは人生といっしょに通りすぎて行くが、カメラは目にした光景をしっかりと記憶に焼きつけてく

れるから、ご用済みなどなるはずがない。

カメラ歴は二十代の二眼レフに始まって、現在の小さなデジカメまで十台を超える。

とくに記者時代には、カメラメーカーに勤めた高校時代の友人に社員価格で買ってもらった、月給の三倍もする一眼レフを肩にかけ、広角から望遠レンズまで付けて走り回った。

当時のカメラにはプラスチック部品が使われてないから、重くて次第に肩に食い込む。そんな苦勞をしながら撮った写真は、子供や孫の成長の記録を含めれば数千枚に及ぶだろうか。

その中で自慢できるベストショットは、五十代に撮ったストックホルム（スウェーデン）のバス停に待つ五人。

停留所内の赤い内壁は落書きだらけ、その前に中年の女性と女兒二人、女兒は「いないいないバー」らしいポーズで楽しそう。左端には大きなサングラスを掛けた日本の女優似が一人、そしてしゃがんでこちらを睨むひげ面の中年男性とバッグに入られて首をのぞかせる子犬の、合わせて五人と一匹、その構図と表情は群れを抜いていると自画自賛している。

我が今市

高橋 曉美

令和になって間もなくの大安吉日、実家を売却した。生まれ育ち、結婚してからも市の郊外に移るまで五年間住み、現在は娘一家が住んでいる。

昭和二十四年の今市地震にしろうじて耐えた家だ。

「孫育ては私がちゃんとするから、あんたはしっかり勤めあげて、すきま風だらけのこの家を退職金で建て替えてね」と母と約束した。

約束を果たせないうちに母は逝ってしまったので、せめて父のために新築したいと退職金で家を建て始めた。かかりつけ医に相談してのことだったが、年には勝てず、仮住まい中、父は肺炎で亡くなった。二十五年前のことだ。

ほどなく、娘家族が四人で実家に住むようになり、私はその近くにひとり暮らしを始めた。

自分の好みどおりに建てた家に子孫が住み、家を守ってくれることに安心していた。

街中なので車がなくてもことたりる場所だった。

数年前から隣接地に大型商業施設が建つという噂があり、二年ほど前に本決まりした。整地業者に頼み込んで見せてもらった図面に驚愕した。

実家の敷地から二メートル離れた、東側と南側に四階建て

のビルが完成するのだ。出来上がれば二階の寝室のカーテンを開けても、朝の太陽は見えず夜の月も星も仰げない。家の西側はクリーニング店と工場になっているから、冬は冷蔵庫、夏は蒸し風呂状態で、電波障害もいじめない。

うかつにも、商業指定区域になっていたことも知らず、便利な場所にあることを当然のように思ってたことも知らず、便

識者、知人らの意見を聞き、自分でも調べて、商業地域には日照権の主張など適用しないことがわかった。説明会での『日影図』を見ると冬至は一日五時間、夏至は三時間、陽の当たらない家になるということだ。

皆で頭を抱えこんだ。あと数年で定年退職する娘夫婦が谷底のような家に住むのは心身ともに良くない。どこかに移るしかないということになった。

力になってくれた人々のおかげで事業主との話し合いも円滑に進み、家を残したままで土地を買ってもらえた。住む価値がなくなつたとはいえ、祖父母の代から百年近くあつた土地と家を捨てたこと、娘が近くにいなくなることの切なさから、私は体調を崩した。

娘夫婦は、宇都宮市郊外に家を建てることになり、来春できあがる。今まで近くに居るのをいいことに甘えていた娘と、距離を置く心構えもでき、体調もすっかり戻った。

一緒に住むように強く勧められているが、今市を去る気にはなれない。一人で生活できるうちは、今市は捨てられない。夫の眠る先祖代々の墓所をしっかり守り、友人、知人に囲まれて少しでも長く穏やかに令和を過ごしたい。

戦争は夏の季語

福田 三男

毎年八月、とりわけ十五日前後に戦争に関する本を一冊、毎年八月、とりわけ十五日前後に戦争に関する本を一冊、読むことを習慣としてきた。戦後生まれ（トゥーレイトカミング）の一人として、自分に義務付けてきた、と言った方が正しいかもしれない。八月は広島、長崎の原爆忌。終戦記念日など戦争に関する行事が多い。だから私にとって戦争は夏の季語なのだ。夏に戦争を読もう、と思ったのはそのためである。高校生のころだった。まだ戦争が近かった時代。社会の至る所に戦争の傷跡がひそんでいたし、日本人の大多数が戦争体験者だった。そのなかにほんの一握りの戦後生まれがいた。戦争体験者に囲まれて、戦後生まれをどこかで後ろめたく感じたりしている、そんな世代に生まれたのだ。習慣には贖罪の意味も含まれていただろう。

「武器よさらば」（ヘミングウェイ）や「戦争と平和」（トルストイ）など外国の作品から「俘虜記」（大岡昇平）「真空地帯」（野間宏）など第三の新人と言われた日本の作家たちの作品まで、手当たり次第に読んだ。アルバイトの合間。真夏の蒸し暑い日に、扇風機もない狭い下宿だった。隣家からは線香の匂いが漂ってきた。

年齢から言っても当たり前のことだが、第三の新人は戦地に行ったか、行かなかったかはいずれにしても全員が戦争体験者である。人間にとって戦争ほどインパクトの大きな出来事はあるまい。したがって戦争を体験した者と、しなかった者の間には、埋めがたい大きな溝が存在する。

幸い、日本はその後大きな戦争に巻き込まれることがなかったから、非戦争体験者は今も非戦争体験者のまま生きていられる。戦後七十四年、巷に戦後生まれがあふれ、戦争体験者は圧倒的に少数派となった。同時に戦争をテーマにした文学作品もめっきり少なくなった。作家は想像力と創造力を駆使して作品を創る。SFや近未来小説、時代小説など時間と空間を自在に越えて、物語を紡ぎ出す。にもかかわらず、戦争体験のない現代の作家は戦争小説を書かない。書こうとしない。もつと言えは書けない。それは戦争には作家の想像力を超える現実感があるからだろう。経験したことのない戦争を描き切れる力量を持った作家がいまいということでもある。

新しい戦争文学が現れない。そんなことを言い訳として習慣をやめてしまった。捨ててはならない習慣だった。これをきっかけに、夏に戦争を読む習慣を復活させようと思う。いつまでもトゥーレイトカミングでいるために。

その日まで

国母 仁

元号が令和に変わって樹木葬がとびこんできた。

樹木葬は何度か目に行っているがこうして目の前に突きだされる意識をせざるをえなくなる。

樹木葬のパンフレットを持ち込んだのは、カラオケ仲間のY。

彼とは小、中学の同級生。学生時代には特別仲が良かったわけではない。彼はずっと都会で暮らしていたが、定年後、故郷に戻ってきたリターン組。

戻って来てからカラオケの趣味が合い、付き合いが深まっていた。

「今、樹木葬を売りだしている寺に行つて、契約をしてきたんだ」

長く伸びた無精髭に手を当てゆっくり繰りだした。

「契約してきたの。本当に」

「そうだよ。ずっと前から墓を探していたんだよ。あっちこっちのお寺に行ったりしてかなり研究したよ」

幾つもの樹木葬のパンフレットをカウンターに並べた。

そろそろ、真剣に行く末のことを考慮する年齢に達していることは確かだ。

「墓苑でお墓を立てるとなると最低でも二百万ぐらいかかる

と思うとバカバカしくなり、樹木葬にたどり着いたんだよ」
彼には息子がいるが何年も連絡が途絶えているとゆっくり
燻らした。

「どうせ、子供なんて当てにできないだろう。古希を過ぎたら明日はどうなるかわからないからな」
濁つたため息を吐きだした。

パンフレットには永代供養費、五十万円。管理費 五万円。
使用期限 五十年。字彫り費 二万円。

なぜか、彼が帰つた後、使用期限五十年という箇所が気になった。永代供養と謳いながら使用期限があると言うのは、一体どういうことなのか。

一番核心的箇所を訊くのをぶつけることができなかった。
果たして彼も五十年後のことまで考えていたかどうか疑問だ。

五十年後の世界にお墓なんて存在していないのかもしれないから、先のことを考えても意味がないと読んでのことか。

「樹木葬って、いいわね」

妻がタイミングよく口を挟んできた。

「私も前から樹木葬がいいと思っていたんだ」

「お墓なら共同墓地を買ってあるじゃないか」

「お墓を作つても後を引き継ぐ者がいなければ無縁仏になつて仕舞うんだよ」

確かに、後継ぎがない。娘は嫁いで当てにならない。

妻の執念がのど元に刺さってきた。それでもお墓だけは捨てる気にはなれない。いずれ、なにかも捨てる時が来るから。自分自身を捨てる時が来る日まで。

父の本棚

相馬 龍久

令和になり忘れかけていた人から電話があった。いきなり「お父さんの本出しましょう！」と言われた。一瞬戸惑った。少し相手の話を聞いてるうちに思い出した。今から六〇七年前にそんな話があった。その時は何となく立ち消えとなつてしまった。そんなものかと思ひ放つておいた。

令和の出版が万葉集で、万葉集関係の本が売れている、という事である。そこで父の万葉集関係の遺稿を出版しようという事になつたらしい。もちろん商業出版なので私に異存はなかつた。電話を切り落ち着いて考えると喜びが湧いてきた。これで父の遺言を果たせると思った。以前別の出版社の人に訊いたら「今時そんな類の本なんてどこも出版しないよ」とにべもなかつた。私は落胆するでもなく、そういう事かと素直に受け入れた。

出版のきっかけになつたのは引越してあつた。父の残した膨大な量の本。作り付けの本棚にびっしりと収まつていた。さてこれをどうしたものかと悩んだ。結局、ある財団法人で引き取ってくれることになつた。そして驚くことに父の本や収集資料を、コーナーを作り展示してくれることになつた。その展示コーナーをある出版社の社長が見た事がきっかけとなつた。まさかこういふ展開になるとは夢にも思わなかつた。

父の本を捨てなくて良かった。

本の多い家は時として本が夫婦喧嘩の種になる。ある学者さんに言われたことがある。

「きみ、本の敵は何だか知つとるかね？ 湿度だよ。そして……女房だよっ！」

その通りと私は頷いた。

引越しの時は捨てる本と保存する本を明確に定義した。捨てる本は何時でも買える本、必要のないジャンルの本、参考にならない小説などである。保存する本は専門性の高い単行本、何度も読み返して傍線など引いてある本などである。もちろん自分の本であつた。父の本は全てとつておいた。

ところが、私の経験では本と名刺は捨てたとたんに必要になるのである。悔やんでも悔やみきれない経験があれば、尚更のこと本は捨てられなくなる。

本棚を磨くという言葉を最近知つた。限られたスペースの本棚に本がいっぱいに入っているとする。新しく本を入れるためには本を何冊か抜かなくてはならない。そこで捨てる本を心を鬼にして本棚から抜くのである。その本は絶対に捨てなければならぬ。そうすれば必要な本を買わなくなり、自分にとって必要な良書だけが残っていく。

令和の新時代になり自分の本棚で実行してみようと思うのであるが、さてさてどうなることやら。

十八冊のノート

橋本 茂子

○激しさを秘めてたちまち過ぎ行きぬ初雷を耳に君と別れむ

この歌は、二十歳の時作ったもので、私の手元に残されている短歌習作ノートの最初に記されている。稚拙な歌ながら私にとって短歌人生の第一歩を記した記念すべき歌。

黄ばんだ大学ノートは綻びかけ、インクの染みだらけになっているが、一ページには「昭和三十六年 六月六日」の日付けが残されており、この時から現在まで、過ぎ去った時の流れがふいに逆流して来るような思いに捕われてしまう。

机の一番下の引出しは、私の作歌ノートの保管場所であり、黄ばんだり色褪せたりした古いノートやバインダーで綴った紙片等、種々雑多なノート類が詰め込まれている。

この引出しに蔵った後は、めったに取り出すことは無いが、その頃の自分に無性に会いたくなったり、うろ覚えの作品を確かめたい時にページを開くことがある。年代順に蔵っていったはずのノート類は、次第に年代もばらばらになり、机もその引出しの重さに耐えがたくなってきている様である。

いつかはきちんと整理して保管しなければと思いつつ、作業は遅々として進まず、無為な時間だけが流れ、今では、こ

これらのノートをどの様に処分しようかという終活の段階に入ってきている。

この原稿を書くに当って、引出しに蔵ってあったノートを全部出して、確かめてみた。ノートは十八冊になっていた。

初期の頃は横野の大学ノートを縦書きして使っていた。宇都宮の実家の近くの「カドヤ文具店特製」の印字が懐しく、思わず頬ずりしなくなった。この頃のノートにはそれぞれ題名が付けてあり、「白欽木の花」「猿」「金木屋」等々。

次第に縦書きのノートが使いやすくなり、白紙のノートや大判の縦書き大学ノートを用いるようになった。又、厚紙の表紙でしつかり装丁されたノートは、高価でも良い歌が書けそうな気がして探し求めた。子育てと教職が多忙を極めた頃はノートを揃える余裕もなく、身近にある便箋やメモ帳に書き留めてノート代りにした。現在使用中のノートは、久し振りに「碧雲」と題名が付けられ、平成二十九年三月よりと記されている。このノートの一ページ目には

○一人居の姉の寂しさスマホより遠き潮騒のごとく聞こゆるの歌が書かれているが、この姉も既に鬼籍に入りて二年になる。

日記帳も家計簿もいつでも処分できると思っているが、これらの作歌ノートだけは、処分するにはまだく、踏ん切りがつかない。短歌を通しての私の長い人生の記録であり、心の記録であるからだ。

三上 博史

今年の三月、新元号の話題で世間が大騒ぎしている最中、

安倍内閣の某閣僚がこのことでテレビのインタビュアーを受け、新しい元号が何になるのか全く関心がありません、と言いつつ切った。これを何気なく茶の間で見ている私は大変驚いたが、同時に痛快な気分になった。全く同感だったからである。

元号がどうなるかと、単なる名称変更で世の中という中身が変わることはあり得ない。歴史とはそういうものではない。明治から一世一元となったが、年号と社会の動きは全く連動しない。「大正デモクラシー」も「昭和恐慌」もそのネーミングはたまたまその年号だっただけのことである。

さて「捨てられるもの」と「捨てられないもの」とは、二項対立的な概念だろうか。モノ余り、情報過多の時代が続く中で「捨てられる」モノや情報はさっさと捨てていくものである。「捨てる」に、わざわざ可能な助動詞「られる」をくつつける必要はないだろう。ということとは、話題の焦点は必ず「捨てられない」モノや情報に絞り込まれる。

ここまで書いてきて、いろいろほざいているがこの特集のテーマを決めたのは編集委員長のお前だろう、とお怒りになる向きもおられるかもしれない。朝明の毎号の特集テーマは、編集会議でいろいろ議論されたうえで民主的に決定する

ので、手続的には全く問題ないはずなのだが。

実はこの歳でカミングアウトすると、私は多分人より記憶力がいい。自分の人生をどうに折り返している現在、歳を重ねる毎にその力が弱まっていることは、人から指摘されるまでもなく当然自覚しているが、いい事もいやな事も忘れることがあまり好きではない性分なのである。

これを長所として活かし、高三の受験時代、暗記力だけで入試を乗り切った実績がある。受験勉強などというのは、理数系の科目も含めて何でもかんでも憶えればよいものばかりで、憶え方の要領のよさで大学入試の合否判定が決まってしまう。これは言い過ぎだと指摘されそうであるが、強ち間違いでもあるまい。

物事に対して忘れるということを嫌がる私の脳味噌は、モノや情報を捨てるという行為についても面倒くさがる傾向がある。全く憶えがない、いくら記憶を呼び戻しても思い出せないような代物なら、そそくさと捨てて処分することに躊躇いはない。しかし、捨てようとする対象に僅かな記憶の残滓でもあると、もう捨てられなくなってくる。

世間で騒がれているゴミ屋敷について、私にとってこれは他人事ではない。偶に自分の部屋を掃除して綺麗にしようとしているが、なかなか捨てられない。過去（記憶・思い出）が邪魔するのである。

しかしいずれ独り暮らしになる。遠方に嫁いだ一人娘からも既に終活のことを仄めかされている。充分承知しているはずなのだが、どうしよう？ どうしよう！